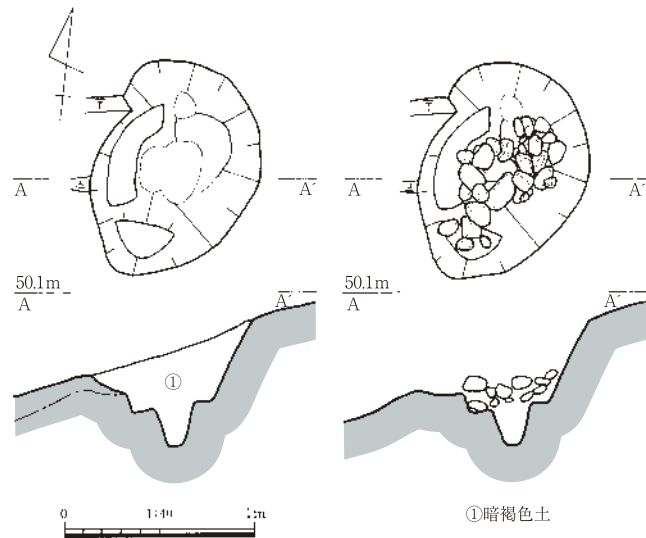


拳大から人頭大の山石が、長軸 1.17 m、短軸 0.82 m、深さ 0.47 m の土坑の中に落ち込んでいる。この土坑は平面楕円形を呈し、地山を掘り込んで作られている。石材には重なった状況が認められ、本来は数段に亘って積まれたものと考えられる。中央部は木根によって攪乱されている。

埋土は、暗褐色土単層である。

出土遺物はなく、時期、性格とも不明である。(牧本)



第241図 集石遺構 4

第3節 西斜面部の調査

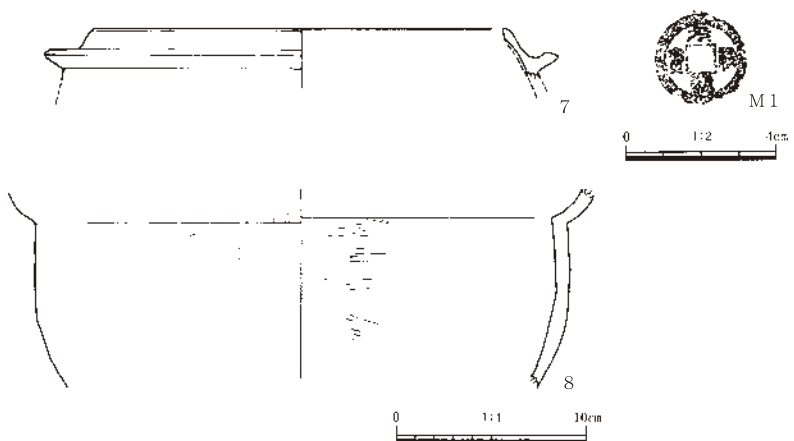
(1) 段状遺構

段状遺構 3・4、土坑 12 (第242・243図、P L.60・70)

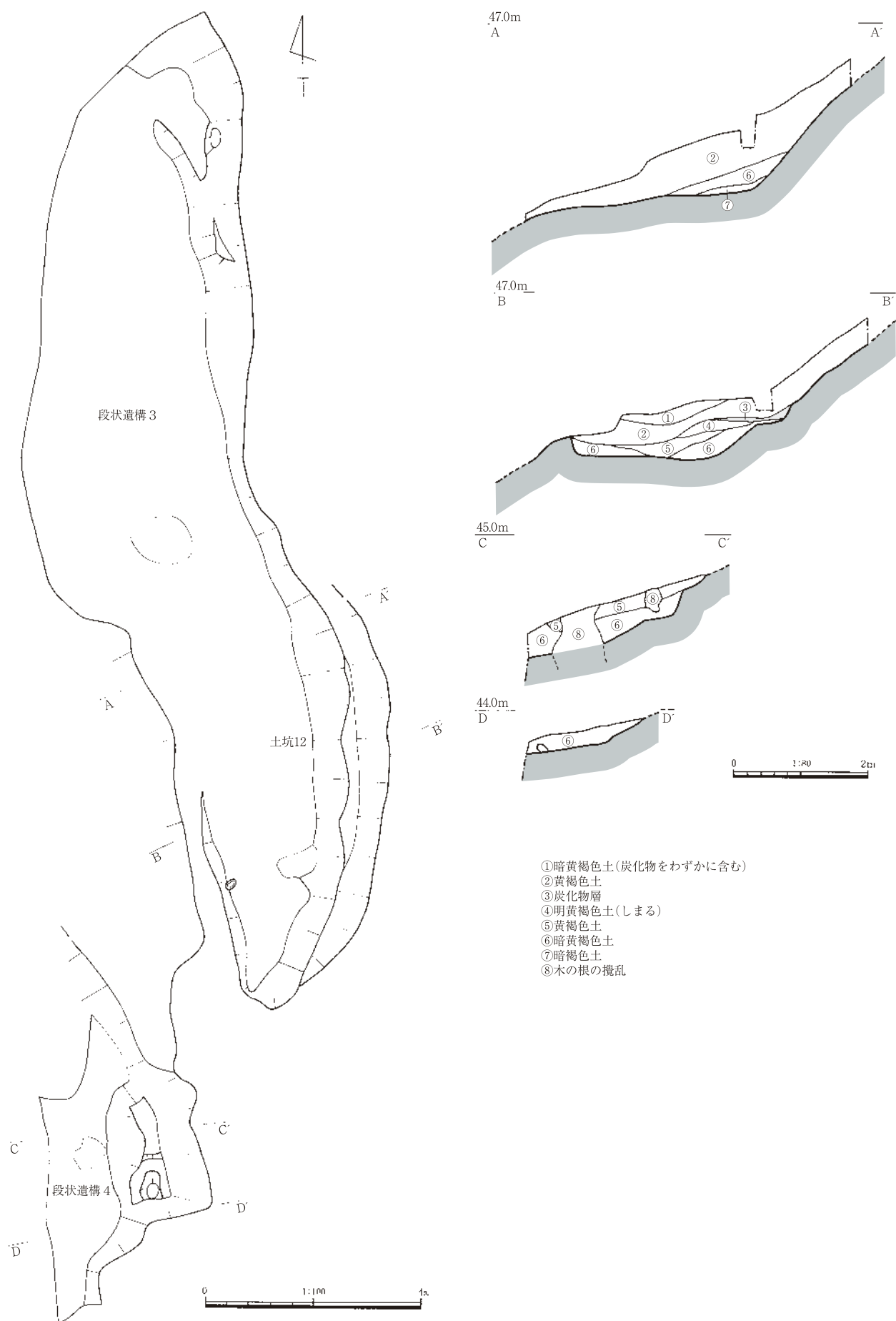
調査区西側、E 7 から G 7 グリッドにかけての標高 43 ~ 45.5 m の丘陵斜面部に立地する。調査前から平坦面の存在が認められた場所である。

段状遺構 3 は、幅 2.5 ~ 3.8 m、長さ 17.5 m 以上を測る。丘陵斜面部を L 字状に掘削して平坦面を作っている。北側は、近代の墓地 (捨て墓) のために大きく掘削されており、遺存していない。西側は流失しており、正確な平坦面の幅は不明である。南側は、後世の製炭土坑 12 に掘り込まれている。

埋土は、3 から 6 層に分層できたが純粋な埋土だけではない。埋土中で製炭土坑 12 が掘り込まれているが、明確な範囲は掘り飛ばしてしまい規模等は不明である。第 4 層上面が硬化しており底面をなしていたものと思われる。炭化材が幅 1.7 m、長さ 3.7 m に亘って出土している。



第242図 段状遺構 3・4 出土遺物



第243図 段状遺構 3・4、土坑12

炭焼きの時期は不明であるが、丘陵上の炭焼き土坑と同時期のものと考えられる。

出土遺物には、埋土下層で土師器羽釜7、元祐通寶M1がある。

段状遺構4は、段状遺構3の南西側にあり、一段低い斜面部に位置する。土壘盛土を除去した後に検出されたものである。平坦面は不整形で、一部二段状を呈す。木の根による攪乱が著しい。

埋土は2層に分層できた。土壘盛土である砂質の層とは異なり、ローム層由来の黄褐色土系の土層で、自然堆積したのと考えられる。

出土遺物には、底面上での土師器鍋8がある。

段状遺構3・4とも、出土遺物から八峠中世 期、13～14世紀ごろのものと考えられ、土壘築造以前のものである。性格は不明である。(牧本)

第4節 東斜面部・丘陵裾部の調査

(1) 盛土遺構

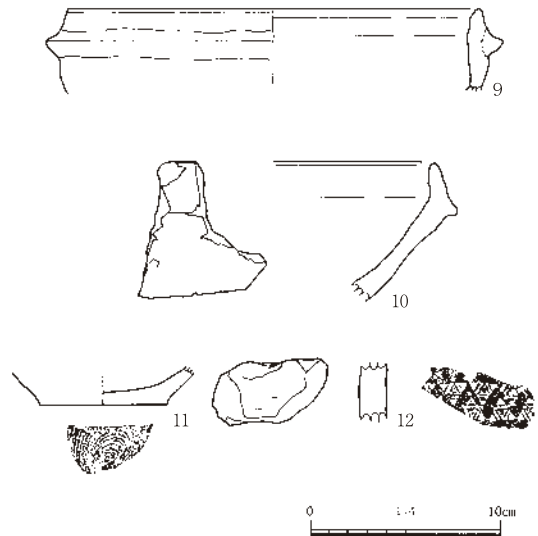
盛土遺構1(第244～247図、P.L.61・62・70)

調査区東側のC3グリッドの斜面部にあり、標高39.0～41.7mからにかけて立地している。調査前は、見かけの幅約7m、長さ約9m、高さ約3mを測る天狗の鼻状に突出する地形があり、これを古墳状の隆起とみなして調査を行った。

この隆起はクロボクとロームの細かな互層によって造成され、古墳の版築を思わせるが、土の締まり具合からは、突き固めた様子は認められない。造成土の堆積は水平ではなく、もとの地形の傾斜と同様に、南西から北東に向かって傾斜している。もとの地形の高さを除く、造成に伴う隆起の高さは2mで、標高41m付近から、盛土を水平にしようとした様子がみられる。山裾側の造成は見かけよりも遠くまで及んでおり、門前上屋敷遺跡の造成土につながっていく。隆起の北西側から北東側にかけては、段状遺構1の造成に伴って手が加えられており、また、隆起の南東側は石組み遺構などの立地する平地部分の形成

に伴って、およそ16世紀ごろに切り崩しが行われたと考えられる。

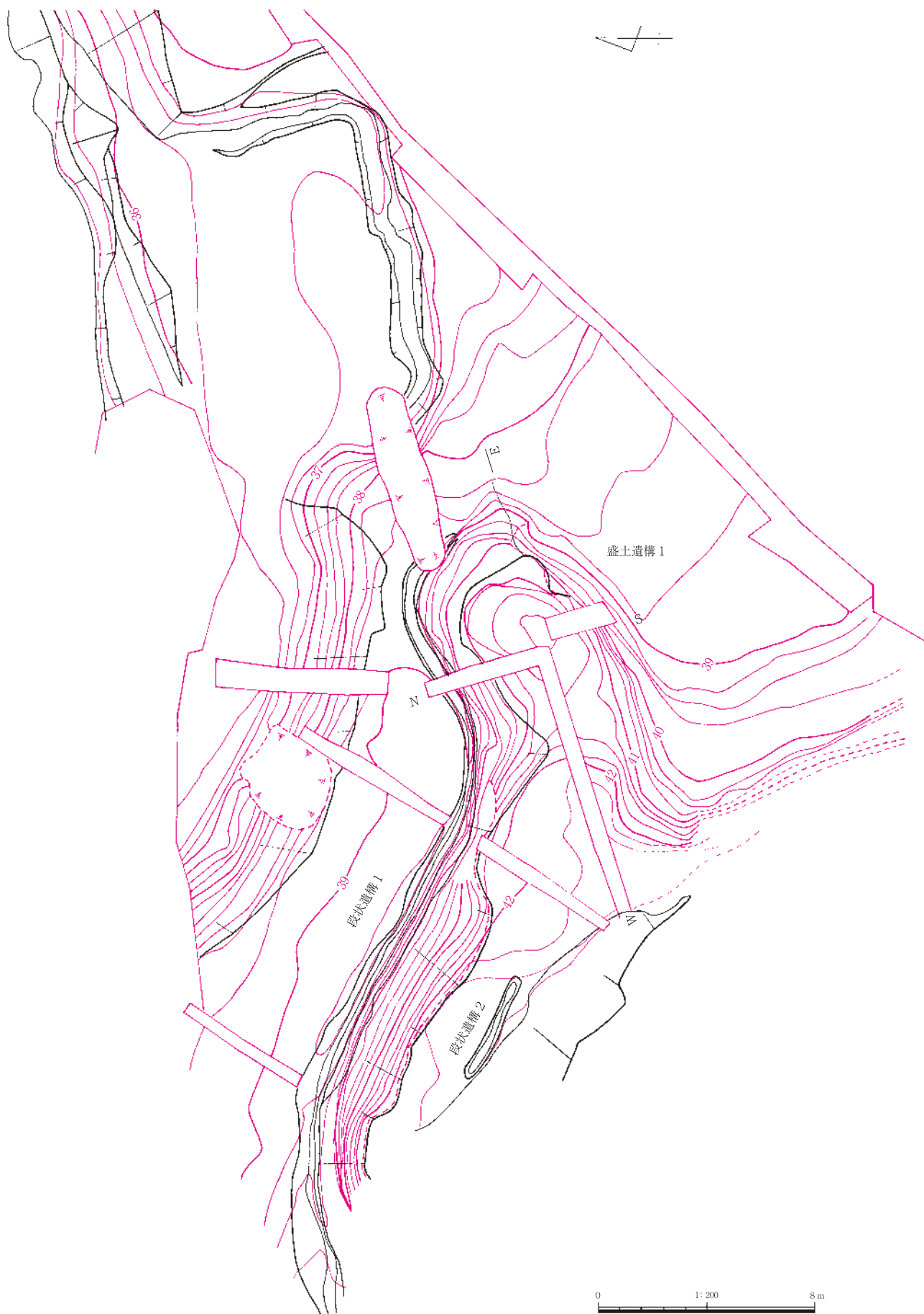
出土遺物には、図化したものに瓦質土器羽



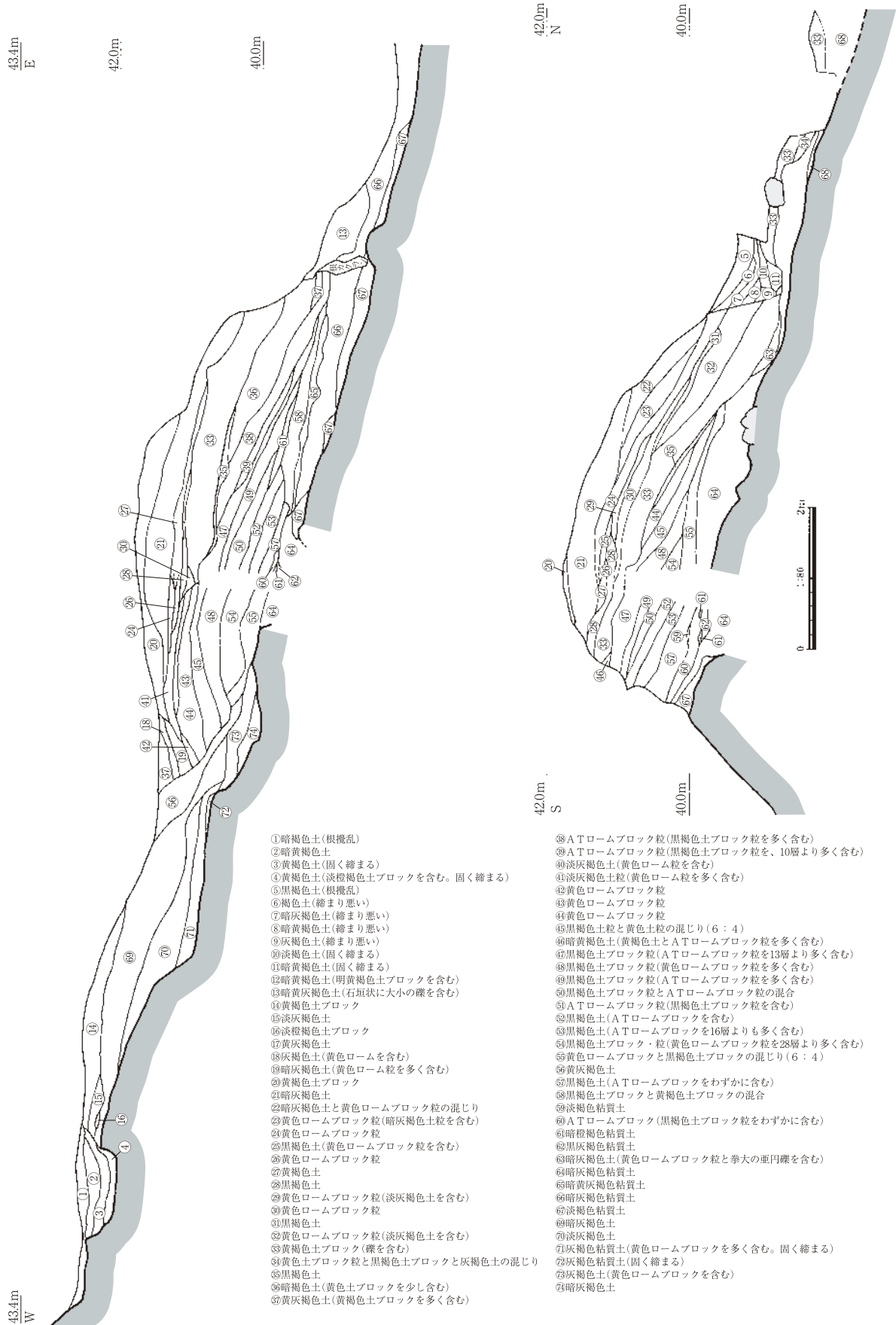
第244図 盛土遺構1出土遺物



第245図 盛土遺構1下層出土遺物



第246図 盛土遺構 1



第247図 盛土遺構1土層断面

釜9、備前焼播鉢10、土師器坏11、火鉢12がある。これらはおよそ16世紀ごろのものと考えられる。いずれも表土付近の出土であり、必ずしも当遺構に伴うものとはいえない。

時期を推定するものとして、当遺構の下層で後述する鉄鍋を埋納した土坑10がある。土坑10は14世紀ごろのものと考えられ、この時期以降に築造されていることは確かである。また、当遺構旧表に当たる遺物包含層からは、常滑焼13、鉄滓M2が出土しており正確な判断はできないが、14世紀ごろのものと考えられる。

この遺構が作られた目的については明らかではないが、地鎮遺構と考えられる土坑が伴うことを考えると、かなりシンボリック的な性格が考えられよう。(家塚・牧本)

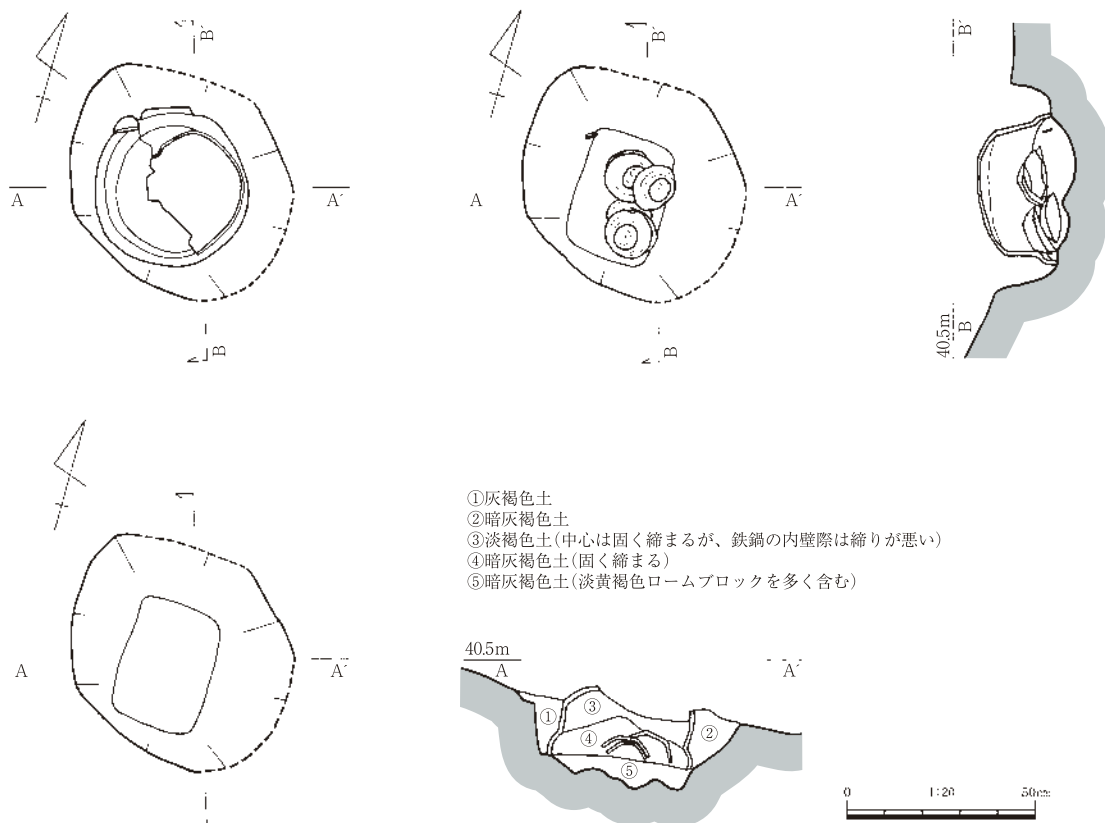
(2) 土坑

土坑10 (第248・249図、P.L.62・63・71)

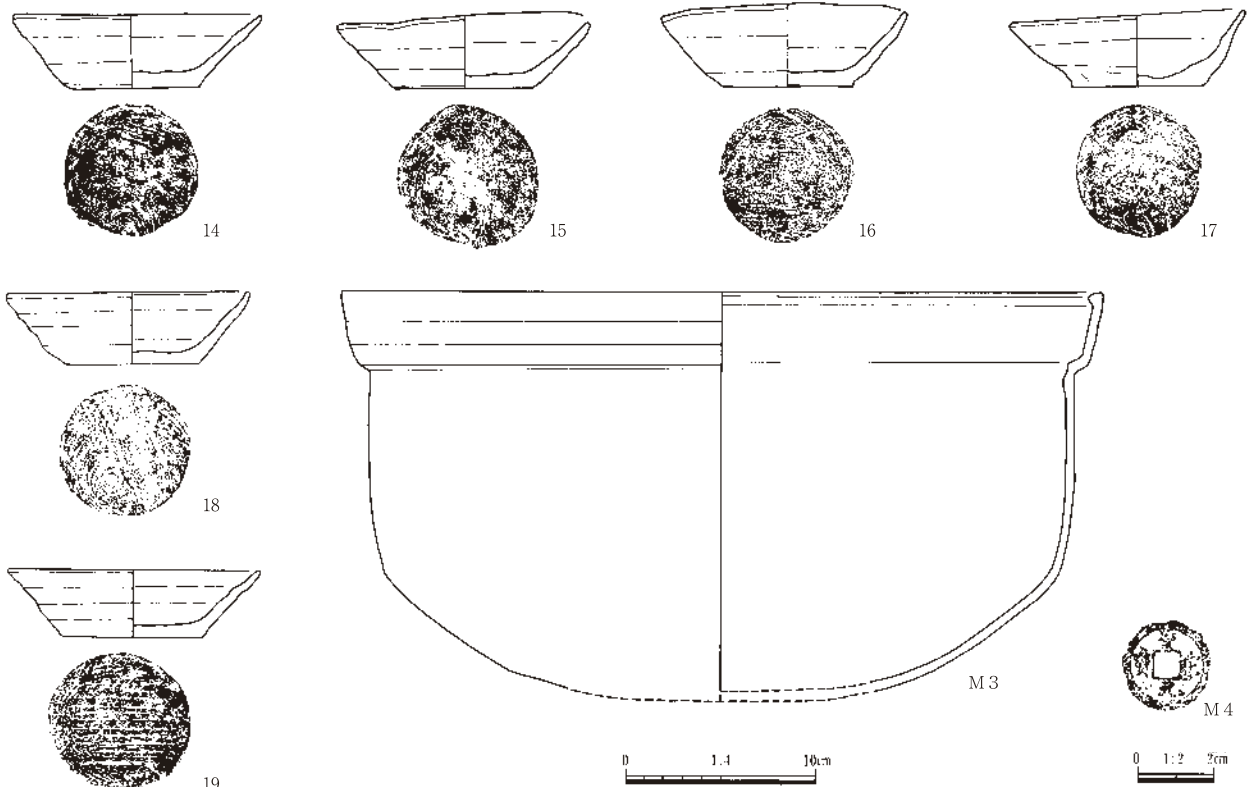
標高約40.3mの調査区東側斜面部C3グリッドにあり、盛土遺構1の盛土を除去し、旧表土面を検出しているときに、鉄鍋の破片が出土したことで存在を確認した。南東側約1mには段状遺構6がある。

土坑は旧表土上面から掘りこまれ、底面でローム層に達する。掘形は直径50cmの円形に復元され、検出面からの深さは25cm、底面は32cm×22cmの南北に長い長方形を呈している。この底面はいびつであったためか、くぼみを埋めて均している。

土坑の中に鉄鍋M3が伏せた状態で置かれ、その内側に6点の坏と1点の銅銭が入っていた。鉄鍋は口径40cm、高さ20cmで、口縁を下に向けていたが、土坑の底面よりも鍋の径が大きいために、土坑壁面に口縁を掛け、すこし傾いた状態であった。鍋底は検出時には破損しており、鍋内部の土は



第248図 土坑10



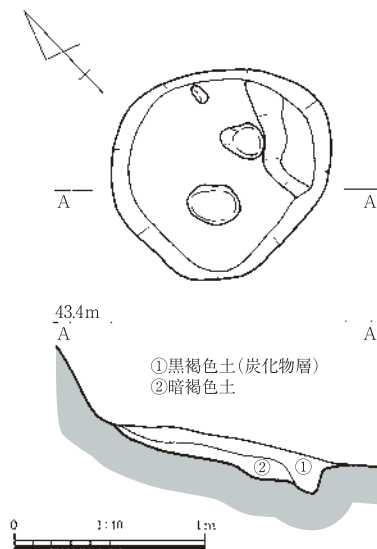
第249図 土坑10出土遺物

破面から少しずつ流入して堆積したものと考えられる。湯口にあたる部分は認められない。

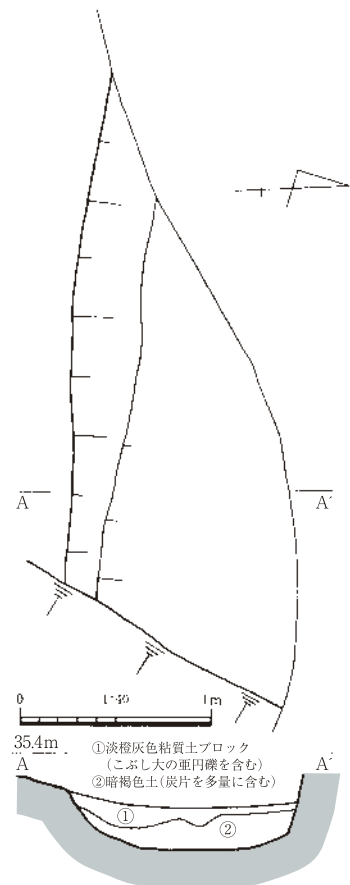
伏せられた鉄鍋内部の底面中央に、3枚ずつ重ねられた土師器坏が2組、南北に隣り合わせに伏せて置かれていた。北側のものは上から18・16・19、南側のものは上から15・14・17である。南側の坏に北側の坏が重なることから、南北の順に置かれたことが分かる。銅銭は土坑底面の北西隅に、坏の置かれた面とほぼ同じ高さで、表面を内側にして、内側に少し傾きつつも立った状態で出土している。

土坑埋土は、旧表土と同質である。鉄鍋の出土状況から、埋め戻されたものと推測する。

出土遺物は、鉄鍋M3、土師器坏14～19、聖宋元寶M4である。これらの遺物は、八峠編年中世期、13世紀～14世紀ごろのものと考えられ、出土位



第250図 土坑6



第251図 土坑11

置及び形態から盛土遺構1に伴う地鎮遺構と考える。(家塚)

土坑6 (第250図、P L.64)

調査区東側のE 4グリッドにあり、標高42.6 ~ 43.3 mの丘陵斜面部に立地する。下層には段状遺構2があるが、伴うものではない。

平面不整形円形を呈し、長軸1.2 m、短軸1.08 m、深さ0.14 mを測る。底面は傾斜しており、東側は段状となる。

埋土は、2層に分層できた。第1層は、炭化物を多量に含んでいる。埋土中で地山自然礫が3個出土している。

出土遺物はなく、時期、性格とも不明であるが、周辺にある製炭土坑の可能性はある。(牧本)

土坑11 (第251図、P L.64)

調査区北側のB 4グリッドにあり、標高約38.2 mの東側斜面部に立地する。段状遺構1の盛土直下で検出した。

北東側は検出作業の過程で消滅し、南西側は調査区外に延びるため、全容は明らかでないが、幅約1 mの帯状の

掘り込みが地面の傾きに対して直交する向きに延びていたと考えられる。検出面からの深さは15cm、検出した全長は2.5 mで、断面は緩い船底形を呈する。

埋土は2層に分かれ、下層は炭片を多量に含み、上層はロームブロックと亜円礫で構成される。炭焼きに使われ、その後埋め戻されたものと推測する。

出土遺物には、須恵器片があるが図化できなかった。段状遺構1盛土下層で検出されたことから、16世紀以前のものと考えられる。(家塚)

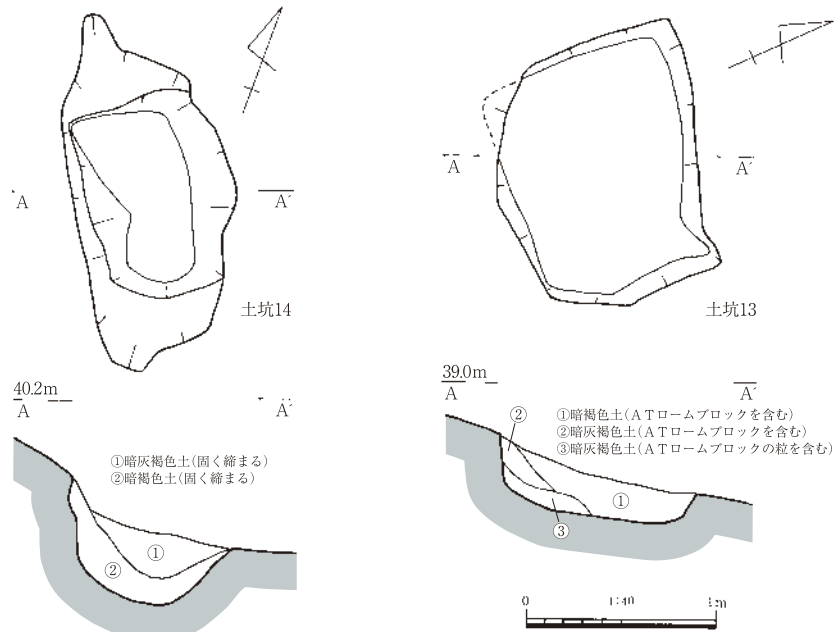
土坑13 (第252図、P L.64)

調査区東側のC 3グリッドにあり、標高約38.2 ~ 38.7 mの北東向きの斜面に立地する。

ローム層の上面で検出した。平面は不整形な五角形で、長軸1.4m、短軸1 m、深さ45cmを測り、底面の形状は平坦である。

埋土はローム上面に堆積した、盛土遺構1形成前の旧表土に類似する。

出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、盛土遺構1(13 ~ 14世紀)以前と考えられる。性格、用途は明らかではない。(家塚)



第252図 土坑13・14

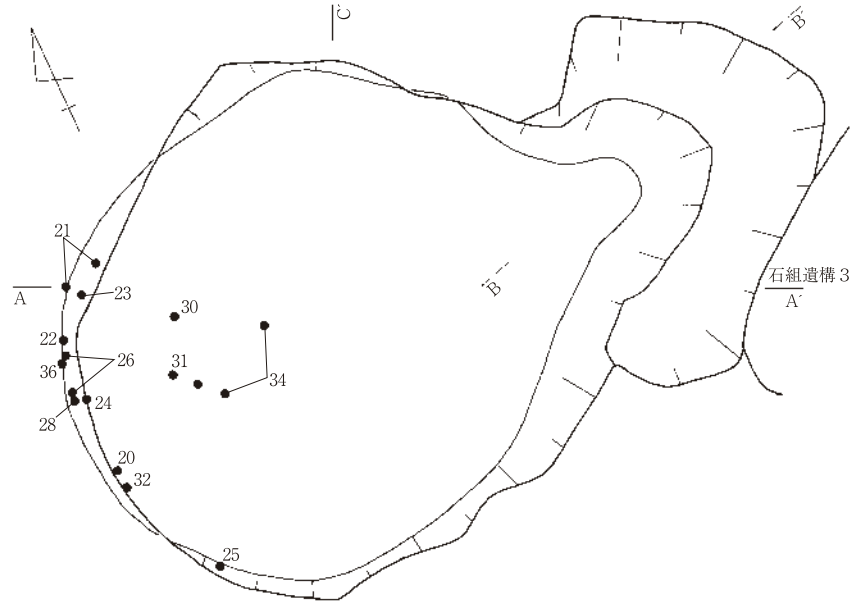
土坑14 (第252図、P L.64)

調査区東側のC3グリッドにあり、標高39.3～39.6mの北東側に傾斜する斜面部に立地する。盛土遺構1の層序確認のために設定したサブトレンチによって存在を確認した。

掘り込み面は盛土遺構1の下の旧表土面よりも下になる。平面は不整形な長円形を呈し、長軸1.6m、短軸0.85m、深さ30cmを測る。

埋土は2層に分層できた。いずれも固く締るものである。

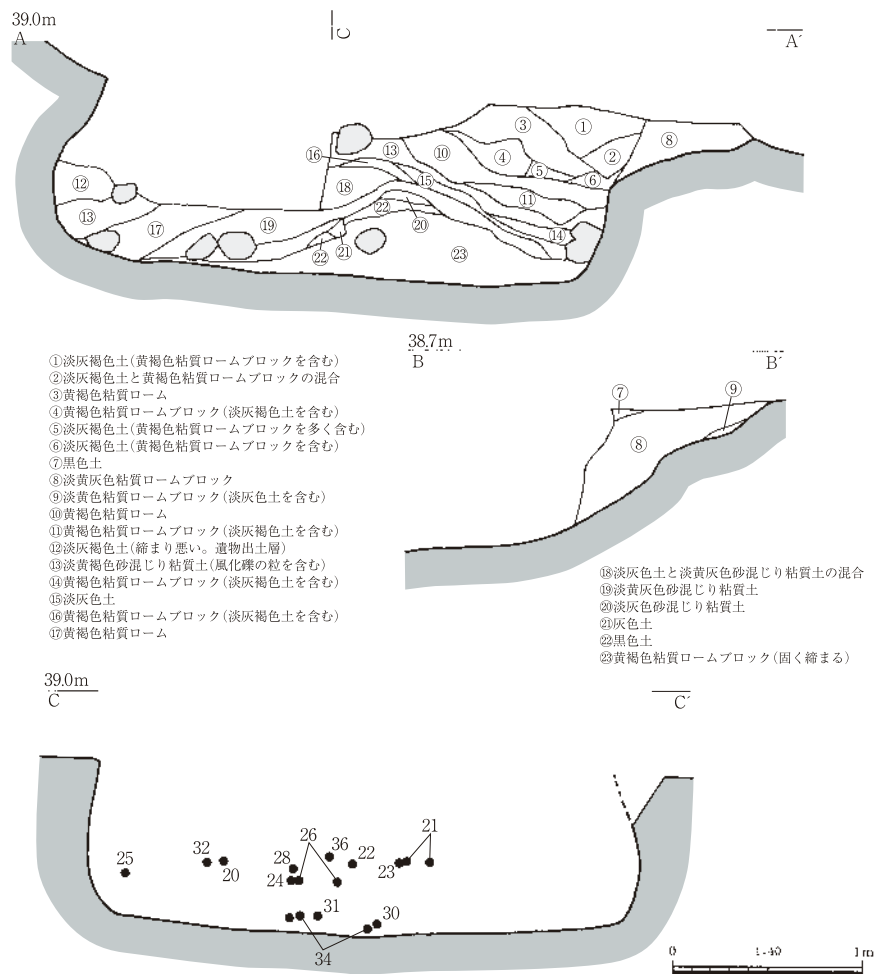
出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、層位的には段状遺構6(11世紀ごろ)かそれ以前と考えられる。性格は不明であるが、風倒木痕の可能性もある。(家塚)



土坑15(第253・254図、P L.64・72・73)

調査区東側のC2、C3、D2、D3グリッドの交点に位置する。検出面の標高は38.7mである。整地層をすべてはがした段階で検出したが、実際には整地層の上面から掘り込まれ、天井部の崩落した地下式横穴と考えられる。

平面形は長径3.0m、短径2.7mのほぼ円形であり、検出面からの深さは約1mで、底面は平坦である。地山の削り出しによって東側に幅1m、長さ1mの斜面が作られる。入り口と見られるが階段等の加工はない。壁



第253図 土坑15

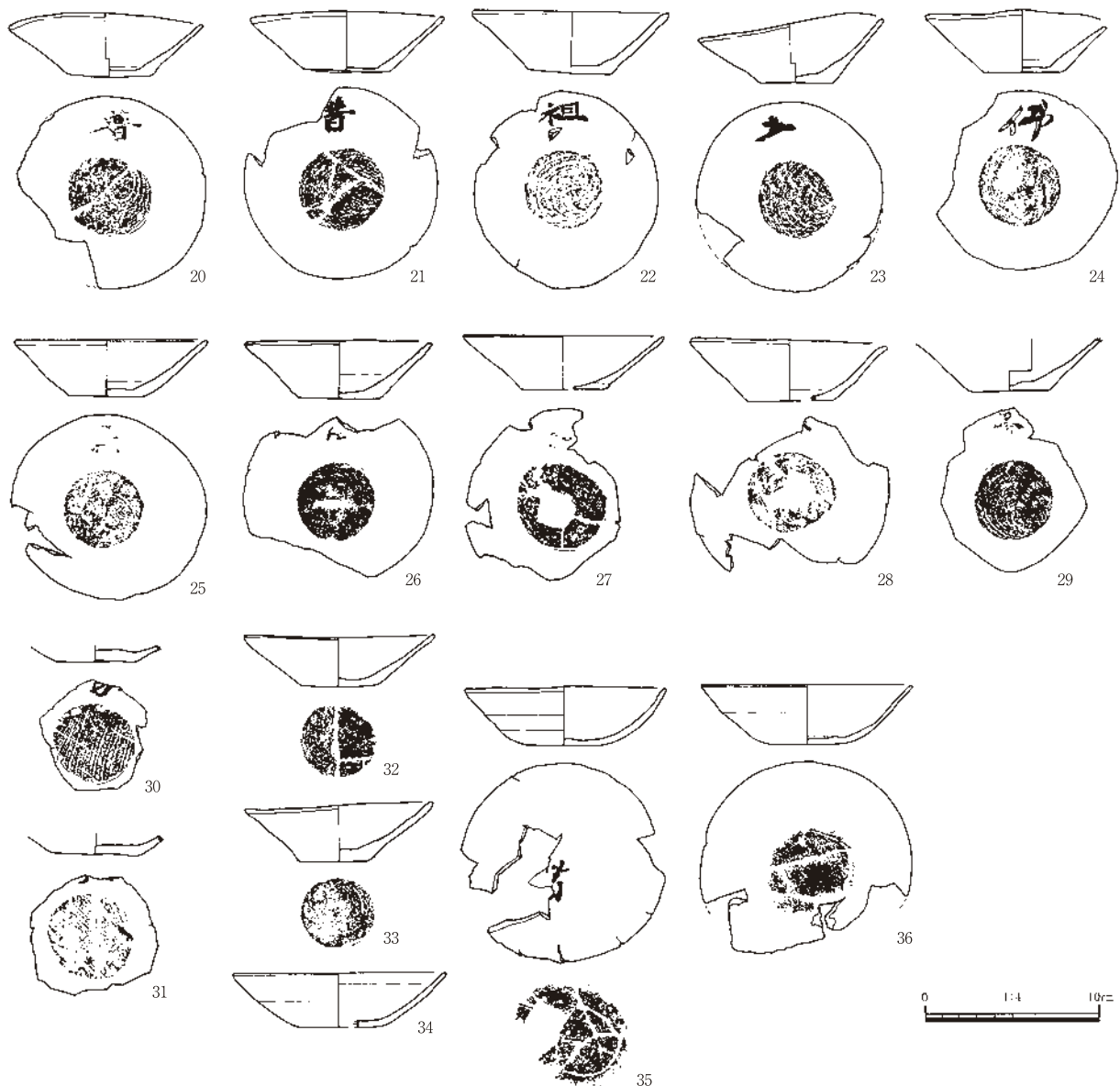
面は上がすぼまるフラスコ状を呈している。

埋土は地山にとってもよく似ており、土層断面は中心が高くなる山型を呈している。上面を覆う造成土に由来するもので、土坑の天井部の崩落とともに埋没したものと考えられる。土坑の底面部および壁面まわりの埋土中から直径20cm大の礫がたくさん出土しているが、これらは造成土に含まれていたものが、天井の崩落とともに転落したと考えられる。

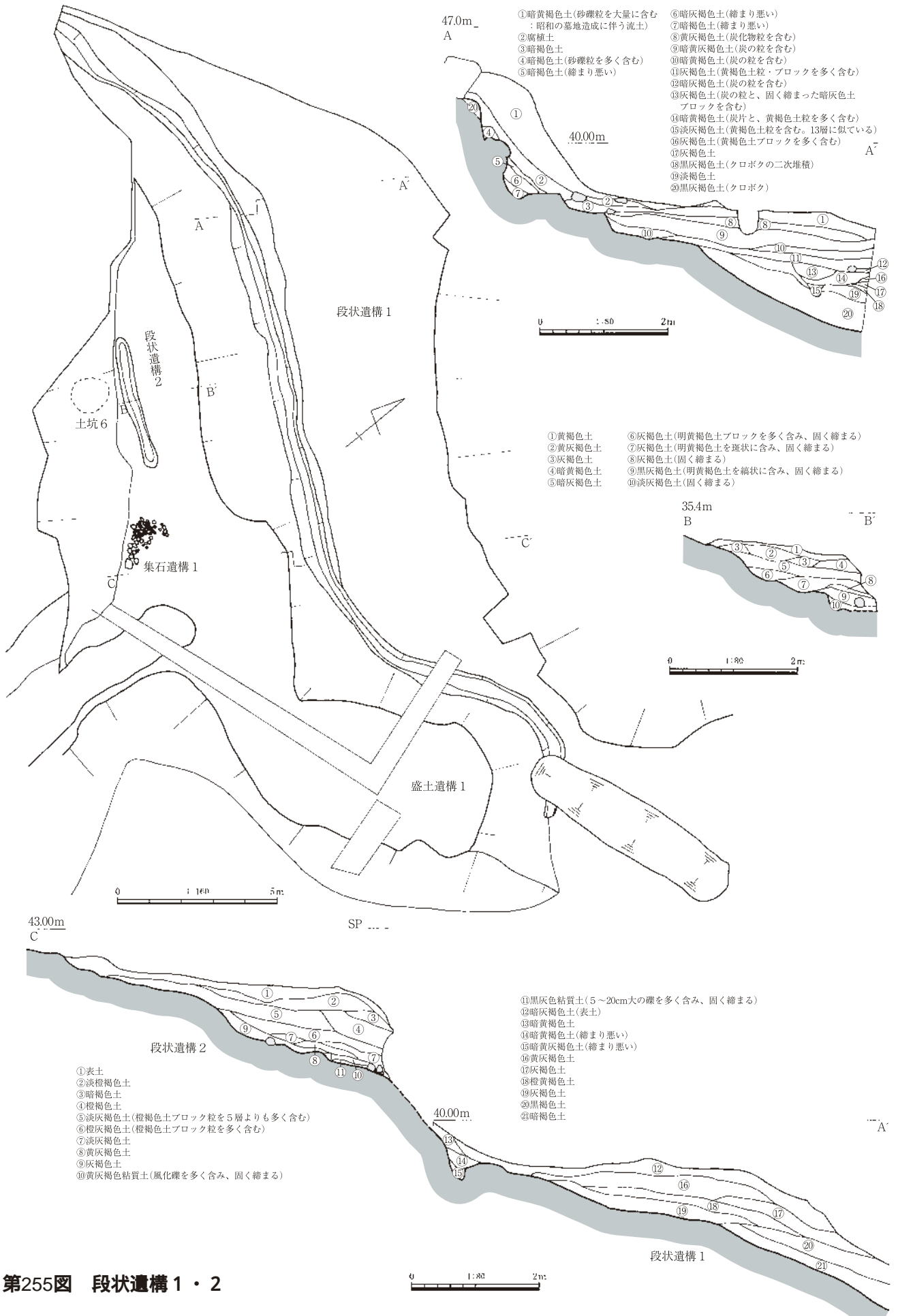
入り口部の対面に当たる西側の底面および壁際の埋土中より、多量の土師器杯が出土した。多くは上向きで出土しており、体部側面及び底面に墨書されているものがある。壁際のもは底面から約20cmの高さでそろって出土していることから、土坑内の埋没の途中で持ち込まれたものと推定する。

図化したものは、土師器杯18点で、そのうち墨書が確認されたものは13点である。墨書には、「普」3点(20・21・29)、「土」1点(23)、「佛」1点(24)、「祖」1点(22)、「率？」1点(35)、不明6点(25～28・30・31)である。

出土遺物から、中森分類により15世紀ごろのものと考えられる。土坑の入り口の埋土は石組遺構



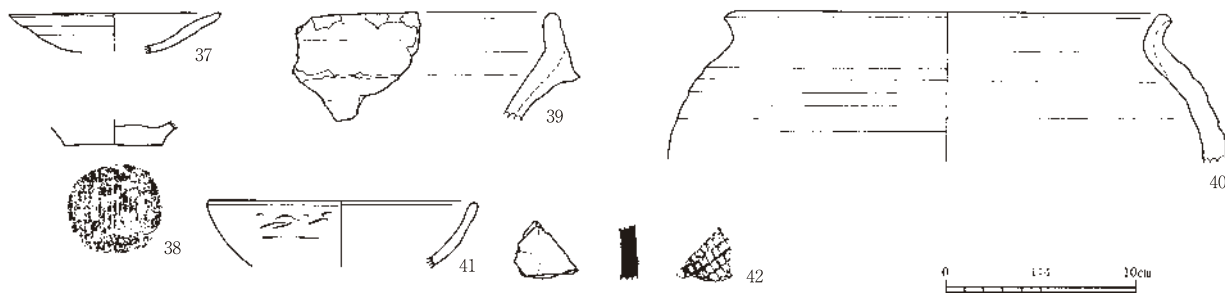
第254図 土坑15出土遺物



第255図 段状遺構 1・2

3によって掘削されており、土坑15 石組遺構3の順に作られていることがわかる。これは、遺物による遺構の年代観からも矛盾しない。

形態的には、県西部によく見られる地下式横穴に似ているが、埋葬施設としてのものではなく、貯蔵用のものと理解したほうがよいと思われる。(家塚)



第256図 段状遺構1・2出土遺物

(3) 段状遺構

段状遺構1・2 (第255・256図、P L.65・66)

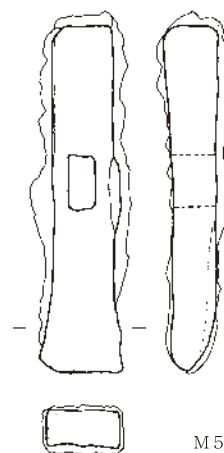
段状遺構1・2とも、調査区東側丘陵斜面部にあり、段状遺構1は標高約39.3m、段状遺構2は標高約42.5mに立地する。南側には、盛土遺構1が接している。

段状遺構1は、北東側の斜面を大きく切り崩し、その際に生じた土砂を下手側に盛り、平坦面を形成している。東端は盛土遺構1の造成土を掘削している。検出した長さは約20m、幅約5mで、法尻に沿って幅30cm～70cm、深さ20cmの溝が掘削されている。

段状遺構2は、北東側の斜面の段状遺構1よりも上手側を切り崩し、土砂を下手側に盛り上げて平坦面を形成する。その規模は段状遺構1に比べて小さく、検出した長さは15m、幅2m。西側は調査区外になり、東側は盛土遺構1の上面につながる。法尻際に長さ4mに亘って、幅30cm、深さ5cmの溝を検出した。

出土遺物には、段状遺構1盛土中からの土師器皿37、備前焼播鉢39、土師器坏38、青磁碗41、表土中からの備前焼小型甕40、段状遺構2盛土最下層からの須恵器甕片42を図化した。39はB-2類、41は青磁碗C-類に分類できる。

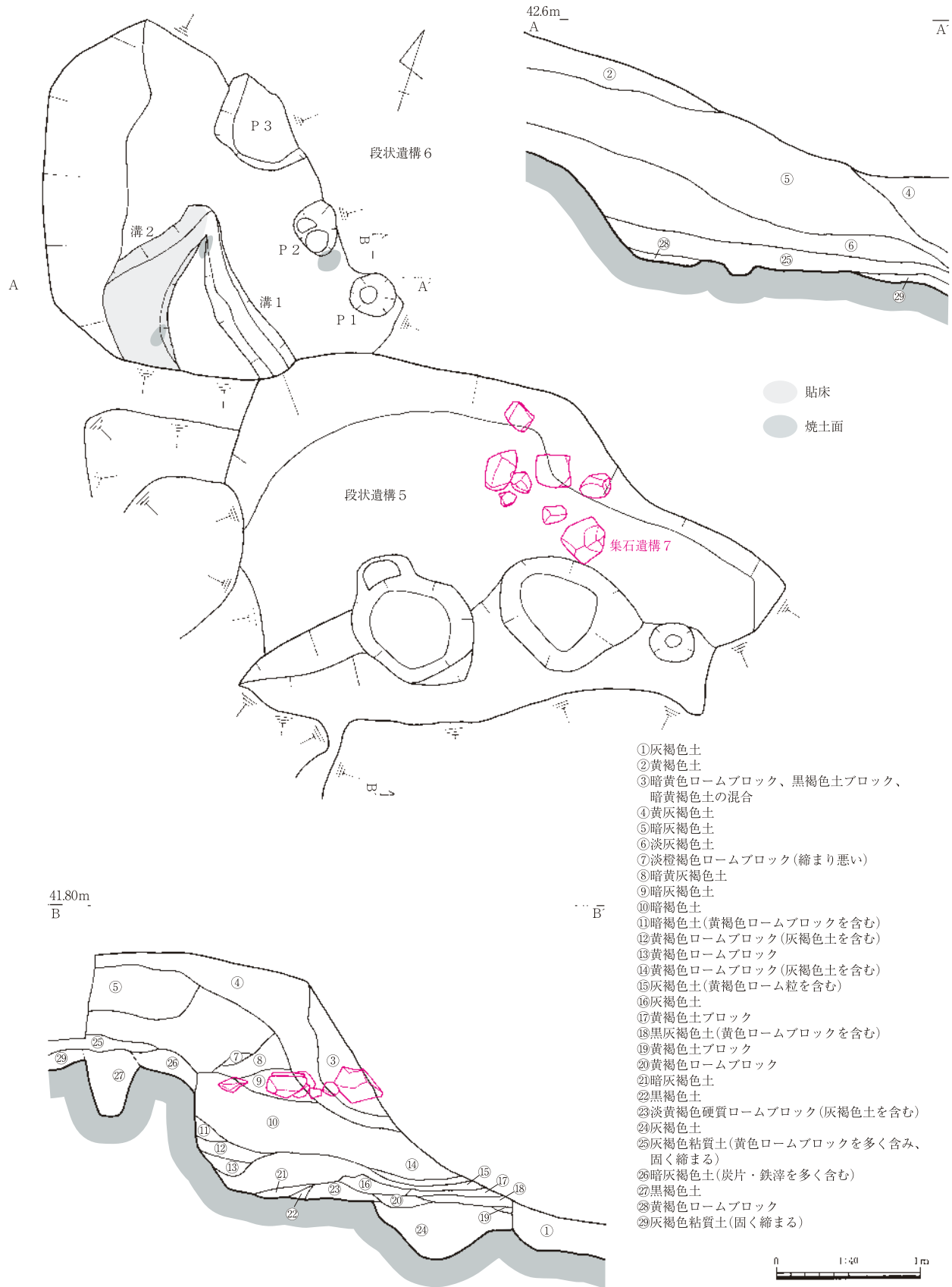
これらの遺物から、段状遺構1・2は15世紀後半から16世紀ごろに構築されたものと考えられる。性格は不明であるが、丘陵頂部の土塁・堀切等と时期的にも同時期であり、門前上屋敷遺跡の造成土上の建物と関連があるものと考えられる。(家塚)



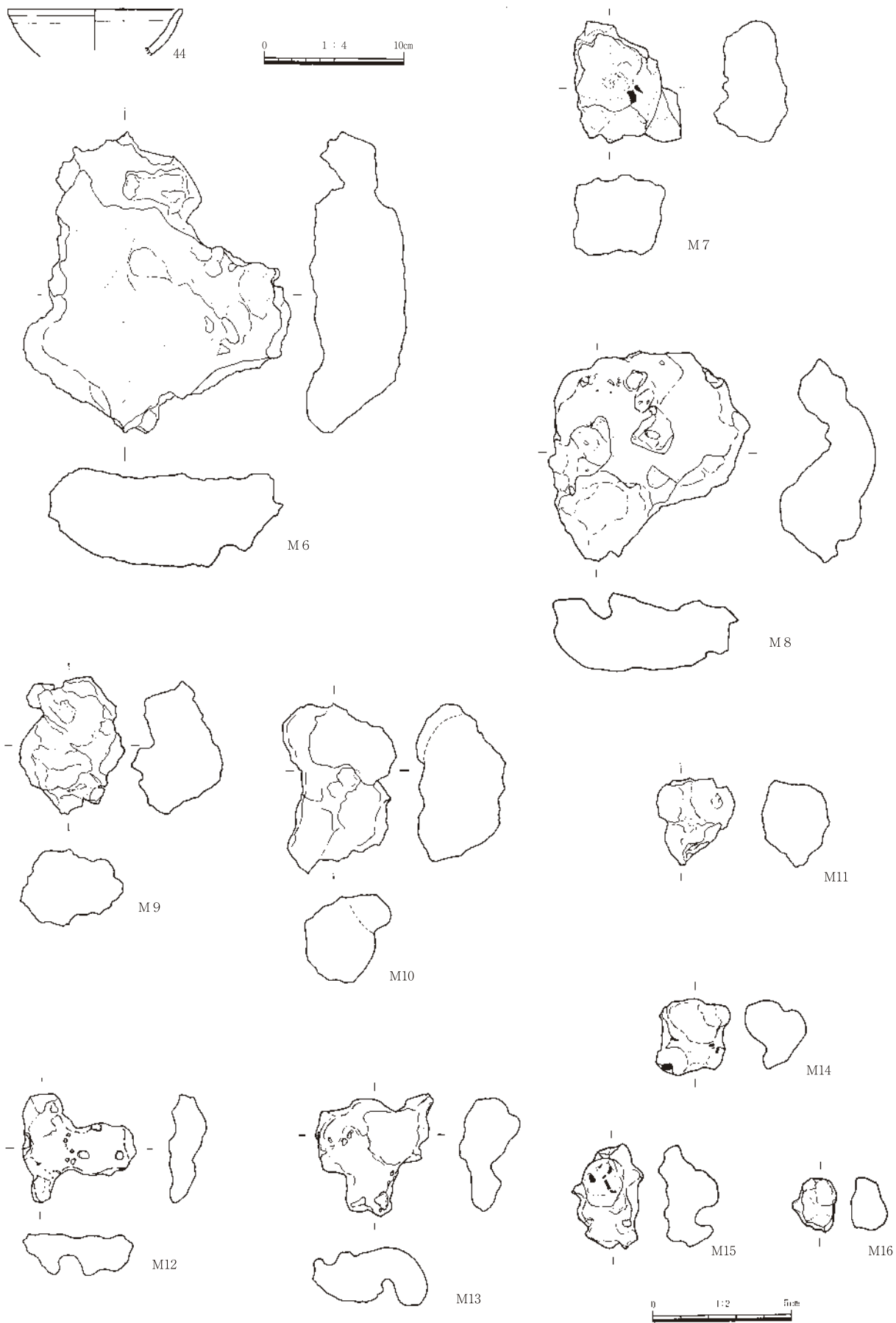
段状遺構5 (第257・258図、P L.66・76)

調査区東側のC3グリッドにあり、標高39.4～40.5mの斜面部に立地している。段状遺構6の南東側の床面および埋土を掘削した、テラス

第257図 段状遺構5出土遺物



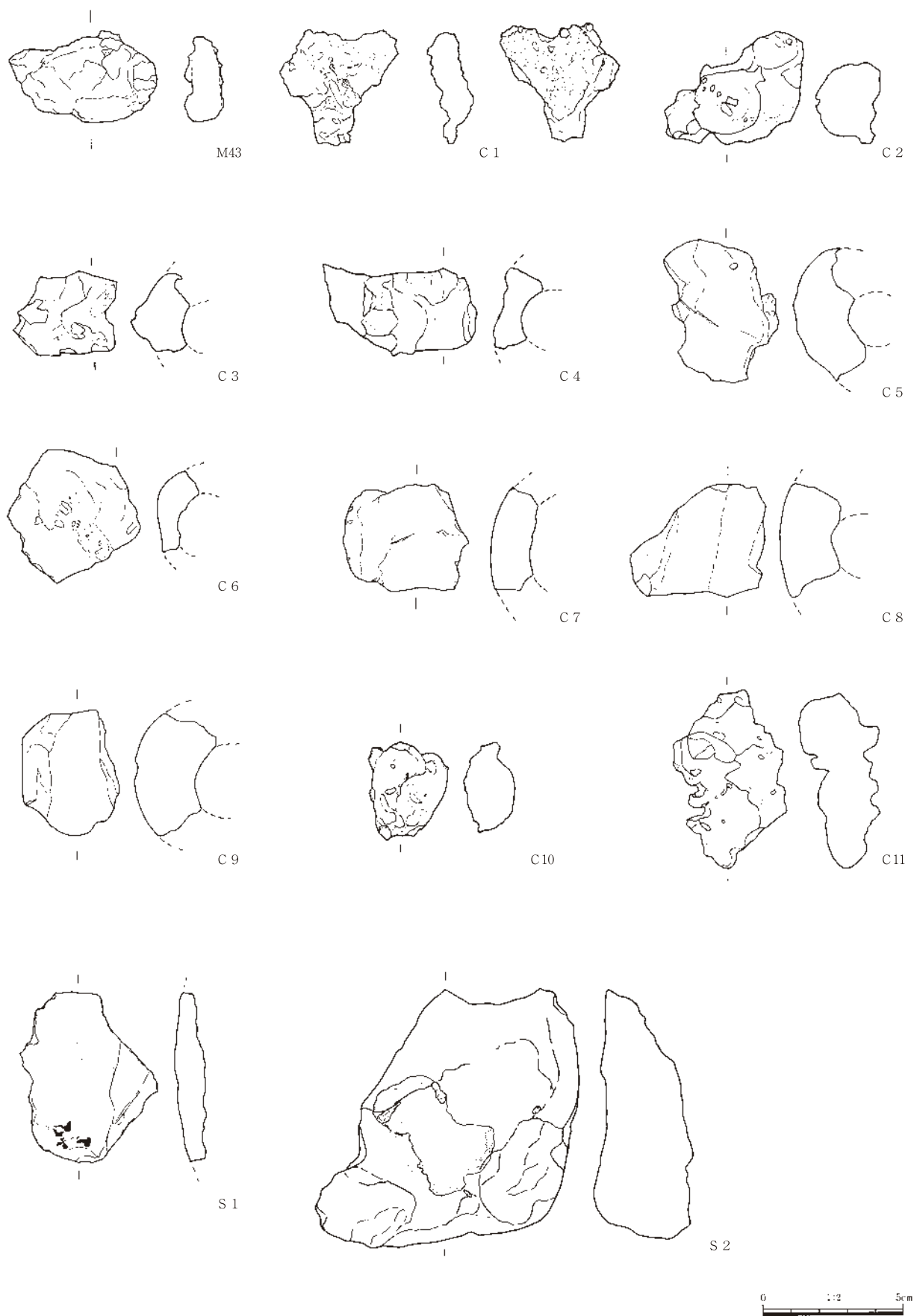
第258図 段状遺構 5・6、集石遺構 7



第259図 段状遺構6出土遺物



第260図 段状遺構6出土遺物



第261図 段状遺構6出土遺物

状の遺構である。

底面の幅 3.5 m、奥行き 1.1 m、検出面からの深さは 0.8 m である。底面には径 50cm の土坑が存在するが、底面から約 10cm までの土の堆積はロームブロックとクロボクが互層をなす整地層によって埋め戻されている。

埋土中から、土師器碗底部 43、小型の鉄鎚 M 5 が出土したが、これらは段状遺構 6 の埋土から流れ込んだものと推測する。

底面で検出した土坑は、周辺の状況を鑑みて、この遺構掘削以前の土取りのために掘られたものと考えられる。また、この遺構自体も土取りのために掘削された可能性がある。(家塚)

段状遺構 6 (第258～261図、P L.66・76)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高 40.2 ～ 41.2 m の斜面部に立地している。

北東側に下る約 20 度の斜面を掘削して段を形成している。床面の奥行きは最大で約 1.5 m、幅は 2.6 m 残存する。南側は段状遺構 5 や土取りなどの後世の掘削によって破壊されている。

床面では 2 条の溝 (溝 1・2) と 3 基のピット (P 1・P 2・P 3) を検出した。溝 1 は床面の中央に位置する。北東 - 南西方向に延び、北東端は溝 2 の端部と接し、南西端は段状遺構 5 によって切られる。長さ 1.2 m、幅 29cm、深さ 9 cm である。溝 2 は南側の壁面際から北へ向かって伸び、溝 1 と接する端部に向かって窄まる。長さ 1.2 m、最大幅 50cm、深さ 5 cm である。溝 2 は床面を構成する地山と同質のロームを使って、床面の高さまで埋め戻されている。

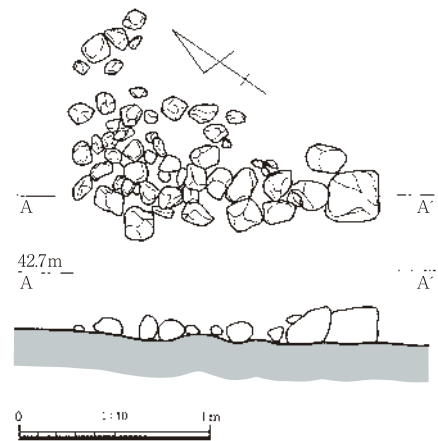
P 1 は径 32cm、深さ 45cm、P 2 は径 33cm、深さ 50cm である。これらに対し P 3 は径 70cm、深さ 18cm と皿状を呈しており、様相が異なる。埋土は P 1 が黒褐色土、P 2・3 が暗灰褐色土である。P 2 埋土中には鞆羽口片が含まれていた。

遺構埋土は、床面から 10 ～ 20cm 上が固くしまる。焼土面を 3 箇所検出したが、それらはいずれも遺構の床面よりも 5 cm 程度浮いた位置にあった。床面近くの埋土には多くの鉄滓・炭片が含まれている。特に P 1・P 2 周辺と溝 2 (埋め戻し後) 付近に集中している。焼土面が近いという共通性がある。

出土遺物には、図化できたものに土師器坏 44、椀形鍛冶滓 M 6 ～ 13、鍛冶滓 M 14 ～ 29、再結合滓 M 30 ～ 35、釘 M 38・40、棒状不明品 M 39・42、小形鑿 M 41、板状不明品 M 43、炉壁片 C 1・2、羽口片 C 3 ～ 9、粘土質溶解物 C 10・11、金床石片 S 1・2 がある。その他、埋土中から粒状滓 (M 36) 1.317 g、鍛造剥片 (M 37) 21.082 g を検出した。

小鍛冶で生成される遺物が出土していることになり、この遺構で小鍛冶が行われていたものと考えられる。上屋等に関わる遺構は検出することができなかった。

また、椀形鍛冶滓に含まれていた炭化物 2 点の年代測定を行った結果、 $950 \pm 40\text{BP.}$ 、 $1100 \pm 40\text{BP.}$ の値が得られ、およそ 9 ～ 12 世紀代の年代と判定された。(家塚・牧本)



第262図 集石遺構 1

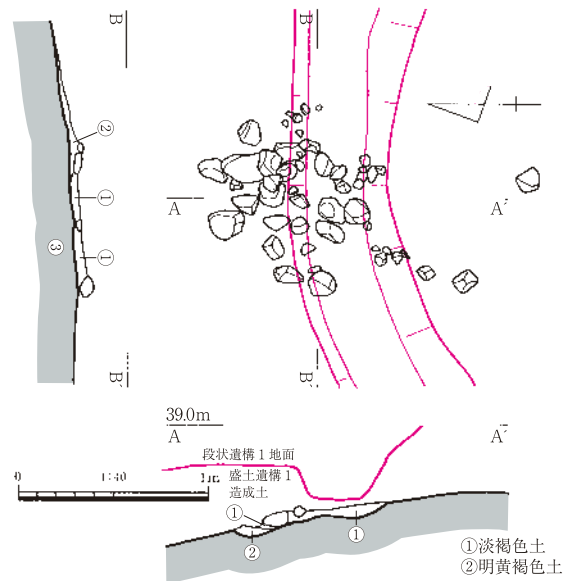
(4) 集石遺構

集石遺構 1 (第262図、P L.66)

調査区中央北側、D 4 グリッドの標高約 42.3 m の丘陵東側中腹の平坦面に立地する。下層には、段状遺構 2 があるが、伴うものではない。

拳大から人頭大の山石が、遺存状態は悪いが長軸 1.65 m、短軸 1.2 m の範囲に長形状に並べられている。重なった状況は見られない。本来一段であったものなのかは、周辺がかなり削平を受けているものと思われ不明である。石材の下部には、土坑などの付属遺構は認められなかった。

出土遺物はなく、時期、性格とも不明であるが、層位的に判断すると、段状遺構 2 (16 世紀) 以降のものである。(牧本)



第263図 集石遺構 5

集石遺構 5 (第263図、P L.67)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高 38.4 ~ 38.5 m の斜面部に立地する。

盛土遺構 1 の造成土掘り下げ中に検出した。径 5 ~ 20cm の垂円礫が、径 1 m の範囲にまっけて出土した。礫は相互に重なり合う箇所もあるが、積み上げることを意図したようなものではなく、面的な広がりを示す。

礫は盛土遺構 1 の盛土最下層に包含され、旧表土上面よりもやや上に位置する。このため、盛土遺構 1 に伴うものと考えられる。礫およびその周辺においても被熱等の痕跡は認められない。

出土遺物等はなく、性格は不明である。(家塚)

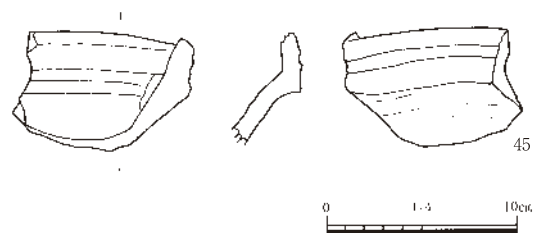
集石遺構 7 (第258図、P L.67)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高 40.5 m の斜面部に立地する。

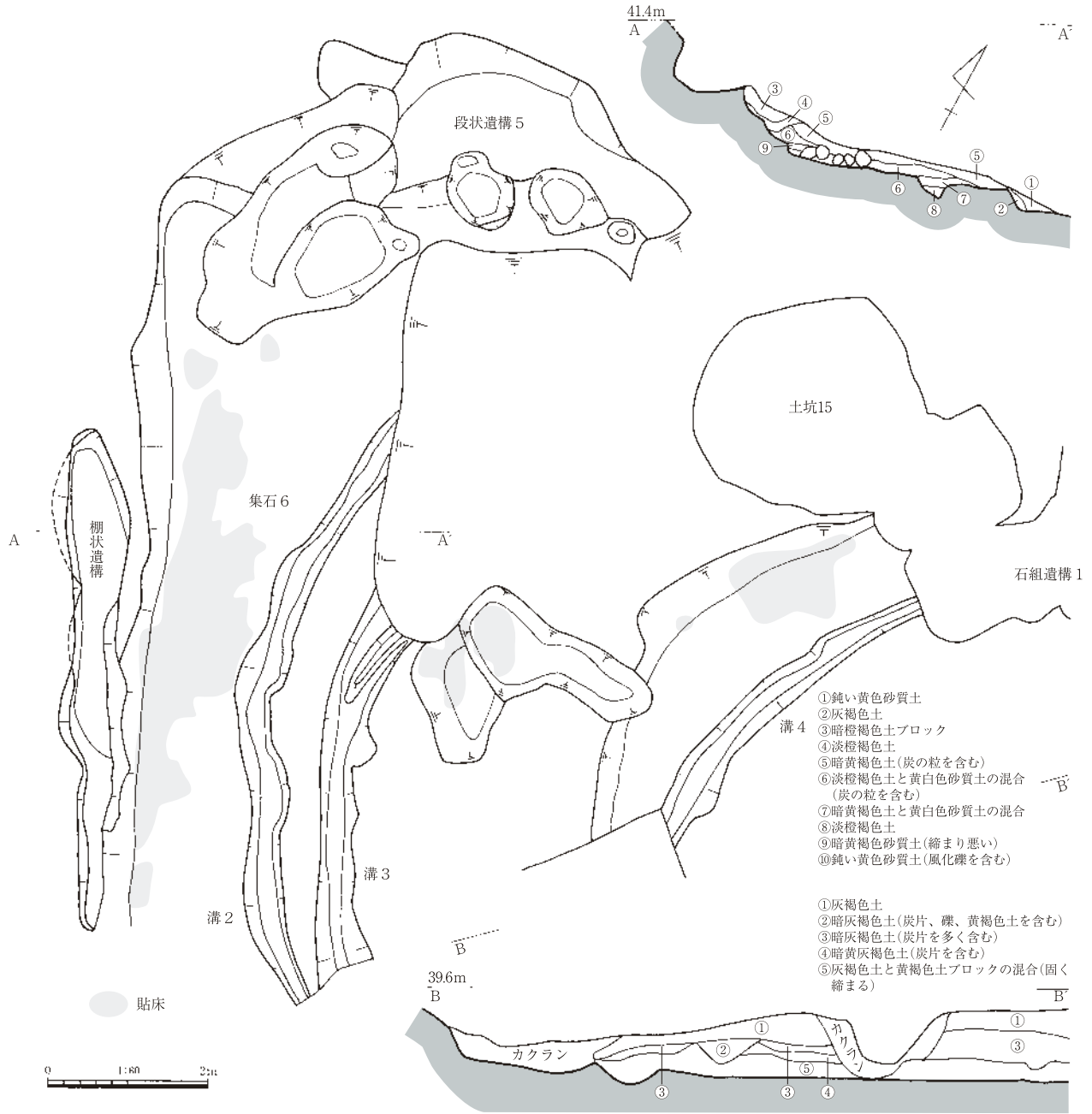
段状遺構 5 の埋土最上層 (第 257 図 B - B' 10 層) 上面を遺構検出面とし、盛土遺構 1 の造成土を埋土とする。径 10 ~ 30cm の垂角礫が径 1 m の範囲内からまっけて出土した。中心に五輪塔の地輪のような形をした礫が配されていることから、埋葬施設の可能性を考えたが、その下から遺構を検出することはできなかった。北西側に 2 m 離れた地点で土坑 10 を検出しているが、両者の検出面の標高がほぼ同じ高さ (40.5 m) であることから、同時期に存在した可能性が考えられる。(家塚)

集石遺構 6、溝 2・3・4、棚状遺構 (第 264 ~ 266 図、P L.67・74)

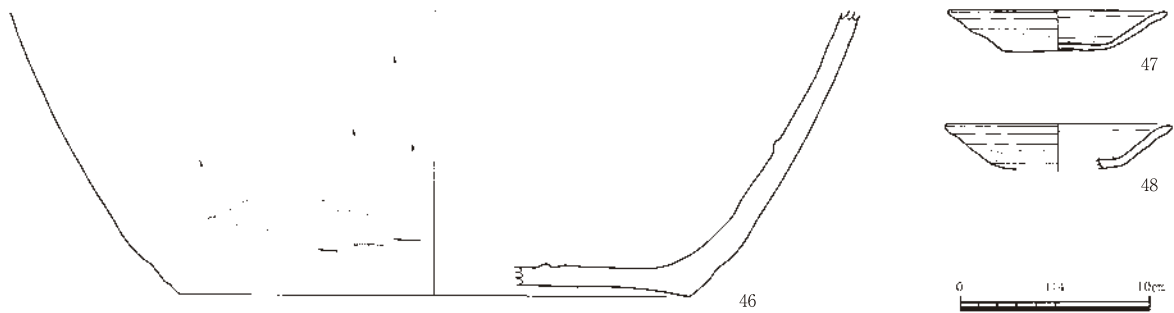
調査区東側の D 2・3 グリッドにあり、標高 39.3 ~ 40.5 m の平坦面から斜面部にかけて立地している。D 2・3 グリッド平坦面は、炭化物混じりの層によって整地されており、これらの遺構は整地土除去後に検



第264図 溝 3 出土遺物



第265図 集石遺構6、溝2～4、棚状遺構



第266図 D3グリッド整地土内出土遺物

出すことができた。

溝2は、幅24～57cm、深さ11～49cmを測るもので、断面U字状を呈す。南側は調査区外へ延び、北側は後世の攪乱によって掘削されている。検出した範囲では、長さ7.6mに亘る。やや湾曲しておよそ南北方向に走る。

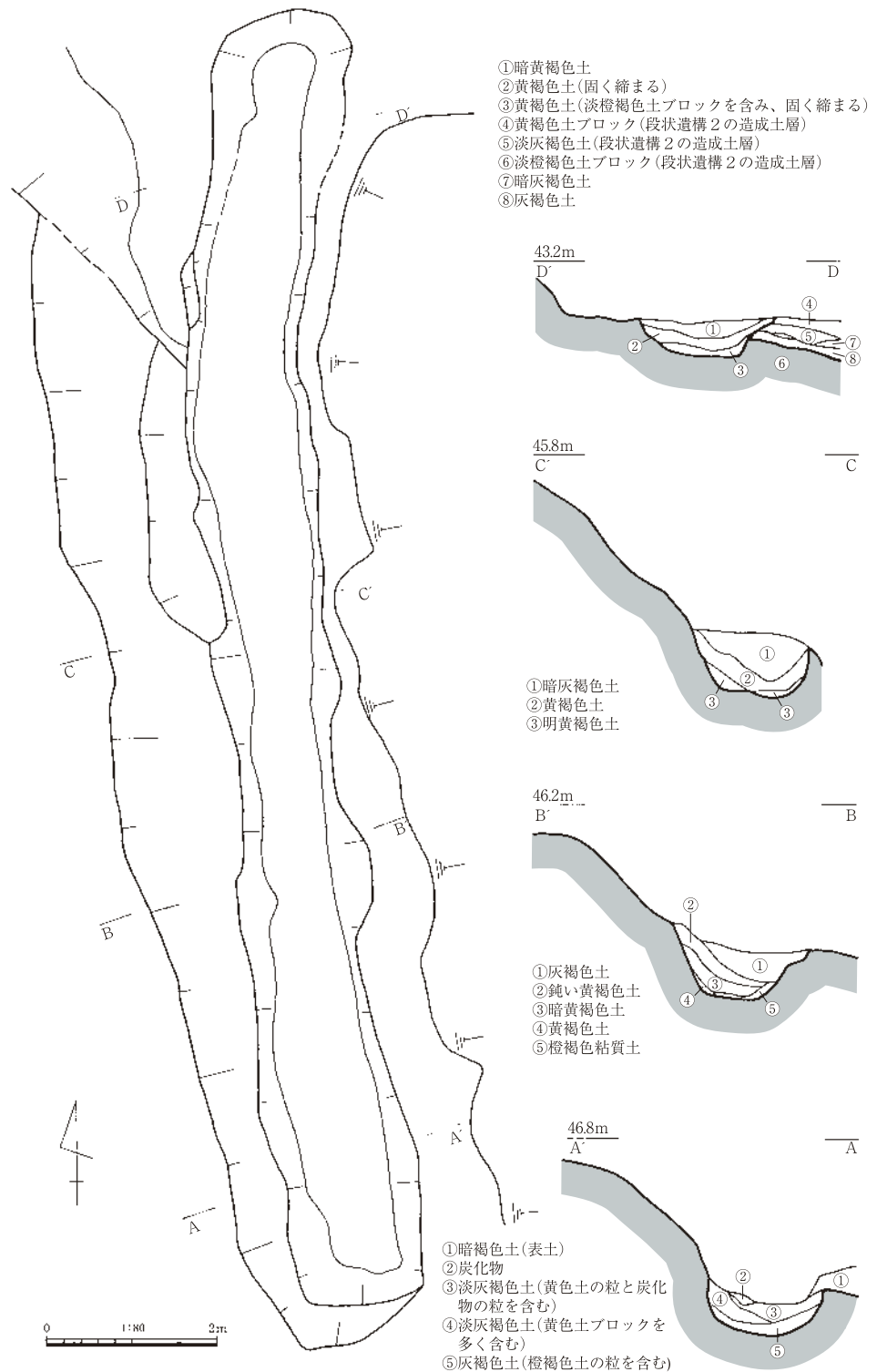
溝3は、溝2に平行するように走るもので、北側は二股に分かれる。幅38～66cm、深さ12cm程度を測り、断面U字状を呈す。同じく南側は調査区外へ延び、北側は後世の攪乱によって掘削されている。

溝4は、溝2・3の東側約2m東側にあり、これらに平行するように湾曲して走るもので、幅36～58cm、深さ5cm程度と浅い。断面U

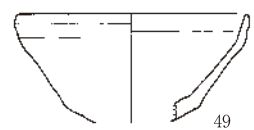
字状を呈す。南側は調査区外へ延び、北側は石組遺構3により切られている。

集石遺構6は、丘陵裾部を大きくテラス状に掘削し後に人頭大の自然礫が、長さ約7m、幅最大1.2mの範囲に、乱雑に置かれたものである。

柵状遺構は、集石遺構6の西側に立つ崖面の中腹をえぐり込み、全長6.2m、奥行き0.2～0.7m、最大高約1mの柵状に整形しているものである。底面の標高は40.6m前後であり、集石遺構6の上面よりも約0.7m上方に位置する。



第267図 溝1



第268図 溝1出土遺物

埋土の断面の記録はおこなっていないが、崖面と同質の土であり、崖面の風化によって自然に埋没したものと考えられる。遺物は出土していない。

出土遺物には、溝3からの備前焼播鉢45を図化した。また、整地土中から備前焼甕46、京都系土師器皿47・48が出土している。

出土遺物から、45は備前A期に当り、16世紀中ごろのものと考えられる。整地土中のものも、16世紀ごろのものであることから、丘陵裾部を大きく加工し、溝等が作られた後ほどなく整地されたものと考えられる。それぞれの遺構の性格は不明である。(牧本)

(5) 溝

溝1(第267・268図、P.L.67・70)

調査区東側のC4～E4グリッド東端にあり、標高42.2m～46.3mの斜面部に位置する。調査前は丘陵頂上へ続く小道であった。東側は崖となり、崖下の平坦面には石組遺構1～3や土坑15などの遺構群が立地する。

溝の断面は逆台形で、全長は15m、上幅が1.4～1.5m、下幅が0.7～1m、深さは0.5～1m。溝底は北側から南側へ上る傾斜となっていて、その高低差は2.8mである。溝底の形状はなめらかであり、階段のような加工は施されていない。溝の両端は閉じている。検出面からの深さは北側から南側に行くに従って深くなる。

埋土は自然堆積と考えられ、掘り直しは認められない。

溝底から瀬戸天目茶碗49の破片が出土した。

出土遺物から、16世紀ごろのものと考えられる。溝の北端が段状遺構2の盛土を掘削していることから、溝1は段状遺構2の形成後に作られたものである。

遺構の立地と形状及び土塁・堀切と同時期であることから、砦に關係する横堀のような性格が考えられる。(家塚)

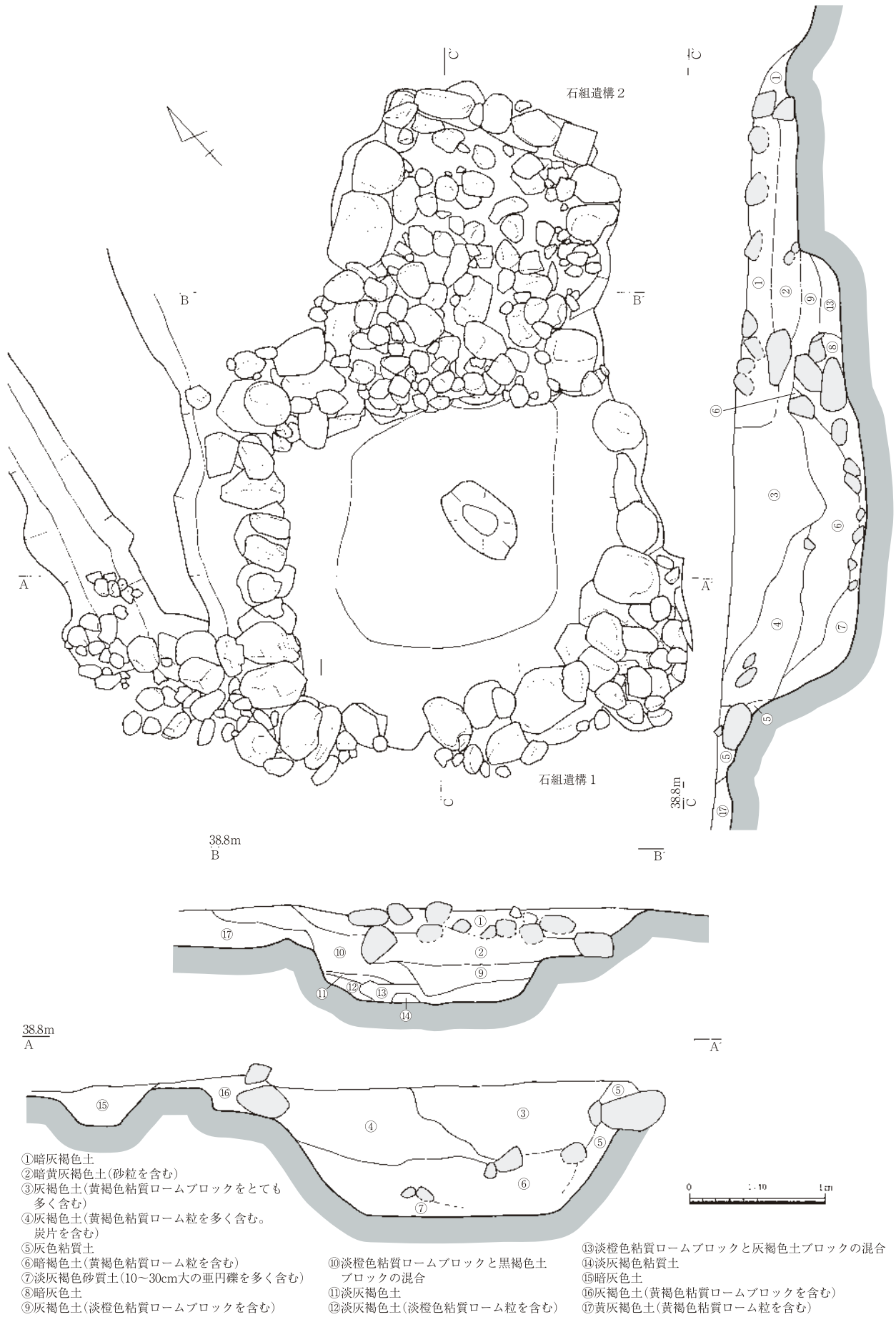
(6) 石組遺構1・2・3、土坑16、溝5(第269～273図、P.L.67・68・74)

調査区東側のC2・D2グリッド、標高37.5m前後の整地された平坦部に立地する。

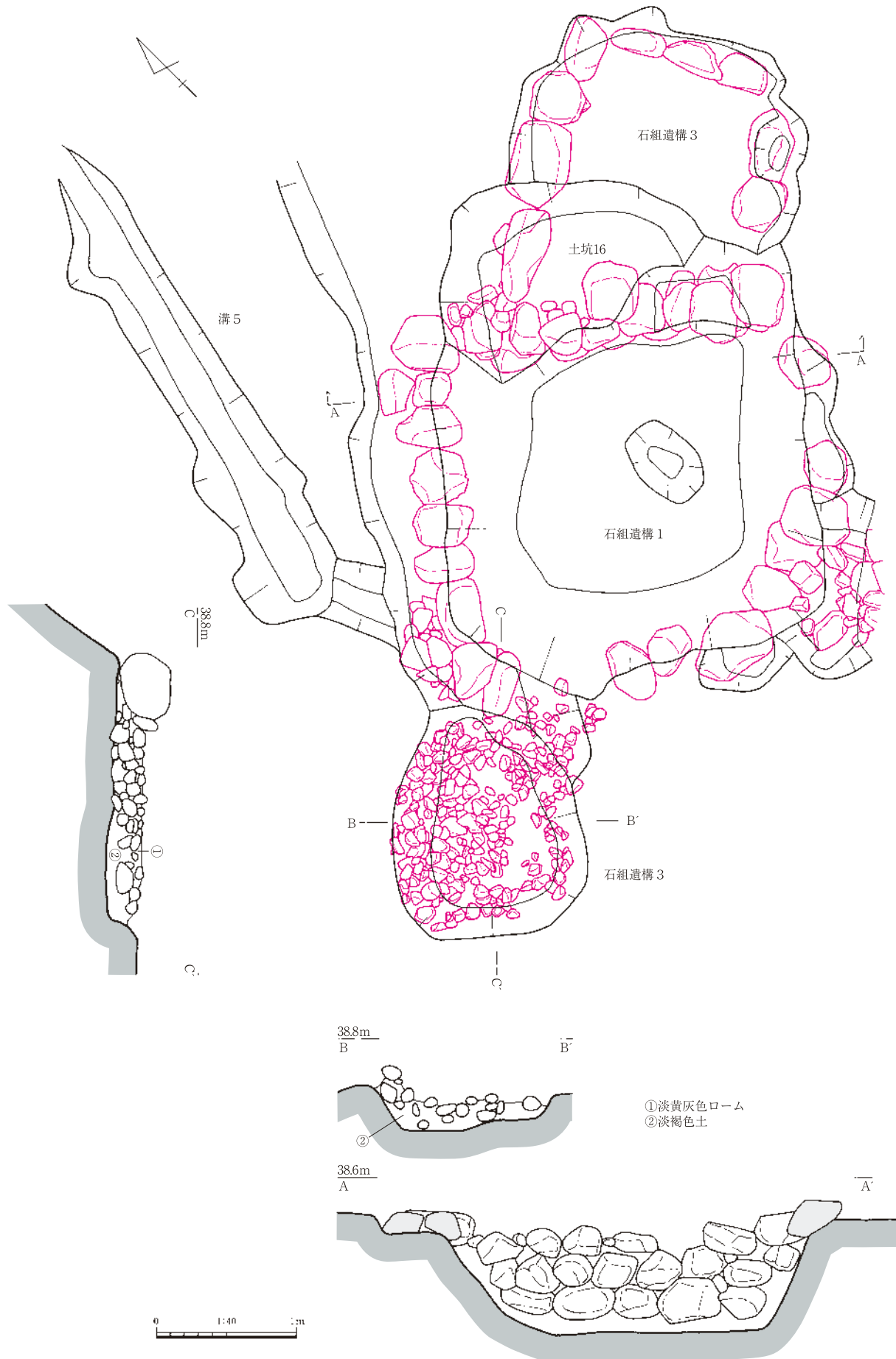
石組遺構1は、整地層の上から掘り込まれた、一辺約2.7m、深さ約1mの隅丸方形の土坑の外縁に、30～60cm大の礫を2段積みになっている。石組の外周は、3.2×3.0mの方形を呈し、北東-南西方向に長軸をとる。石組の基底石はローム土を使って根固めが施される。土坑底面は1.8×1.5mの隅丸方形である。土坑の四壁のうち、北東側の面のみ3段の石積みが施されている。この部分は先行する土坑16と切りあう箇所当たる。土坑内には石積みの礫と同様の礫が多量に転落していたことから、当初の石積みは3段以上あったものと推定される。土坑の南隅と西隅には石組の溝がつながっている。

出土遺物は、埋土中からの土師器鍋50、土師器坏底部51、備前焼播鉢52、須恵器高台付盤53、鉄釘M44を図化した。

石組遺構1の西隅から北へ向かって延びる溝5は、整地層上面で検出した。溝の幅は約50cm、深さ約30cmで、断面は逆台形を呈する。溝の底面の傾斜は北へ向かって下っていく。土坑埋土の最下層は粘性を帯び、砂を多く含むことから、土坑内への水の流れ込みが考えられる。南隅側の溝から土



第269図 石組遺構 1・2

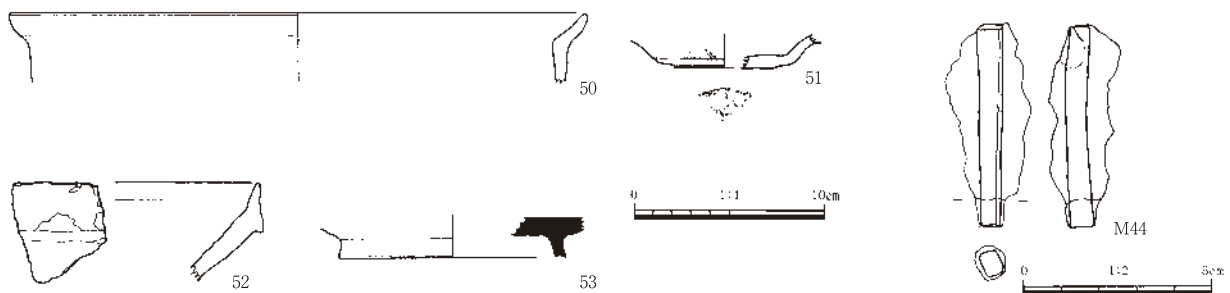


第270図 石組遺構 1 ~ 3

坑内に水が流れ込み、あふれた水が溝5を通じて北へ導かれたものと推測され、石組遺構1は沈砂の役割をもつと考えられる。土坑内と南東側の溝はロームブロックを多く含む土によって埋め戻されている。

石組遺構2は、石組遺構1の北東辺で接し、柄鏡の柄状に北東側へ延びる。長軸は北東-南西を取るが、石組遺構1よりも東に振れ、一致しない。2.5 × 2.2 m、深さ0.4 mの方形の土坑の内周に沿って2段積みの石組を持つ。東隅に当たる礫は五輪塔の地輪を転用したものである。南隅に当たる礫が石組遺構1を埋め戻した土の上面にあることと、自然堆積と考えられる埋土の違いから、石組遺構2は1よりも後に作られたものとする。しかし南西辺側の石列は不明瞭であり、両方が一連の遺構であった可能性もある。

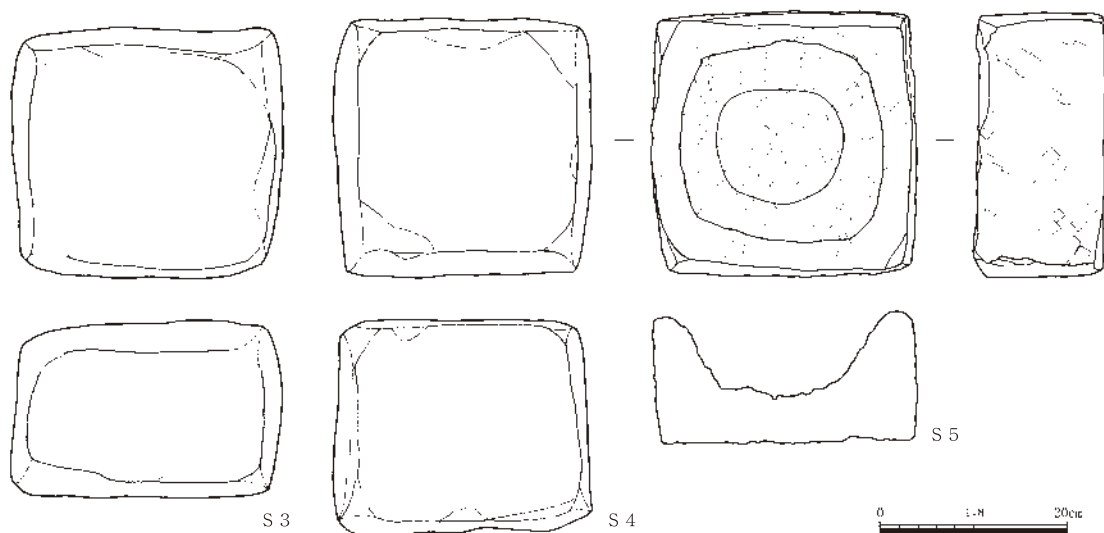
土坑の底面は平坦であり、土坑内には石組に使われるものよりも小振りの10cm ~ 40cm 大の礫が



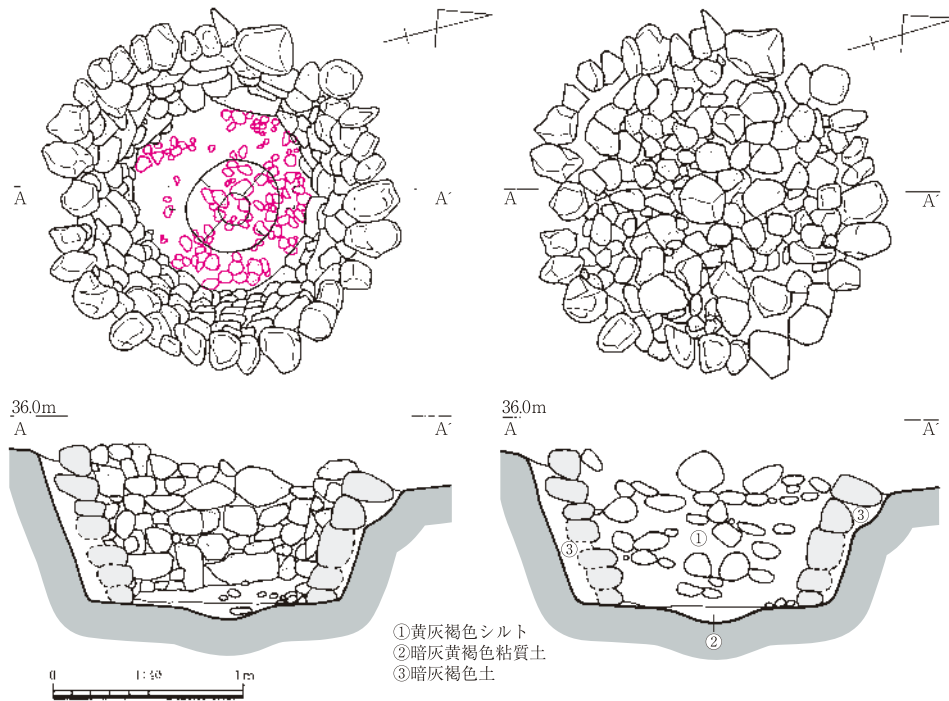
第271図 石組遺構1 出土遺物



第272図 石組遺構2 出土遺物



第273図 石組遺構2 出土遺物

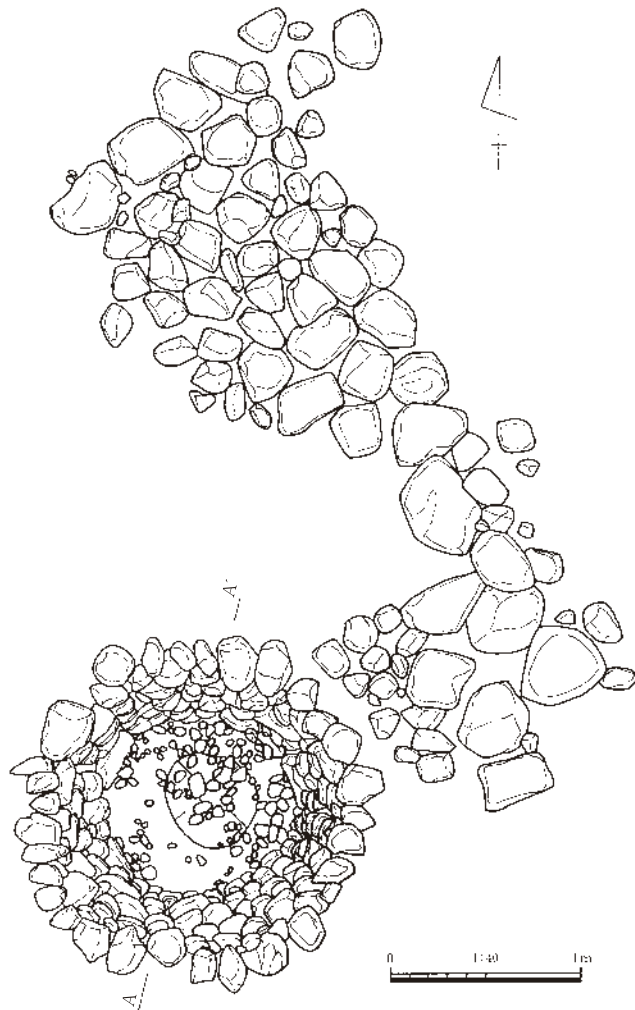


第274図 石組井戸

乱雑に入っている。これらの礫は石組に用いられていたものが転落したものと推測される。埋土中からは土師器皿 54 ~ 57 が出土している。また、地輪 S 3 ~ 5 を図化した。

石組遺構 3 は、石組遺構 1 の西隅に接する。径 1.3 × 1.6 m、深さ約 0.3 m の隅丸方形の土坑内に拳大の円礫を密に敷き詰めている。特に北西側の底面から壁面にかけての範囲に礫が多い。この礫の上に石組遺構 1 の基底石が乗り、土坑は整地土で埋め戻されていることから、石組遺構 3 は 1 に先行するものと推測される。石組遺構 3 は南西側で溝 4 を、北西側で土坑 15 を切ることから、それらよりも後出するものである。

土坑 16 は、石組遺構 2 の底面で埋土上面を検出した。石組遺構 1 の北東側に土坑部分が 1.4 m 拡幅したような形態をとる。検出面から底面までの深さは 0.4 m であるが、石組遺構 1 の土坑底面よりも約 0.2 m 高い。土坑内の埋土は石組遺

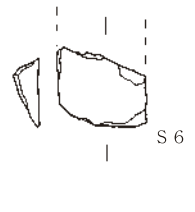


第275図 石組井戸・石敷き遺構

構1の北東辺の石組設置に伴う、人為的なものである。

土坑底面に砂や粘土などの堆積が認められないことから、石組遺構1を設置する際に、設計変更などの理由により掘り過ぎた部分を埋め直し、壁面保護のために土坑底面から石組みを施したと推測する。

これらの遺構は、出土遺物から16世紀ごろのものと考えられる。(家塚)



第276図 石敷き遺構出土遺物

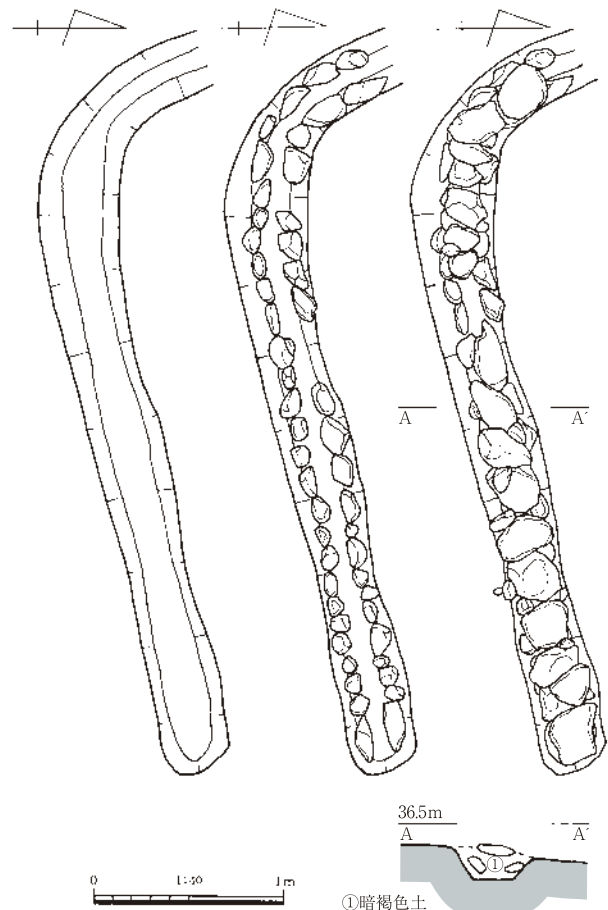
(7) 石組井戸・石敷き遺構(第274~276図、P L.69)

調査区東側のC2グリッドにあり、造成土除去後の暗灰褐色土を掘り下げた後に検出した。標高は48.5m前後である。

石組井戸は、地山自然礫を用いて築かれている。平面円形を呈し、検出面では長軸1.5m、短軸1.4m、底面では長軸0.96m、短軸0.9m、深さ0.8mを測る。石材は、上面に向かうほど傾斜し断面逆台形状を呈す。底面やや北東側は、約8cmに一段深くなっている。底面はやや皿状を呈し、径5cm前後の栗石が敷かれている。現状では、7段程度に積み上げられているが、本来は10段前後に積まれたものと考えられる。内部には、黄灰褐色シルト層とともに多量の石材が落ち込み、最下層には暗灰黄褐色粘質土が堆積している。

形態的には井戸としてよいが、水が湧いている状況は窺えず、単に貯水する性格の可能性もある。

石敷き遺構は、石組井戸の北東側に接し、逆L字状に人頭大の扁平な自然礫が敷かれていた。北側に向かって低く傾斜し、約15cmの高低差がある。



第277図 石蓋暗渠

両遺構の位置関係から一体のものと考えられ、石敷き遺構は、石組井戸の通路として機能していた可能性がある。

石敷き遺構から砥石片S6が出土しているが、正確な時期は不明である。いずれも、層位的には門前上屋敷遺跡14・15区造成土下で検出された田畠跡以前のものと考えられ、15世紀ごろのものと考えられる。(牧本)

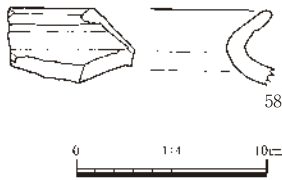
(8) 石蓋暗渠(第277図、P L.69)

調査区東側、C2グリッドにあり、造成土除去後黒褐色土遺物包含層を除去中に、標高36.3m前後の斜面地テラス上面で検出された。門前上屋敷遺跡15区から延びる石垣状の集石1の下場付近に

隣接している。東側約 2.5 m に石組井戸がある。

ほぼ東西に走るが、北西側は逆 L 字状に折れ、流失している。幅 0.3 ~ 0.45 m、深さ 0.15 m 前後の溝内に、拳大前後の自然礫を側壁に沿わせて並べ、その上に扁平な人頭大前後の石材を蓋石として被せている。長さは 4.1 m 以上にわたる。底面はほぼ平坦である。溝埋土は、暗褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、層位的に造成以前の中世後期ごろのものと考えられ、石組井戸の導水施設の可能性がある。(牧本)

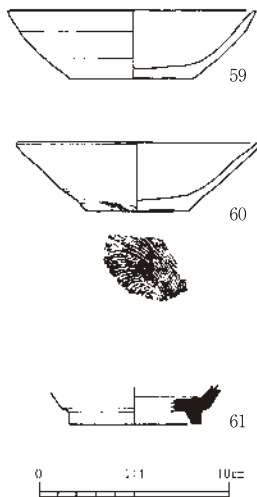


第279図 P 8 出土遺物

(9) 道状遺構 (第278図)

調査区東側の C 3・4 グリッドにあり、標高 38.8 ~ 42.4 m の北東側へ傾斜する斜面部に立地する。盛土遺構 1 と段状遺構 2 の盛土の下層で検出した。

斜面を段状に削り、礫と土で路面を造

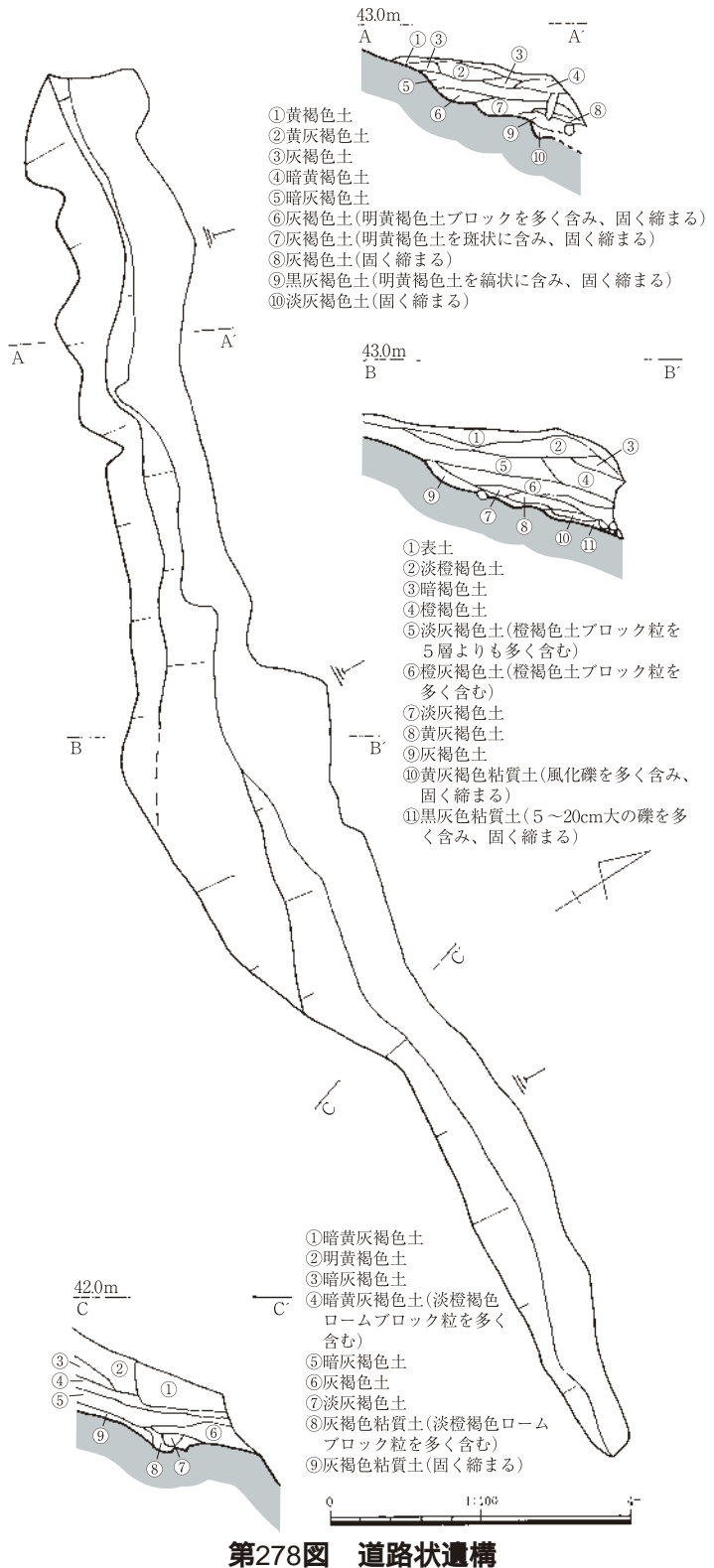


第280図 造成土中出土遺物

成したもので、東側から西側へ向かう、高低差 3 m の上り坂道である。検出した

長さは約 20 m、道幅は 1 ~ 1.5 m である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、層位的に判断すると、9 ~ 12 世紀の段状遺構 6 に関連する可能性がある。(家塚・牧本)

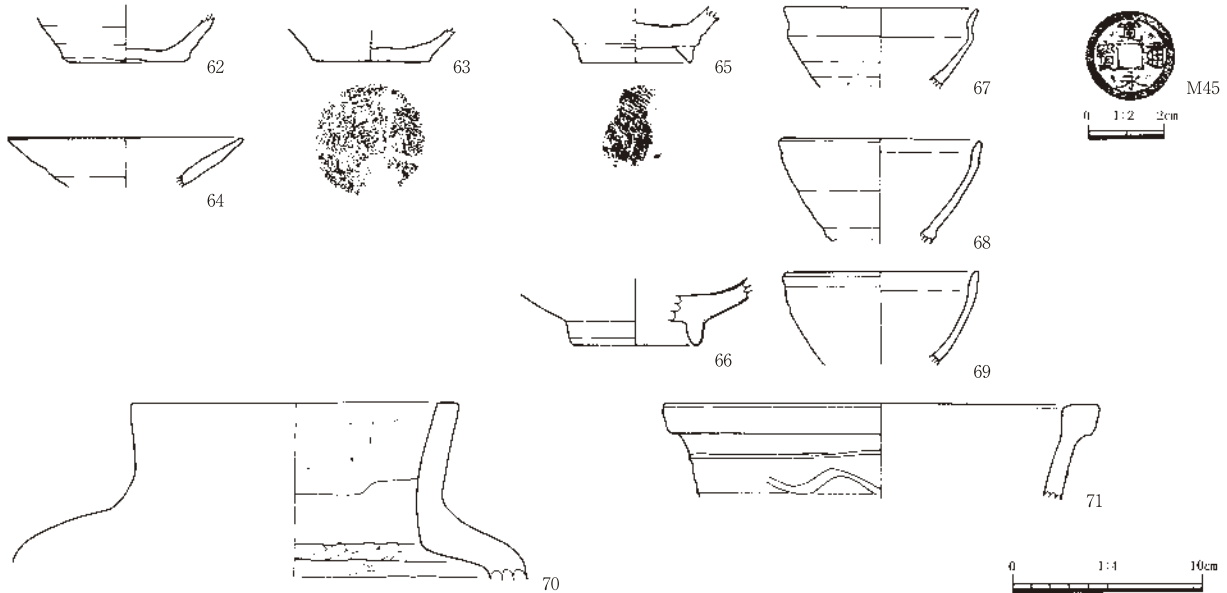


第278図 道路状遺構

(10) ピット群 (第219・279図)

調査区東側のC2グリッドにあり、標高37.7～38mの斜面部に位置する。黒褐色土包含層を除去下後にローム層上で散在した計9個のピットを検出した。本来は、包含層中から掘り込まれたものであろう。

P8内で備前焼甕58が出土している。性格は不明であるが、出土遺物から、中世ごろのものと考えられる。(牧本)



第281図 造成土上面遺構外出土遺物

(11) 造成土出土遺物 (第280図、P.L.75)

当遺跡東側から門前上屋敷遺跡15区にかけて、大規模な造成が行われていることは、すでに述べてあるが、当遺跡側でこの造成盛土中で土師器及び須恵器を検出した。土師器坏59は、伏せた状態でほぼ完存している。土師器坏60、須恵器高台付坏61は、サブトレンチで確認中に検出している。

51は、平安時代ごろのもので、混入したものと思われるが、59・60は、中森分類によれば15世紀ごろのものと考えられ、この造成が行われた時期を示すものと考えられる。(牧本)

(12) 造成土上面出土遺物 (第281図)

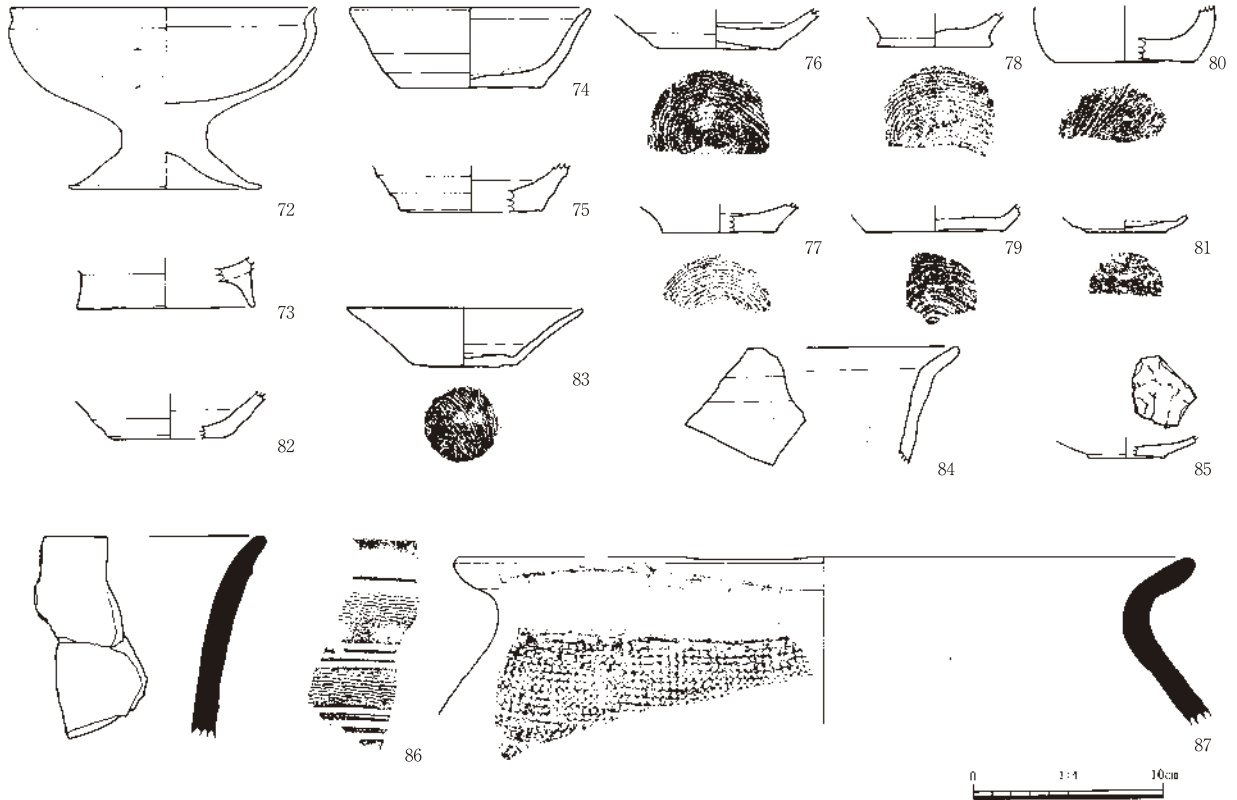
門前上屋敷遺跡に延びる造成土上面は、現代まで宅地として利用されており改変が著しい状態であったが、門前鎮守山城跡側での検出作業中に出土した遺物について触れる。

図化したものには、土師器坏62～64、土師器高台坏65、青磁碗66、瀬戸天目茶碗67～69、瓦質土器壺70、陶器鉢71、寛永通寶M45である。M45は 期古寛永銭である。

概ね中世後期(16世紀)から近世にかけてのものであり、すでに失われている造成土上で営まれたであろう遺構の存続期間を示しているものといえる。(牧本)

(13) 造成土下包含層出土遺物 (第282・283図、P.L.75)

厚さ約1.5m前後を測る造成土を除去した後に、さらに下層を掘り下げた段階で出土した遺物につ



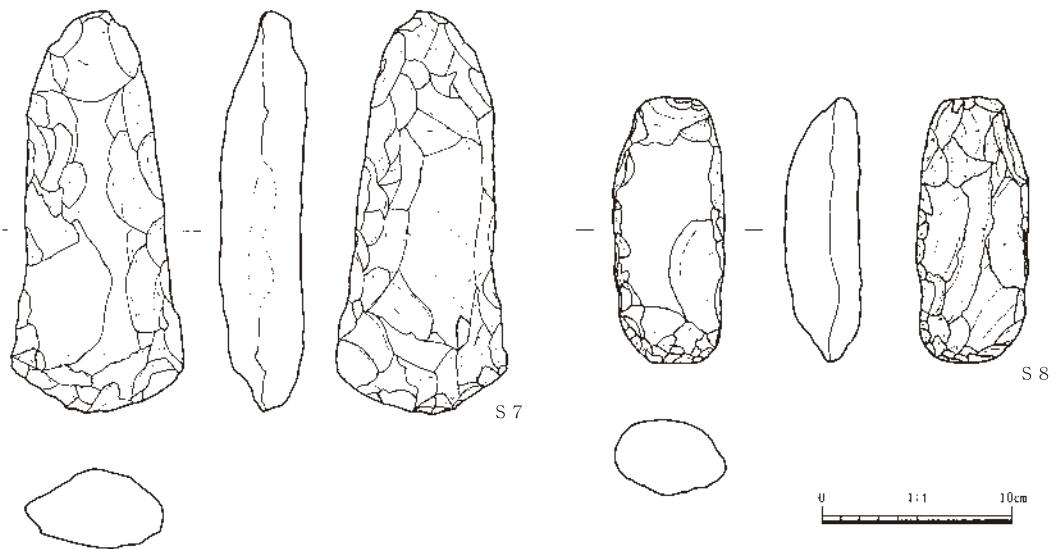
第282図 造成土下遺物包含層出土遺物

いて触れる。確実な遺構には伴ってはいないが、門前上屋敷遺跡で検出された田畠やそれ以前の遺構に属する遺物であろう。

図化したものは、短脚付碗 72、土師器高台付坏 73、土師器坏 74 ~ 83、土師器鍋 84、白磁皿 85、須恵器大型甕口縁部 86、須恵器甕 87、打製石斧 S 7・8 である。72 は、古墳時代中期ごろのものと考えられる。73・86 は奈良時代ごろ、74・75 は平安時代ごろ、76 ~ 84 は 15 世紀ごろのものと考えられる。85 は白磁皿 類にあたり、12 世紀ごろのものと考えられる。打製石斧 S 7 は、形態的には

弥生時代ごろのものと考えられようか。打製石斧 S 8 は、厚味があり風化が進んでいることから、縄文時代に遡るものと考えられる。

(牧本)



第283図 造成土下包含層出土遺物

第5節 遺物観察表

表33 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(1)

挿図	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第226図	1	土塁盛土中	須恵器	壺		器高 4.9 底径 12.0	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰色	
第226図	2	堀切	土師器	坏		器高 2.9	内外面ともナデ。	やや粗(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも黄橙色	
第226図	3	堀切	土師器	坏		器高 1.4	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第235図	4	土坑7	縄文土器	鉢?		器高 3.9	内外面粗い条痕。	粗(1-1.5mm大の砂粒含む)	やや不良	内外面とも褐色	
第235図	5	土坑7	弥生土器	壺		器高 4.0	外面口縁端部刻目。頸部条痕。頸部と胴部の境に突帯。内面粗い条痕。	やや粗(1mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも橙色	外面スス附着。
第239図	6	集石2	陶器	皿		口径9.6 器高1.9 底径3.6	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも橙色	
第242図	7	段状遺構3底面	土師器	羽釜		口径 21.4 器高 2.6	外面ヨコナデ。内面剥離のため調整不明。	密	良好	内外面とも橙色	外面スス附着。
第242図	M1	段状遺構3底面	古銭	元祐通寶		径2.5 厚さ0.13					
第242図	8	段状遺構4埋土中	土師器	鍋		器高 10.4	外面口縁部ヨコナデ。体部粗いたテハケ。内面後円部ヨコナデ。体部粗いヨコハケ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	外面スス附着。
第244図	9	盛土遺構1	瓦質土器	羽釜		口径 21.6 器高 4.2	外面口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも暗オリーブ灰色	外面スス附着。
第244図	10	盛土遺構1	備前焼	播鉢		器高 7.3	外面ヨコナデ。内面ヨコナデ後粗い6条の播目。	密	良好	内外面とも明赤褐色	B-2類
第244図	11	盛土遺構1	土師器	坏		器高 2.0 底径 6.6	外面体部ナデ。底部回転系切り。回転ナデ。	密	良好	内外面とも橙色	底部一部黒斑あり
第244図	12	盛土遺構1	土師器	火鉢?		器高 2.0	外面二段に三角形スタンプ文。内面粗いハケ。	密	良好	内外面ともにぶい橙色	
第245図	13	盛土遺構下灰褐色土包含層C3	常滑焼	甕		器高 9.8	外面平行叩き後ナデ。2箇所格子叩き文間に菊花文。内面粗いナデ。	密	良好	外面にぶい赤褐色。内面にぶい褐色	
第249図	14	土坑10	土師器	坏		口径13.0 器高4.0 底径6.1	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り後板目。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面にぶい黄橙～浅黄橙色。内面明黄褐色～浅黄橙色	外面底部黒斑
第249図	15	土坑10	土師器	坏		口径13.2 器高4.0 底径7.1	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り後ナデ。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面にぶい黄橙色。内面にぶい黄橙～浅黄橙色	体部外面爪痕
第249図	16	土坑10	土師器	坏		口径12.8 器高4.55 底径6.95	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り後板目。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙～にぶい黄褐色	
第249図	17	土坑10	土師器	坏		口径13.0 器高4.0 底径6.1	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面にぶい黄橙～浅黄褐色。内面明黄褐色～浅黄褐色	体部外面爪痕
第249図	18	土坑10	土師器	坏		口径12.7 器高3.8 底径7.0	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り後ナデ。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面黄橙～にぶい浅黄褐色。内面にぶい黄褐～にぶい黄橙色	
第249図	19	土坑10	土師器	坏		口径13.2 器高3.55 底径7.4	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り後板目。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面にぶい黄橙～にぶい黄褐色。内面にぶい黄橙～浅黄褐色	
第249図	M3	土坑10	鑄鉄	鍋		口径40.2 器高 21.6 底径 35.6	受口口縁をもつ鑄鉄製鍋。体部から低部に別の鉄器が付着していたか。				湯口痕跡なし
第249図	M4	土坑10	古銭	聖宋元寶		径2.4 厚0.15	風化著しい。				
第254図	20	土坑15	土師器	坏		口径11.1 器高3.7 底径4.8	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙～橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書「普」。

表34 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(2)

挿図	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第254図	21	土坑15	土師器	坏		口径11.1 器高3.5 底径5.0	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	外面橙色。内面黄橙～橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書「普」。
第254図	22	土坑15	土師器	坏		口径11.1 器高3.7 底径4.4	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	外面橙色。内面浅黄橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書「祖」。
第254図	23	土坑15	土師器	坏		口径10.65 器高4.15 底径4.3	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	外面明褐色。内面浅黄橙～橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書「土」。
第254図	24	土坑15	土師器	坏		口径10.3 器高3.5 底径4.4	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	不良	外面浅黄橙～明黄褐色。内面浅黄橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書「佛」
第254図	25	土坑15	土師器	坏		口径11.1 器高3.2 底径4.4	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	やや粗(石英・長石含む)	やや不良	内外面とも浅黄橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	26	土坑15	土師器	坏		口径 10.8 器高3.3 底径 4.6	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	27	土坑15	土師器	坏		口径 11.4 器高3.15 底径4.9	内外面とも風化のため調整不明。外面底部回転系切りか。	密	やや不良	外面浅黄橙～橙色。内面黄橙色	内外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	28	土坑15	土師器	坏		口径 11.2 器高3.6 底径4.6	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面体部回転ナデ。底部ヨコナデ。	密	やや不良	内外面とも黄橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	29	土坑15	土師器	坏		器高 2.85 底径4.6	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	外面黄橙～橙色。内面黄橙色	体部外面化粧土施す。墨書「普」。
第254図	30	土坑15	土師器	坏		器高 0.8 底径4.5	外面体部回転ナデ。底部静止系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	31	土坑15	土師器	坏		器高 1.1 底径4.7	外面体部ヨコナデ。底部静止系切り。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	やや不良	外面浅黄橙色。内面橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	32	土坑15	土師器	坏		口径10.8 器高3.15 底径4.25	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙～橙色	体部外面化粧土施す。
第254図	33	土坑15	土師器	坏		口径10.8 器高3.4 底径4.0	外面風化著しい。底部回転系切り。内面風化著しい。	やや粗(1mm大赤色粒含む)	やや不良	内外面とも浅黄橙色	体部内外面化粧土施す。
第254図	34	土坑15	土師器	坏		口径12.2 器高3.1 底径 4.4	外面体部回転ナデ。底部系切り痕。内面体部回転ナデ。底部ヨコナデ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙～橙色	体部外面化粧土施す。
第254図	35	土坑15	土師器	坏		口径11.6 器高3.4 底径3.9	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	外面浅黄橙～橙色。内面黄橙色	体部外面化粧土施す。底部外面墨書。文字不明「率」か。
第254図	36	土坑15	土師器	坏		口径 12.1 器高3.45 底径4.7	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	不良	内外面とも浅黄橙～黄褐色	体部外面化粧土施す。
第256図	37	段状遺構1 盛土上層	土師器	皿		口径 11.0 器高 2.1	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第256図	38	段状遺構1 盛土中	土師器	皿		器高 1.0 底径5.0	外面底部回転系切り後板目。内面調整不明。	密	やや不良	内外面とも橙色	
第256図	39	段状遺構1 盛土中	備前焼	播鉢		口径 32.6 器高 4.1	内外面ヨコナデ。	密	良好	外面橙～にぶい橙色。内面橙色。	
第256図	40	段状遺構1 表土中	備前焼	壺		口径 22.4 器高 7.8	内外面ヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい赤褐色	
第256図	41	段状遺構1 盛土中	青磁	碗		口径 14.0 器高 3.5	外面口縁端部付近形骸化した波状の雷文帯をもつ。	密	良好	灰白色	内外面暑く施釉。青磁碗C-類
第256図	42	段状遺構2 盛土最下層	須恵器	甕		器高 3.0	外面格子叩き。内面ハゲ目。	密	良好	内外面とも灰色	
第257図	43	段状遺構5 埋土中	土師器	坏		器高 1.0 底径 7.0	外面体部調整不明。底部回転系切り。内面ナデか。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第257図	44	段状遺構6 埋土中	土師器	坏		口径 12.4 器高 3.4	内外面とも回転ナデ。	密	良好	外面にぶい黄橙色。内面にぶい橙色。	外面スス付着。
第264図	45	溝3	備前焼	播鉢		器高 5.9	外面口縁部2条凹線。体部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも暗赤褐色	VA期

表35 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(3)

挿図	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第266図	46	D 3 整地層	備前焼	甕		器高 15.0 底径 26.9	外面ハケ状工具による上方向ナデ。内面ナデ。	密	良好	内外面とも ぶい赤褐色	
第266図	47	D 3 整地層	土師器	皿		口径11.3 器高2.35 底径5.5	外面体部上半ヨコナデ。下半-底部ケズリ後ナデ。内面体部ナデ。底部ヨコナデ。	密	良好	内外面とも ぶい黄橙色	体部内面工具痕あり。内外面指押え痕あり。
第266図	48	D 3 整地層	土師器	皿		口径 11.8 器高 2.3 底径 6.8	外面上半ヨコナデ。下半-底部ケズリ後ナデ。内面体部ナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	内外面指押え痕あり
第268図	49	溝 1 最下層	瀬戸	天目茶碗		口径 12.0 器高 5.6	轆轤整形。	密	良好	灰白色	内外面鉄釉。
第271図	50	石組遺構 1	土師器	鍋		口径 30.4 器高 3.7	外面ナデ。屈曲部指押さえ。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも ぶい黄橙色	
第271図	51	石組遺構 1	土師器	坏		器高 1.4 底径 5.2	外面体部斜方向ハケ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	良好	内外面とも ぶい黄橙色	外面黒斑あり。
第271図	52	石組遺構 1	備前焼	播鉢		口径 24.0 器高 5.2	外面回転ナデ。内面回転ナデ後粗い播目。	密	良好	外面灰色。 内面オリーブ 灰色	B - 2 類
第271図	53	石組遺構 1	須恵器	高台付盤		器高 2.1 底径 12.0	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰 色	
第272図	54	石組遺構 2	土師器	皿		口径 12.6 器高 2.1 底径 5.0	外面口縁部ヨコナデ。体部下半タテハケ後ナデ。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第272図	55	石組遺構 2	土師器	皿		口径 12.4 器高 2.1 底径 5.4	外面口縁部ヨコナデ。体部下半手捏ね成形。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第272図	56	石組遺構 2	土師器	皿		口径 12.6 器高 2.4 底径 5.0	外面口縁部ヨコナデ。体部下半手捏ね成形。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第272図	57	石組遺構 2	土師器	小皿		口径8.2 器高1.8 底径1.2	外面口縁部ヨコナデ。体部下半手捏ね成形。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	口唇部油煙付着。
第273図	S3	石組遺構 2	五輪塔	地輪		最大長27.1 最大幅28.8 最大厚18.8	方形に加工した五輪塔地輪。加工痕は明瞭ではない。				
第273図	S4	石組遺構 2	五輪塔	地輪		最大長27.1 最大幅27.4 最大厚22.8	方形に加工した五輪塔地輪。側面に幅1.8cm程度のノミ痕が残る。				
第273図	S5	石組遺構 2	五輪塔	地輪		最大長28.2 最大幅27.9 最大厚13.5	中央が掘り窪められた五輪塔地輪。幅1-2cm程度のノミ痕が明瞭に残る。				
第276図	S6	石敷き状遺構	砥石		細粒花崗岩	最大長 3.8 最大幅4.5 最大厚 1.25	裏面、一方端欠損。主な砥面は1面。擦痕明瞭に残る。				
第279図	58	P 8 埋土中	備前焼	甕		口径 17.0 器高 4.0	外面口縁部ナデ後1奈洗線。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも ぶい褐色	期?
第280図	59	造成土中 C 1	土師器	坏		口径13.0 器高3.6 底径6.7	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	不良	内外面とも橙 色	内面鉄器付着痕。
第280図	60	造成土中 C 2	土師器	坏		器高3.6 底径 5.5	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも橙 色	系切り痕体部まで及ぶ。
第280図	61	造成土中 C 1 トレンヂ	須恵器	高台坏		器高 2.0 底径 7.0	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰 色	
第281図	62	遺構外 B 4	土師器	坏		器高 2.4 底径 6.7	外面回転ナデ。底部ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ。	密	良好	内外面とも ぶい黄橙色	
第281図	63	遺構外 C 2	土師器	坏		器高 1.8 底径6.2	外面風化著しい。回転ナデか。底部回転系切り。内面風化著しい。回転ナデか。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙色	
第281図	64	遺構外石垣裏込め土中	土師器	坏		口径 12.4 器高 3.6	内外面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙色	
第281図	65	C 2 表土中	土師器	高台坏		器高 2.9 底径 5.7	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデか。	やや粗(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも橙 色	
第281図	66	遺構外 C 2 表土中	青磁	高台付碗		器高 3.5 底径 6.6	内外面とも厚いオリーブ色の施釉。底部外面無釉。	密	良好	灰オリーブ	
第281図	67	遺構外 C 4	瀬戸	天目茶碗		口径 10.2 器高 4.2	内外面とも回転ナデ。	密	良好	灰オリーブ	内外面鉄釉。

表36 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(4)

挿図	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第281図	68	遺構外 C 3 表土	瀬戸	天目茶碗		口径 10.4 器高 5.5	内外面とも回転ナデ。外面体部施釉。底部付近露胎。内面施釉。	密	良好	灰オリーブ	内外面鉄釉。
第281図	69	遺構外 B 3 表土中	瀬戸	天目茶碗		口径 10.0 器高 5.0	内外面とも回転ナデ。外面体部上半施釉。下半露胎。内面施釉。	密	良好	灰オリーブ	内外面鉄釉。
第281図	70	遺構外 C 1	瓦質土器	短頸壺		口径9.2 器高 17.1	外面ナデ。内面指押さえ。	密	良好	外面暗灰色。内面灰色	
第281図	71	遺構外 C 2	陶器	鉢		口径 22.7 器高 5.0	外面回転ナデ。2条凹線間に波状凹線。内面ナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい橙色	
第281図	M45	遺構外 B 2	古銭	寛永通寶		径2.40 厚さ0.12					期
第282図	72	造成土下包 含層 B 3	土師器	脚付埴		口径 16.0 器高9.6 底径 9.9	外面口縁部ヨコナデ。体部左方向ケズリ。脚部ケズリ後ナデ。内面体部丁寧なナデ。脚部ナデ。	密(1mm以下砂粒含む)	良好	内外面とも浅黄橙色	脚部指頭圧痕あり。
第282図	73	造成土下包 含層 C 2	土師器	高台坏		器高 2.6 底径 9.3	内外面とも回転ナデ。	やや粗(1mm大の砂粒含む)	良好	内外面ともに ぶい橙色	底部内面スス付着。
第282図	74	造成土下包 含層 C 2	土師器	坏		口径 12.4 器高4.2 底径 7.4	外面風化著しい。ナデか。内面体部回転ナデ。底部ナデ。	密(1mm以下砂粒含む)	やや不良	内外面とも橙 ~にぶい橙色	内面底部スス付着。
第282図	75	造成土下包 含層 C 2	土師器	坏		器高 2.4 底径 6.4	外面体部回転ナデ。底部糸切りか。内面回転ナデ。	密	良好	内外面とも橙 色	
第282図	76	造成土下包 含層 B 3 黒褐色土	土師器	坏		器高 2.1 底径 6.5	外面体部ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄橙色	
第282図	77	造成土下包 含層 C 2	土師器	坏		器高 1.6 底径 6.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面ナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第282図	78	造成土下包 含層 B 2	土師器	坏		器高 1.8 底径 6.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面ナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい橙色	
第282図	79	造成土下包 含層 B 3 トレンチ	土師器	坏		器高 1.4 底径 7.3	外面体部ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄橙色	
第282図	80	造成土下包 含層 B 2	土師器	坏		器高 3.0 底径 7.4	外面体部ナデ。底部静止糸切り。内面ナデ。	密	良好	内外面とも橙 色	
第282図	81	造成土下包 含層 B 2	土師器	皿		器高 0.9 底径 4.3	内外面風化著しい。底部外面回転糸切り。	密	良好	内外面ともに ぶい黄橙色	
第282図	82	造成土下包 含層 B 2	土師器	坏		器高 2.4 底径 5.7	外面体部回転ナデ。底部ケズリ。内面丁寧なナデ。	密	やや不良	外面にぶい黄褐色。内面明赤褐色	
第282図	83	造成土下包 含層 B 2	土師器	坏		口径 12.4 器高3.5 底径4.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部ヨコナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい橙色	
第282図	84	造成土下包 含層 B 2	土師器	鍋		器高 7.3	外面ナデ。内面ヨコハケ。	密	良好	外面にぶい黄橙色。内面褐灰色	外面スス付着。
第282図	85	造成土下包 含層 C 2	白磁	皿		器高 1.2 底径 4.0	外面体部施釉。底部露胎。内面暗文。施釉。	密	良好	灰白色	白磁皿 類
第282図	86	造成土下包 含層 B 2	須恵器	甗		器高 10.7	外面3条凹線により削り出された鈍い突帯間に7条原体の波状文。内面回転ナデ。	密	良好	内外面とも黄灰色	
第282図	87	造成土下包 含層 B 2	須恵器	甗		口径 38.6 器高 8.8	外面口縁部ヨコナデ。体部格子叩き。内面口縁部ヨコナデ。体部粗いハケ。	密	良好	外面灰色。内面灰黄~暗赤褐色	
第283図	S7	造成土下包 含層 C 2	石器	打製石斧	安山岩	最大長21.1 最大幅9.0 最大厚4.1 重量932g	刃部撥形に広がる。細めで厚味のある打製石斧。				
第283図	S8	造成土下包 含層 C 2	石器	打製石斧	無斑晶安山岩	最大長14.0 最大幅5.9 最大厚4.1 重量504g	小形で厚味のある打製石斧。裏面は平坦だが、表面は縁辺部に調整が入るのみで丸みを持つ。				

なお、鉄関連遺物観察表は、第6章第5節参照。

第5章 自然科学分析の成果

第1節 門前上屋敷遺跡出土木製品の樹種

鳥取大学農学部（環境木材科学学研究室）

教授 古川 郁夫

1. はじめに

門前上屋敷遺跡は、鳥取県西伯郡大山町門前字若宮に位置し、発掘調査の結果、縄文時代から江戸時代にかけて多くの遺構や遺物が検出された。なかでも平安時代終わりから室町時代と考えられる掘立柱建物跡、溝状遺構（溝8）、土地造成や耕作跡の見られる田・畠跡は、大変良好な保存状態で検出された。本報告の試料はこうした遺構（溝8）から出土したものである。

2. 鑑定方法

鑑定試料は丸棒状木製品2点（W3：試料番号336とW2：試料番号265）である。試料番号336は、外径約23mmで中央部にホゾ状の突起部を有していた。一方、試料番号265は、外径約26mmで中央部に約6mmの空洞が棒の長さ方向全体に亘って貫通していた。両試料ともかなり劣化が進んでいた。触診によって比較的木質感が残っており、しかも製品の原形を損ねることのない部位（棒の中心部付近）から観察用小片（木口断面3×3mm程度、繊維方向5mm程度）を1～2片、新しいカミソリの刃を用いて切り出した。これらの小片を実体顕微鏡のもとで3断面（木口断面、柁目断面、板目断面）を剖出した。剖出面はCPD（臨界点乾燥）したうえで、白金パラジウムを蒸着し、SEMで観察した。

樹種鑑定にあたっては、出土材関連樹種の解剖学的記載のある成書1～3）あるいは報告書4）を参照した。

3. 鑑定結果

1) 試料番号336について（PL.78）

木口断面（写真1）において、構成細胞は規則正しい放射列が認められ、放射組織は単列で、年輪の外側部分で樹脂道状の大きな空隙が認められた。採取した小片は髄付近であったため、早材と晩材の区別は不明瞭であった。柁目断面（写真2）において、典型的な窓状分野壁孔が認められ、しかも放射仮道管が存在していた。板目断面（写真3）において単列放射組織が認められた。これらのことから、この樹種は二葉松マツ属（アカマツかクロマツ）と判定した。

2) 試料番号265について（PL.78・79）

採取した小片の木口断面の観察から、試料の採取部位は髄に接した第1年輪部であることが分かった。したがって試料中心に見られた空洞部分は髄と判断した。この試料の髄の直径は約6mmと非常

に大きいのが特徴であった。

木口断面(写真4、5)において、散在状の小径道管(直径50 μ m程度)が多数認められ、これらの小径道管が単独ないしは2~3個複合して年輪内で均等に分布していたことから、この試料は典型的な散孔材であることが分かった。放射組織は比較的大きな細胞で構成された単列から2、3列の多列のものまで存在していた。柁目断面(写真6、7)では、道管に明瞭な階段状穿孔が認められ、穿孔板の傾斜は大きく、階段数も密で、多いものでは50本位あった。道管の内壁には弱い螺旋肥厚が見られ、道管相互間壁孔は対列状もしくは階段状であった。道管放射組織間壁孔は不規則な小さな穴の篩状であった。軸方向柔細胞は散在状であまり明瞭ではなかった。放射組織には平伏細胞が少なく、主に直立細胞や方形細胞から成る典型的な異性型であった。直立細胞の部分(単列翼部)が放射組織間を軸方向に連結しているおり、放射組織の高さは1~2 mmであった。板目断面(写真8)では、異性型の放射組織や軸方向柔組織と似た構造を示す放射組織の単列翼部が観察された。

以上の観察結果からこの樹種は、大きな髓を有し、しかも組織構造学的特徴からキブシと判定した。

なお、キブシの髓は灯心に使われたことから、この木器の髓(あるいは木器自体)は照明器具材として使われた可能性がある。

参考文献

- 1) 林 昭三: 日本産木材顕微鏡写真集、京都大学木質科学研究所発行(1991)
- 2) 島地 謙・伊東隆夫: 図説 木材組織、地球社(1982)
- 3) 島地 謙・伊東隆夫: 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣(1988)
- 4) 伊東隆夫: 日本産広葉樹材の解剖学的記載、木材研究・資料31号(1995)、同、木材研究・資料32号(1996)、同、木材研究・資料33号(1997)、同、木材研究・資料34号(1998)、同、木材研究・資料35号(1999)、京都大学木質科学研究所刊行

第2節 門前上屋敷遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

．概要

門前上屋敷遺跡の発掘調査では、中世後期(15世紀頃)とされる水田跡や畠跡が検出された。そこで、これらの遺構における栽培植物の推定を主目的として、植物珪酸体分析および花粉分析を行った。

分析対象は、基本層序について採取された試料1(橙色土、中世後期の造成土) 試料2(層: 灰褐色土、中世後期の田2耕作土) 試料3(層: 灰褐色土、中世の耕作土) 試料4(層: 暗灰褐色土、中世の耕作土) 試料5(層: 黒褐色土、古代~中世前期) 試料6(層: 黒褐色土、弥生時代以降) 試料7(にぶい褐色土、ソフトロームの2次堆積土) および遺構について採取された試料8(田1の耕作土) 試料9(畠3の耕作土) 試料10(畠2の耕作土) 試料11(畠3上面の炭層)の計11点である。

．植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生

産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

3. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表37および第284図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ムギ類（穎の表皮細胞）、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科 - タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科 - その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

その他

(2) 植物珪酸体の検出状況（第284図）

1) 基本層序（試料1～試料7）

試料7では、ミヤコザサ節型が多量に検出され、ススキ属型、ウシクサ族A、チマキザサ節型なども認められた。試料6では、チマキザサ節型が大幅に増加し、ミヤコザサ節型は減少している。また、キビ族型、ヨシ属、メダケ節型、ネザサ節型が出現している。試料5では、イネや樹木（その他）が出現している。イネの密度は1,400個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。試料4から試料2にかけては、イネが増加し、チマキザサ節型やミヤコザサ節型は大幅に減少している。イネの密度は、試料4では4,300個/gと比較的高い値であり、試料3と試料2では5,400個/gおよび6,400個/gと高い値である。試料1では、イネやミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。

おもな分類群の推定生産量によると、試料7ではミヤコザサ節型、試料6から試料4にかけてはチマキザサ節型が優勢であり、試料3と試料2ではイネが多くなっている。

2) 田1耕作土（試料8）

イネ、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が多く検出され、キビ族型、ヨシ属、メダケ節型、ネザサ節型なども認められた。イネの密度は5,900個/gと高い値である。

3) 畠3耕作土（試料9）

イネが多量に検出され、ヨシ属、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。イネの密度は12,100個/gと高い値である。

4) 畠2耕作土(試料10)

イネ、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が多く検出され、キビ族型、ヨシ属、メダケ節型、ネザサ節型、樹木(その他)なども認められた。イネの密度は8,300個/gと高い値である。

5) 畠3上面の炭層(試料11)

イネ、ススキ属型が多量に検出され、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヨシ属、シバ属、ネザサ節型なども認められた。イネの密度は15,300個/gとかなり高い値である。ムギ類(穎の表皮細胞)の密度は1,500個/gと低い値であるが、穎(籾殻)は栽培地に残されることは稀であることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。

4. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

(1) 基本層序

ソフトロームの2次堆積土(試料7)の堆積当時は、ササ属(おもにミヤコザサ節)を主体としたイネ科植生であったと考えられ、部分的にススキ属やチガヤ属なども見られたと推定される。ササ属のうち、ミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ないところに分布しており、冬季の乾燥に適応している。一方、チシマザサ節やチマキザサ節は日本海側の多雪地帯に分布しており、冬季の乾燥に弱い。両者の分布境界はミヤコザサ線とよばれ、最大積雪約50cmの等深線とほぼ一致している(室井,1960 鈴木,1978)。ここではミヤコザサ節が優勢であることから、当時は比較的積雪の少ない乾燥した環境であったと推定される。

ササ属は常緑であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカ類などの草食動物の重要な食物となっている(高槻,1992)。遺跡周辺にこれらのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

弥生時代以降とされる土層(試料6)の堆積当時は、ササ属(おもにチマキザサ節)を主体としてメダケ属(メダケ節やネザサ節)なども生育するイネ科植生であり、ヨシ属などが生育する湿地的なところも分布していたと推定される。ここでは、ササ属の主体がミヤコザサ節からチマキザサ節やチマキザサ節に移行していることから、当時は積雪量が増加していたと考えられる。

古代~中世前期の土層(試料5)では、少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

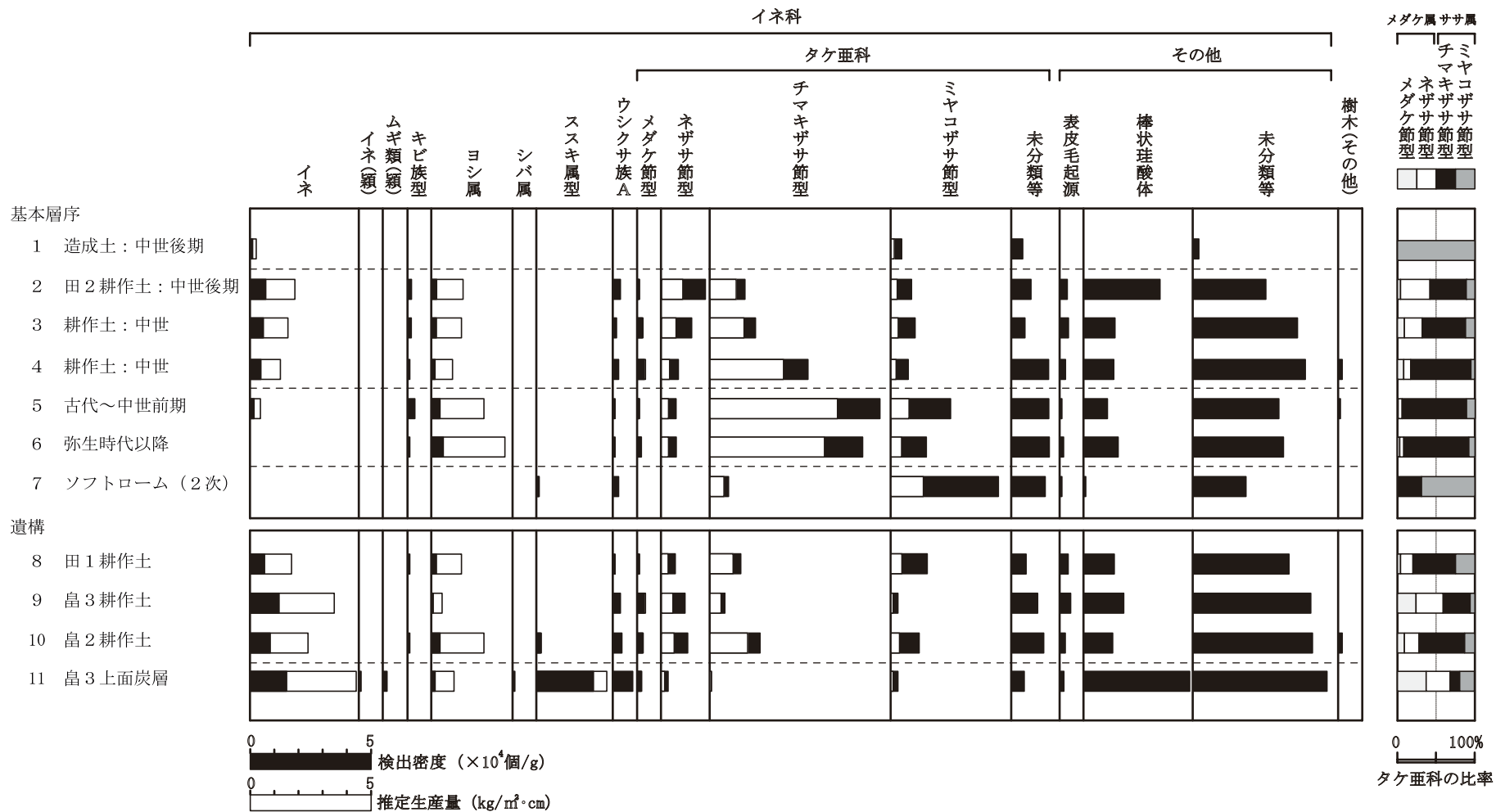
中世の耕作土(試料4)から中世後期の田2耕作土(試料2)にかけては、おもに稲作が行われていたと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、周辺にはメダケ属(メダケ節やネザサ節)やササ属(おもにチマキザサ節)などの竹笹類が分布していたと考えられる。

(2) 遺構

田1(試料8)および畠3(試料9)と畠2(試料10)では、おもに稲作が行われていたと考えられ、畠3ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。畠3上面の炭層(試料11)では、イネやススキ属が多量に検出されることから、これらの植物が何らかの形で焼かれていた可能性が考えられる。

表37 門前上屋敷遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: × 100 個 /g)		地点・試料										
分類群	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
イネ科	Gramineae (Grasses)											
イネ	<i>Oryza sativa</i>	8	64	54	43	14			59	121	83	153
イネ籾殻 (穎の表皮細胞)	<i>Oryza sativa</i> (husk Phytolith)											7
ムギ類 (穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i> (husk Phytolith)											15
キビ族型	Paniceae type		14	13	7	28	7		7		7	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		21	20	14	35	49		20	7	35	15
シバ属	<i>Zoysia</i>											7
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type								7		14	240
ウシクサ族 A	Andropogoneae A type		29	13	22	7	7	22	7	29	35	80
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)											
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		7	20	29	7	14		7	29	21	15
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		186	128	72	62	63		59	100	111	29
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		150	195	420	728	654	80	132	64	215	7
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	45	86	101	72	250	148	450	152	29	118	29
未分類等	Others	45	79	54	152	153	155	138	59	107	132	51
その他のイネ科	Others											
表皮毛起源	Husk hair origin		29	34	22	7	14	7	33	43	21	15
棒状珪酸体	Rodshaped		314	128	123	97	141	7	125	164	118	437
未分類等	Others	23	300	431	463	354	373	218	396	486	493	553
樹木起源	Arboreal											
その他	Others				14	7					14	
植物珪酸体総数	Total	121	1278	1191	1454	1747	1625	929	1055	1179	1418	1652
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m ² · cm): 試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出												
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.22	1.89	1.58	1.28	0.41			1.74	3.57	2.45	4.49
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		1.35	1.27	0.91	2.19	3.11		1.25	0.45	2.19	0.92
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type							0.09			0.17	2.98
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		0.08	0.23	0.34	0.08	0.16		0.08	0.33	0.24	0.17
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		0.89	0.61	0.35	0.30	0.30		0.28	0.48	0.53	0.14
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		1.12	1.46	3.15	5.46	4.91	0.60	0.99	0.48	1.62	0.05
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.14	0.26	0.30	0.22	0.75	0.44	1.35	0.45	0.09	0.35	0.09
タケ亜科の比率 (%)												
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		4	9	8	1	3		4	24	9	37
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		38	23	9	5	5		16	35	19	31
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		48	56	78	83	84	31	55	35	59	12
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	100	11	12	5	11	8	69	25	6	13	19



第284図 門前上屋敷における植物珪酸体分析結果

文献

- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
- 杉山真二 (2004) 植物珪酸体分析による中期更新世以降の古環境推定 - タケ亜科の植生変遷と気候・積雪量の変動 -. 日本第四紀学会講演要旨集, p.164-167.
- 鈴木貞雄 (1996) タケ科植物の概説. 日本タケ科植物図鑑. 聚海書林, p.8-27.
- 高槻成紀 (1992) 北に生きるシカたち - シカ、ササそして雪をめぐる生態学 -. どうぶつ社.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.
- 室井緯 (1960) 竹笹の生態を中心とした分布. 富士竹類植物園報告, 5, p.103-121.

. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に應用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 方法

花粉の分離抽出は、中村 (1973) の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加えて 15 分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎) を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示した。イネ属については、中村 (1974, 1977) を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

3. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 6、樹木花粉と草本花粉を含むもの 2、草本花粉 13、シダ植物孢子 2 形態の計 23 である。分析結果を表 38 に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ブドウ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科 - イラクサ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属 - ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科 - ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴 (第285図)

1) 基本層序 (試料1 ~ 試料7)

試料7から試料4にかけては、花粉がほとんど検出されなかった。試料3では、花粉密度が低く、シダ植物孢子が約6割を占める。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が優占し、タンポポ亜科、ナデシコ科、アカザ科 - ヒユ科、アブラナ科、ソバ属などが伴われる。アブラナ科やソバ属は虫媒花であり、風媒花と比較して現地性が高く花粉の生産量も少ないことから、他の分類群と比較して過大に評価する必要がある。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などがわずかに認められた。試料2では、イネ科 (イネ属型を含む)、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。試料1では、花粉がほとんど検出されなかった。

2) 田1耕作土 (試料8)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高い。草本花粉では、イネ科 (イネ属型を含む) が優占し、ヨモギ属、アブラナ科、ソバ属、カヤツリグサ科、アカザ科 - ヒユ科、ナデシコ科などが伴われる。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属などがわずかに認められた。

3) 畠3耕作土 (試料9)

イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。

4) 畠2耕作土 (試料10)

イネ科、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。

5) 畠3上面の炭層 (試料11)

花粉密度が低く、樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高い。草本花粉では、イネ科 (イネ属型を含む)、ヨモギ属が卓越し、カヤツリグサ科、タンポポ亜科、アブラナ科などが伴われる。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属がわずかに認められた。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

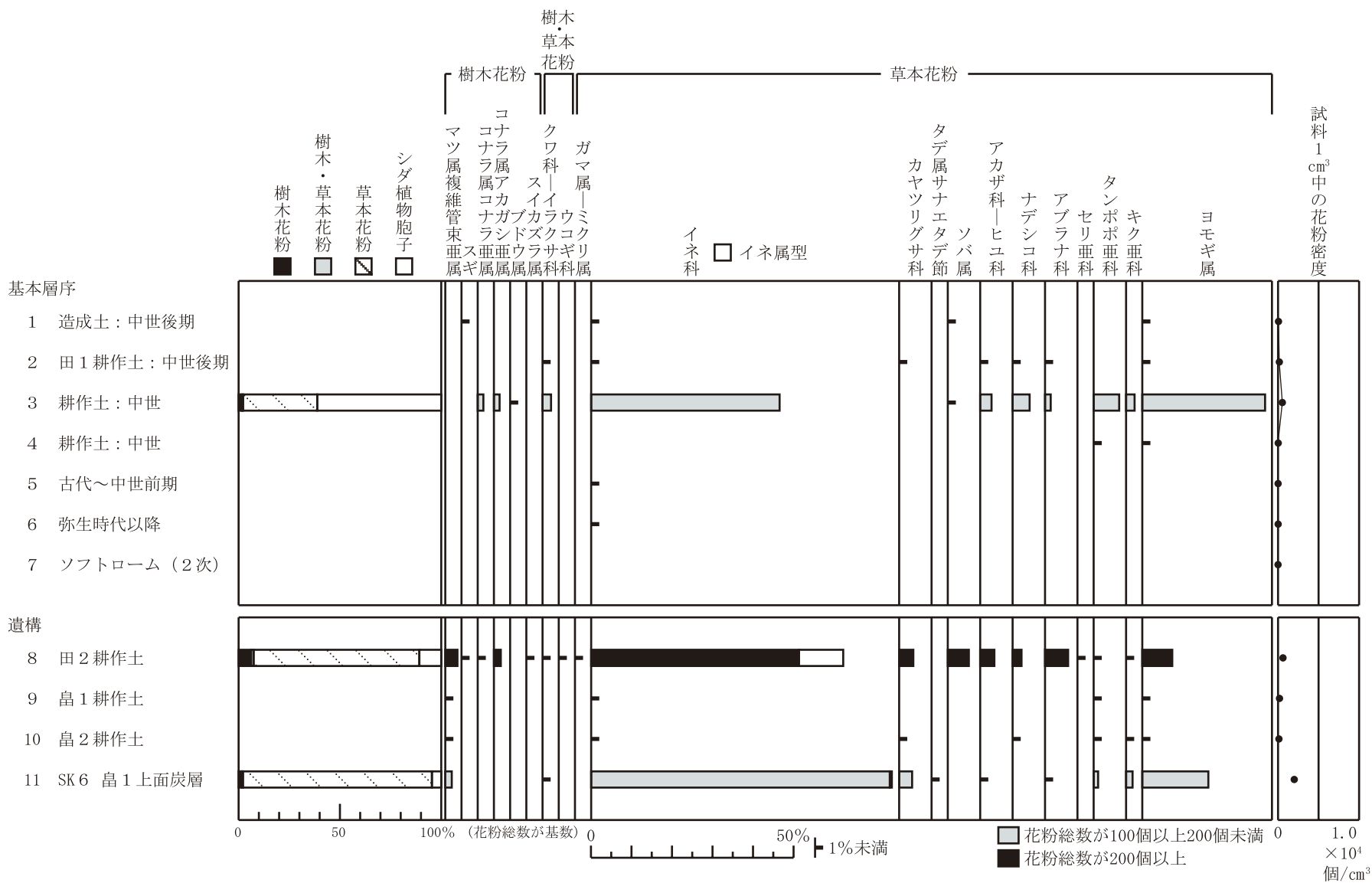
(1) 基本層序

試料7から試料4にかけては、花粉がほとんど検出されないことから、植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

中世の耕作土 (試料3) では、ソバなどが栽培されていたと考えられ、周囲はイネ科、ヨモギ属を主にアカザ科 - ヒユ科、アブラナ科なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した人里の環境であったと推定される。アブラナ科には、アブラナ (ナタネ)、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多

表38 門前上屋敷遺跡における花粉分析結果

分類群		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
学名	和名											
Arboreal pollen	樹木花粉											
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属								7	1	1	3
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1							2			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属			2					2			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属			2					4			
<i>Vitis</i>	ブドウ属			1								
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属								1			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉											
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科		1	3					2			1
Araliaceae	ウコギ科								1			
Nonarboreal pollen	草本花粉											
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属 - ミクリ属								1			
Gramineae	イネ科	3	7	66			2		118	21	5	140
<i>Oryza type</i>	イネ属型	1	2			1			25			1
Cyperaceae	カヤツリグサ科		3						8		2	6
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節											1
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1		1					12			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科 - ヒコ科		1	4					8			1
Caryophyllaceae	ナデシコ科		2	6					5		2	
Cruciferae	アブラナ科		1	2					13			1
Apioidae	セリ亜科								1			
Lactucoideae	タンポポ亜科			9	1				1	1	2	2
Asteroidae	キク亜科			3					2		1	3
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1	3	43	2				17	2	2	31
Fern spore	シダ植物孢子											
Monolate type spore	単条溝孢子		30	209	11	1	2		23	5	28	6
Trilate type spore	三条溝孢子		4	15	5		1		5	1	1	3
Arboreal pollen	樹木花粉	1	0	5	0	0	0	0	16	1	1	3
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	1	3	0	0	0	0	3	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	6	19	134	3	1	2	0	211	24	14	186
Total pollen	花粉総数	7	20	142	3	1	2	0	230	25	15	190
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度	5.6	1.6	5.3	2.1	0.7	1.4	0.0	6.1	1.8	1.1	2.0
		$\times 10$	$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$		$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10^3$
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	2	2	0	0	0	7	0	1	3
Fern spore	シダ植物孢子	0	34	224	16	1	3	0	28	6	29	9
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(+)	(+)	(+)	(+++)



第285図 門前上屋敷遺跡における花粉ダイアグラム

くの栽培植物が含まれており、これらが栽培されていた可能性も考えられる。森林植生としては、周辺地域にナラ類（コナラ属コナラ亜属）やカシ類（コナラ属アカガシ亜属）などが分布していたと推定される。

中世後期の田2耕作土（試料2）では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、少量ながらイネ属型が認められることから、稲作が行われていたことが示唆される。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

（2）遺構

田1耕作土（試料8）では、イネやソバなどが栽培されていたと考えられ、周囲はイネ科を主にヨモギ属、アカザ科 - ヒユ科、アブラナ科などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した人里の環境であったと推定される。森林植生としては、周辺地域にカシ類やマツ類（マツ属複雑管束亜属）などが分布していたと考えられる。

畠3上面（試料11）では、イネが栽培されていたと考えられ、周囲はイネ科やヨモギ属が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと推定される。

畠3耕作土（試料9）と畠2耕作土（試料10）では、花粉があまり検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

文献

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原.新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法,角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集,60p.

中村純(1973)花粉分析.古今書院,p.82-110.

中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として.第四紀研究,13,p.187-193.

中村純(1977)稲作とイネ花粉.考古学と自然科学,第10号,p.21-30.

中村純(1980)日本産花粉の標徴.大阪自然史博物館収蔵目録第13集,91p.

.まとめ

中世後期(15世紀頃)の水田跡や畠跡における栽培植物の推定を主目的として、植物珪酸体分析および花粉分析を行った。その結果、田1、田2および畠2、畠3の各遺構では、おもに稲作が行われていたと考えられ、ムギ類、ソバ、アブラナ科などが栽培されていた可能性も認められた。

畠3上面の炭層では、イネやススキ属が多量に検出されることから、これらの植物(稲藁やカヤ)が何らかの形で焼かれていた可能性が考えられる。

第3節 門前上屋敷遺跡出土ガラス玉成分分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

門前上屋敷遺跡より出土したガラス玉について、蛍光 X 線分析による元素分析を行い、材質の検討を行った。

表39 分析対象遺物一覧

資料	遺物	調査区	遺構名	器種	色調
1	J2	12	竪穴住居 5	小玉	スカイブルー
2	J3	12	竪穴住居 5	小玉	スカイブルー

2. 遺物と分析方法

分析対象遺物は、門前上屋敷遺跡より出土したガラス玉 2 点である（表 39、図版 82）。時期は弥生時代中期後半頃と考えられている。

分析装置は(株)堀場製作所製 XGT-5000Type を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV・1mA の Rh ターゲット、X 線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器 (Xerophy) で、試料室の大きさは 350 × 400 × 40mm である。検出可能元素は Na ~ U であるが、Na、Mg といった軽元素は蛍光 X 線分析装置の性質上検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。本分析での測定条件は、50kV、0.34 ~ 0.36mA、ビーム径 100 μ m、測定時間 1500s、パルス処理時間 P4 に設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメーター法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値は誤差を大きめに見積もっておく必要がある。

分析は、予め遺物をエタノールで軽く超音波洗浄をした後、非破壊で行った。なお、ガラス製品の材質分析においては、人為的に露出させた完全な新鮮面で無い限り、一見透明で風化がないように見える箇所でも、実際分析してみると風化は進んでおり、化学組成には変化があるため（肥塚 1997）解釈に注意しなければならない。

3. 分析結果

各遺物の検出元素と半定量分析結果一覧を表 2 に、スペクトル図を図版に示す。2 点ともアルカリ珪酸塩ガラスに分類することができる。検出できた元素は Al O、SiO、K O、CaO、TiO、MnO、Fe O、CuO、Rb O、SrO、ZrO、SnO、Sb O、PbO の 14 元素であった。

表40 定量結果一覧

資料	Na O	MgO	Al O	SiO	P O	K O	CaO	TiO	MnO	Fe O	CuO	Rb O	SrO	ZrO	SnO	Sb O	PbO
1			4.3	86.3	*	6.0	0.4	0.2	*	0.5	1.7	0.05	*	0.02	0.06	*	0.51
2			4.1	81.3		11.2	0.3	0.2	*	0.6	1.7	0.05	*	0.02	0.07	*	0.49

: 検出できず * : 検出したが定量できず 数字は重量%

4. 考察

2 点とも、PbO が少量であることから、鉛珪酸塩ガラスの類ではなく、アルカリ珪酸塩ガラスに分類される。また、Na O、MgO は検出できなかったため含有量が不明であるものの、K O がそれぞれ 6.0%、11.2%とやや多めに検出され、CaO や Al O が少量であったことから、SiO と K O を主成

分とするカリガラス (K O-SiO 系) であることがわかる。なお 6.0%、11.2% という量は、カリガラスに一般的に含まれる K O の量としてはやや少ないが、これは本分析が非破壊で行われているためである。カリガラスの風化面 (出土後、自然に割れてしまったような破断面も含む) を測定すると、新鮮面より K O が減少する傾向にあることが指摘されている (肥塚 1997)。

両者とも CuO が 1.5% 以上、Fe O が 0.5% 程度検出されている。ガラスの着色原因の一種に遷移金属イオンの影響による着色があり、今回も銅イオンや鉄イオンの影響による着色と考えられる。また、今回 CuO と共に SnO、PbO が検出されたが、一般に淡青色系のカリガラスには CuO に伴うようにして SnO、PbO が検出されることから、着色原料として、銅鉱石ではなく銅合金を使用している可能性が指摘されている (肥塚 1997)。

日本古代ガラスの材質及びその歴史的変遷については、山崎一雄 (例えば 1987 等) や肥塚隆保 (例えば 1997 等) らが精力的に研究を行っている。今回の分析結果を見ると、上述のような特徴の他にも、微量元素の Rb O を数 100ppm (100ppm=0.01%) 含み、SrO が極微量であるなど、肥塚 (1997) が述べている、弥生時代に中心的に分布するカリガラスの典型的特徴を有しているといえよう。

5. 終わりに

門前上屋敷遺跡より出土したガラス玉 2 点について、蛍光 X 線分析による元素分析を行った結果、2 点とも、弥生時代に見られる典型的な K O-SiO 系のカリガラスであった。

引用・参考文献

肥塚隆保 (1997) 日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究。東京藝術大学博士学位論文。

肥塚隆保 (2003) 日本出土ガラスから探る古代の交易 古代ガラス材質の歴史的変遷。遺物の保存と調査, 145-158, クバプロ

山崎一雄 (1987) 古文化財の科学。244-300, 思文閣出版。

第4節 門前上屋敷遺跡出土須恵器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白石 純

1. 分析目的

門前上屋敷遺跡の調査では、外面に格子タタキおよびハケ目調整が施されている中世須恵器甕が出土している。また、現在までに知られている中国地方で外面に格子タタキを有する生産地窯跡試料としては、岡山県の勝間田焼、亀山焼と島根県別所遺跡の各生産地である。この胎土分析ではこれらの生産地試料と比較し、どの産地から供給されたか検討した。なお胎土分析は、理化学的（蛍光X線分析法）な手法で分析を行った。

2. 分析試料

分析に供した試料は、表41に示した門前上屋敷遺跡出土中世須恵器の甕5点である。なお、これら須恵器の調整技法は試料番号1、2、3が外面を格子タタキ、内面はハケ目かナデである。また、4と5は外面がハケ目で、内面がハケ目のあとナデが施されている。

3. 分析結果

理化学的な分析方法は、蛍光X線分析法で実施した。この方法は、試料に含まれる成分（元素）量を測定するもので、その成分量の違いから胎土の類似差を推定する方法である。また、分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単で、測定も短時間のため、多量に試料を分析するのに有効である。しかし、測定試料は均質性が求められることから、分析試料を2gほど粉末にする必要があり、一部破壊分析である。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、Si・Ti・Al・Fe・Mn・Mg・Ca・Na・K・P・Rb・Sr・Zrの13元素を測定した。表41の出土試料分析値一覧表からTi（チタン）、Ca（カルシウム）、K（カリウム）の各元素に顕著な違いがみられる。そこで、これらの元素のXY散布図を作成し、胎土の比較を行った。

第286図K-Ca散布図では、生産地遺跡である勝間田焼、亀山焼、別所遺跡の各分布範囲がそれぞれ重なり各生産地とも判別できない。また、門前上屋敷遺跡出土の須恵器5点は勝間田と亀山の分布域に分布している。

表41 分析試料の胎土分析結果一覧表

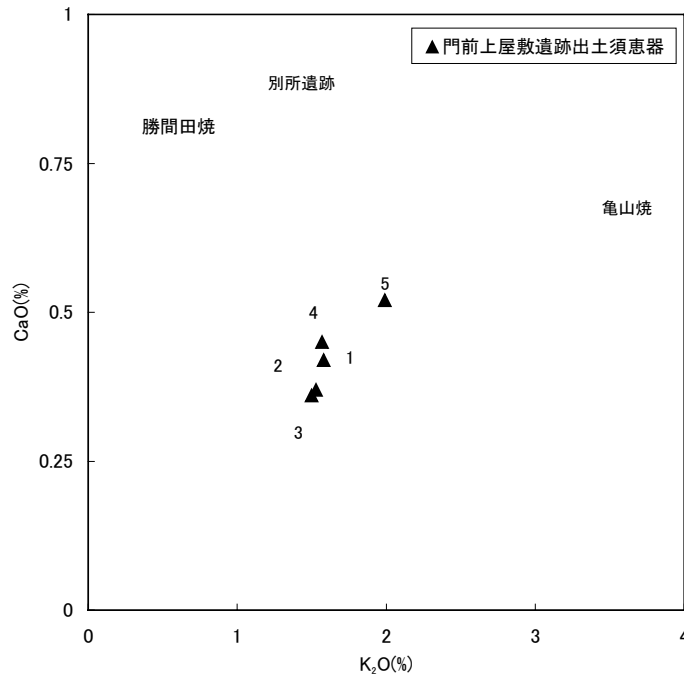
単位：Si～P（%）、Rb～Zr（ppm）

試料番号	遺跡名	遺構名	器種・調整	SiO	TiO	AlO	FeO	MnO	MgO	CaO	NaO	KO	PO	Rb	Sr	Zr	備考
1	門前上屋敷遺跡	11区	甕・外面格子叩き、内面ハケメ	66.46	1.17	21.04	3.75	0.05	2.19	0.42	3.11	1.58	0.02	213	161	418	遺物番号169
2	門前上屋敷遺跡	15区	甕・外面格子叩き、内面ナデ	69.39	0.96	18.06	5.03	0.09	1.97	0.37	2.36	1.53	0.02	257	134	438	遺物番号458
3	門前上屋敷遺跡	15区	甕・外面格子叩き、内面工具によるナデ	63.83	1.12	19.47	3.53	0.04	3.05	0.36	6.87	1.50	0.06	190	157	356	遺物番号440
4	門前上屋敷遺跡	15区	甕・外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	70.04	0.94	17.25	4.62	0.06	1.99	0.45	2.80	1.57	0.09	210	130	400	遺物番号439
5	門前上屋敷遺跡	17区	甕・外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	69.25	0.93	19.47	3.90	0.05	1.91	0.52	1.78	1.99	0.00	303	132	461	遺物番号776

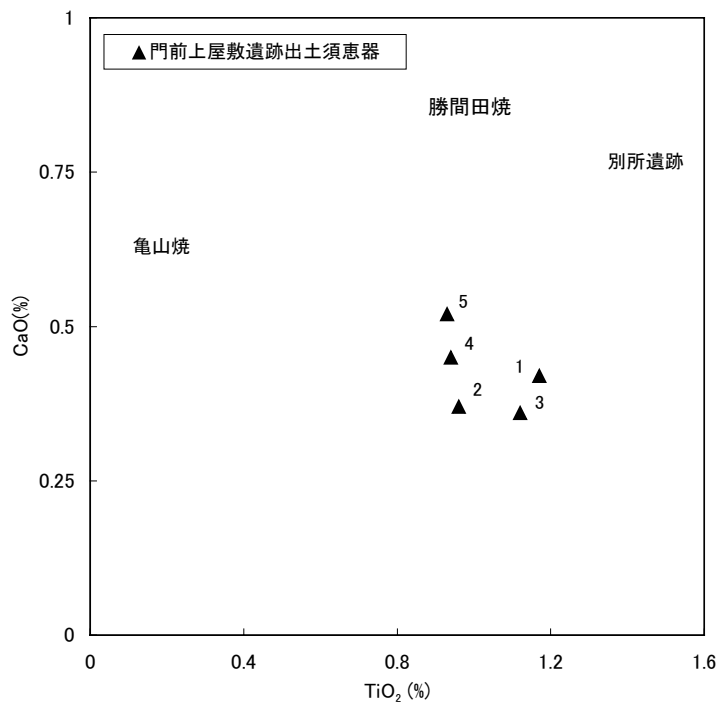
第287図 Ti-Ca 散布図では、Ti量の違いで勝間田、亀山、別所がそれぞれ分類できる。この生産地分布図に門前上屋敷出土須恵器をプロットすると、すべて勝間田の分布域に入った。

以上のように今回分析した門前上屋敷遺跡出土の須恵器5点は、すべて勝間田で生産されていると推定された。

この分析の機会を与您いただいた玉木秀幸氏、鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々にはいろいろご教示いただいた。末筆ではありますが、記して感謝いたします。



第286図 門前上屋敷遺跡出土須恵器の産地推定 (K O - CaO 散布図)



第287図 門前上屋敷遺跡出土試料の産地推定 (TiO - CaO 散布図)

第5節 門前鎮守山城跡・門前上屋敷遺跡 14C年代測定業務

パリノ・サーヴェイ株式会社

・門前鎮守山城跡の14C年代測定

はじめに

鳥取県西伯郡大山町門前字鎮守山に所在する門前鎮守山城跡の発掘調査では、13世紀頃の盛土遺構1の下位層準で検出された段状遺構6(SS6)埋土下部から、鉄滓やフイゴ羽口等の鍛冶関連遺物が多数出土している。これらの鍛冶関連遺物の年代は、随伴する遺物に時期を特定できる良好なものが確認されていないため不明である。そこで、今回の分析調査では鍛冶関連遺物に付着する炭化物について、AMS法による放射性炭素年代測定を実施し、遺物の年代に関する情報を得る。

1. 資料

年代測定資料は、段状遺構6(SS6)埋土下部から出土した鉄滓 No.259 と鉄滓 No.289 に付着した炭化物2点である。炭化物の採取は発掘調査担当者により行われ、その資料について年代測定を実施する。

2. 方法

年代測定は、資料にHClを加え炭酸塩等酸可溶成分を除去、次にNaOHを加え腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、再度HClを加えアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去をそれぞれ行う(酸・アルカリ・酸処理)。その後、試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅()と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500 (30分)850 (2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCOを精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCOと鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて¹³Cを算出する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。

暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730 ± 40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。いずれも北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を

用いる。

暦年較正は、測定誤差、2 双方の値を計算する。は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2 は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、2 の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果

放射性炭素年代測定結果および同位体効果による補正年代、暦年較正結果を表1に示す。補正年代値は、鉄滓 No.259 付着炭化物が $950 \pm 40\text{BP}$ 、鉄滓 No.289 付着炭化物が $1100 \pm 40\text{BP}$ を示す。暦年較正の結果は、測定誤差を として計算させた結果、鉄滓 No.259 付着炭化物は calAD1028-1162、鉄滓 No.289 付着炭化物は calAD896-1020 である。

表42 門前鎮守山城跡の放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果

試料名	試料の状態	測定年代 (BP)	¹³ C (‰)	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.	
					cal AD	cal BP	cal AD	cal BP			
鉄滓 No.259	炭化材	920 ± 30	-23.21 ± 0.93	950 ± 40 (950 ± 35)	1	cal AD	1028-1051	cal BP	899-922	0.275	IAAA-60551
						cal AD	1081-1127	cal BP	823-869	0.524	
					2	cal AD	1135-1152	cal BP	798-815	0.202	
						cal AD	1020-1162	cal BP	788-930	1.000	
鉄滓 No.289	炭化材	1090 ± 30	-24.45 ± 1.01	1100 ± 40 (1099 ± 37)	1	cal AD	896-924	cal BP	1026-1054	0.380	IAAA-60552
						cal AD	938-987	cal BP	963-1012	0.620	
					2	cal AD	876-1020	cal BP	930-1074	1.000	

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) 暦年較正計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 5) 暦年較正計算には表に示した丸める前の値 (括弧内の数字) を使用している。
- 6) 暦年較正 1 桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線やプログラムが改定された場合の再検討がしやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 7) 統計的に真の値が入る確率は 1 は68%、2 は95%である
- 8) 相対比は、1、2 のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

4. 考察

段状遺構6 (SS6) 埋土下部から出土した鍛冶関連遺物のうち、鉄滓 No.259 と鉄滓 No.289 に付着した炭化物の年代値は、上記したように補正年代値で鉄滓 No.259 付着炭化物が $950 \pm 40\text{BP}$ 、鉄滓 No.289 付着炭化物が $1100 \pm 40\text{BP}$ を示した。鉄滓が出土した段状遺構6 (SS6) 埋土は、13世紀頃の盛土遺構1の下位層準より検出されていることから、今回の年代測定結果は、層位的に矛盾しない結果といえる。

暦年較正結果をみると、鉄滓の年代として、鉄滓 No.259 が11～12世紀、鉄滓 No.289 が9～11世紀の年代が推定される。ただし、鉄滓 No.259 と鉄滓 No.289 とでは補正年代値や暦年較正值において約150年ほどの年代差が生じている。この年代差が遺物の時期差を反映している可能性もあるが、遺物の出土状況 (埋土の形成過程など) や炭化物の付着状況等を含めて慎重に評価する必要があると考える。

・門前上屋敷遺跡の14C年代測定

はじめに

鳥取県西伯郡大山町門前字若宮に所在する門前上屋敷遺跡の発掘調査では、遺跡東側の河岸段丘上に東側に向かって急激に下がっていく、幅2mの溝が検出されている。この溝8の埋土下部からは多量の人頭大の石とともに木製品、木の枝、種実、土器などが出土しており、木材の一部には燃料材として利用された可能性がある部分的に炭化したものが確認されている。今回の分析調査では、溝8埋土下層の形成時期に関する情報を得ることを目的として、下層出土の自然木について、線計数法（液体シンチレーション）による年代測定を実施する。なお、年代測定資料である自然木については樹種同定も合わせて実施する。

1. 資料

資料は、溝8埋土下層から出土した自然木2点であり、棒状と材片の資料名が付されている。これら2点の木材について液体シンチレーションによる線計数法の年代測定を実施する。

2. 方法

木材資料について、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）およびWheeler 他（1998）を参考にする。また、木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

年代測定は、資料である材を乾燥、粉碎したものを水に入れて、浮上してきたものを除去する。水酸化ナトリウム溶液で煮沸し、室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去する。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返す。濃硝酸を加えて煮沸し、室温まで冷却した後、傾斜法により除去する。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にする。蒸し焼きにした資料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素を捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。

炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成し、最終的に得られた合成ベンゼン3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとする）にシンチレーターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定資料とする。

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰返し、計1,000分間行う。未知資料の他に、値が知られているスタンダード資料と自然計数を測定するブランク資料と一緒に測定する。測定後、同じ資料を $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器を用いて ^{13}C を測定する。測定結果から年代値を算出する。なお、この際に、放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5568年を使用する。

測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma ; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用いる。なお、暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することである。

暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。いずれも北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差、2 双方の値を計算する。は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2 は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、2 の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果

放射性炭素年代測定結果および同位体効果による補正年代、暦年較正結果を表43に示す。年代測定を実施した木材は、棒状資料がヒサカキ、材片資料がサカキに同定された。年代測定結果は、補正年代値で棒状資料が1100 ± 60BP、材片資料が1030 ± 80BPを示す。暦年較正結果は、測定誤差をとして計算させた結果、棒状資料がcalAD897-1149、材片資料がcalAD784-1206を示す。

表43 門前上屋敷遺跡の放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果

層位・試料名	試料の状態	測定年代 (BP)	¹³ C (‰)	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.	
					cal AD		cal BP				
溝8下層 棒状資料	材 ヒサカキ	1140 ± 60	-31.52 ± 0.007	1100 ± 60 (1096 ± 62)	2	cal AD	890-999	cal BP	1060-951	0.921	PLN-932003
						cal AD	1002-1013	cal BP	948-937	0.079	
						cal AD	776-1034	cal BP	1174-916	1.000	
溝8下層 材片資料	材 サカキ	1060 ± 80	-28.92 ± 0.012	1030 ± 80 (1028 ± 76)	2	cal AD	897-922	cal BP	1053-1028	0.127	PLN-932004
						cal AD	942-1047	cal BP	1008-903	0.674	
						cal AD	1088-1122	cal BP	862-828	0.151	
						cal AD	1139-1149	cal BP	811-801	0.048	
						cal AD	784-787	cal BP	1166-1163	0.002	
						cal AD	821-842	cal BP	1129-1108	0.013	
						cal AD	861-1188	cal BP	1089-762	0.981	
cal AD	1199-1206	cal BP	751-744	0.005							

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
- 4) 暦年較正計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用
- 5) 暦年較正計算には表に示した丸める前の値（括弧内の数字）を使用している。
- 6) 暦年較正1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線やプログラムが改定された場合の再検討がしやすいように、1桁目を丸めていない。
- 7) 統計的に真の値が入る確率は、は68%、2 は95%である
- 8) 相対比は、2 のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

4. 考察

今回年代測定を行った溝8埋土下部から出土した棒状資料と材片資料は、ヒサカキとサカキであった。いずれも暖温帯に分布の中心がある二次林から極相林まで広く生育している低木から亜高木となる常緑樹である。現在の本地域の植生を考慮すると、当時も周辺に分布していたことが充分予測される。この棒状資料・材片資料の年代測定結果は、誤差範囲内で一致する、近似する値を示した。ほぼ同時期に生育していた木材であることが推定される。暦年較正結果では11世紀前後の年代を示しており、溝8埋土下層の形成時期は、この年代値以降であることが推定される。この年代値については、溝8の埋積状況や出土する遺物の時代と合わせた評価が今後必要である。

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 . 木材研究・資料 31, 京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載 . 木材研究・資料 32, 京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載 . 木材研究・資料 33, 京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載 . 木材研究・資料 34, 京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 . 木材研究・資料 35, 京都大学木質科学研究所,47-216.

島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第6節 門前鎮守山城跡堀切出土炭化物の年代測定結果報告書

IAA：加速器分析研究所

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568 年を使用しています。
- 2) BP 年代値は、1950 年からさかのぼること何年前かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出しています。
複数回（通常は4回）の測定値について ²検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。
- 4) ¹³C の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS 測定の場合に同時に測定される ¹³C の値を用いることもあります。
¹³C 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$$^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_S - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_S - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、¹⁴A_S：試料炭素の ¹⁴C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_S$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_S$

¹⁴A_R：標準現代炭素の ¹⁴C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_R$

¹³C は、質量分析計を用いて試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³A_S = ¹³C/¹²C) を測定し、PDB（白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、IAA では加速器により測定中に同時に ¹³C/¹²C も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した ¹³C を用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、¹⁴C は、試料炭素が ¹³C = - 25.0 (‰) であるとしたときの ¹⁴C 濃度 (¹⁴A_N) に換算した上で計算した値です。(1) 式の ¹⁴C 濃度を、¹³C の測定値をもとに次式のように換算します。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_S \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_S \text{として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_N - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。

多くの場合、同位体補正をしない ¹⁴C に相当する BP 年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

¹⁴C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、¹⁴C との関係は次のようになります。

$$^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 (\%)$$

$$\text{pMC} = ^{14}\text{C} / 10 + 100 (\%)$$

国際的な取り決めにより、この ¹⁴CあるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算されます。

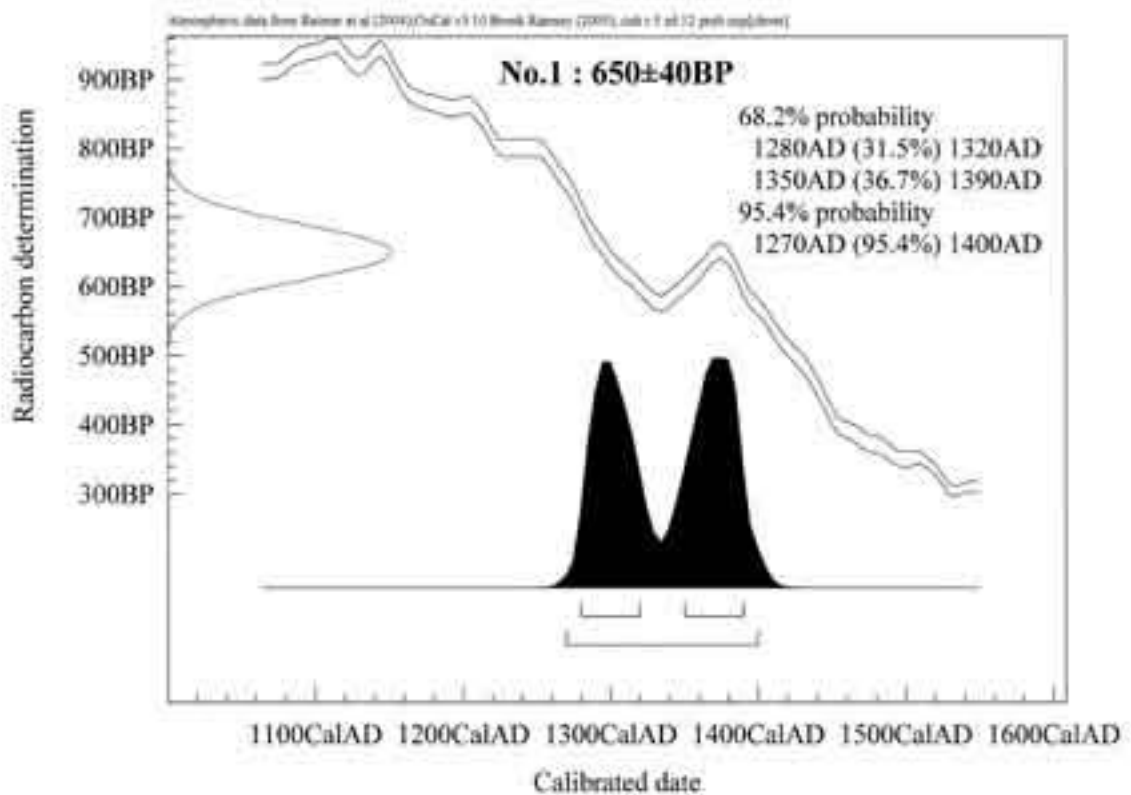
$$T = - 8033 \times \ln [(^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= - 8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

IAA

<i>IAA</i> Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-51657	試料採取場所 : 門前鎮守山城跡	Libby Age (yrBP) : 650 ± 40 ¹³ C (‰)(加速器) = -26.58 ± 0.83 ¹⁴ C (‰) = -77.3 ± 4.0 pMC (%) = 92.27 ± 0.40
	試料形態 : 木炭 試料名(番号) : No. 1	¹⁴ C (‰) = -80.3 ± 3.6 pMC (%) = 91.97 ± 0.36
#1090	(参考) ¹³ C の補正無し	Age(yrBP) : 670 ± 30

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム: OxCal v3.10

第6章 まとめ

第1節 古墳時代以前の門前上屋敷遺跡周辺の集落形態

1 縄文時代の落とし穴群

門前上屋敷遺跡では、これまでの調査で計11基の落とし穴が検出されている。配列状況が明確なものは、土坑49・50が約5m、土坑56・57が約5m、土坑58・59が約8mの間隔で土坑51・55へ連続すると考えられ、さらに、間を置き約5mの間隔をもつ土坑4・5に蛇行しながら繋がりおよそ南北方向へ延び、2基1対の列状配列になると考えられる。対の間隔は、15～35m程度と推定される。土坑3は列からは離れており、単独で存在する。これらの時期は、土坑3から縄文時代前期末（大歳山式）の遺物が出土している他、晩期の遺物が3・15区で出土しており、列状配列になるものは晩期ごろの可能性もある。県内において、落とし穴2基1対の列状配列は笠見第3遺跡、化粧川遺跡などでも確認されている（前島2004、小谷2005）。門前第2遺跡のように、部分的に対となるが単独のものが3～15m間隔で列状に配列されているものもあり、門前地区周辺の調査は、丘陵から段丘上の狩猟形態を探るうえで重要な調査例である。

2 弥生時代中期から古墳時代の集落形態

名和川の形成する河岸段丘上にある門前上屋敷遺跡では、弥生時代中期（Ⅱ-3様式期）に、計5基の竪穴住居跡、3基の貯蔵穴が検出されている。竪穴住居2には外周溝が約2m離れて巡り、多角形住居で他に比べて規模的にも大きく、有力層の住居の可能性もある。これら住居の配列を見ると、広場の周囲に竪穴住居1・6・5・4が半環状に配列され、居住域から離れて貯蔵穴と考えられる土坑9～11が集中している構造となる。また、この時期の集落は焼失しているものがあり、住居1・貯蔵穴群で炭化物が検出され、居住域の一角（北西側）が類焼している可能性がある。名和川を挟んで隣接する名和飛田遺跡では、若干早く小規模な集落が形成され（Ⅱ-2様式期）、上屋敷と同時期では小集落が造営されている。

後期前葉（Ⅱ-1様式期）になると小型の竪穴住居7・8が営まれている。調査した範囲では、中期後葉集落と後期前葉集落は居住域を異にし、集落規模も住居規模も縮小傾向にある。この傾向は、名和飛田遺跡でも確認できる。

後期後葉（Ⅱ-3様式期）になると、周辺では丘陵上の門前第2遺跡で集落が営まれるようになり、段丘上での集落はほとんど認められなくなる。

古墳時代前期前葉（天神川期）になると、段丘上に再び門前上屋敷遺跡で小集落が現れ、古墳時代後期になると名和飛田遺跡で、4基の竪穴住居と外周柱穴列を持つ大型掘立柱建物が見られる。

3 集落移動の要因

このように、門前地区周辺では弥生時代中期から古墳時代後期にかけて断続的に集落が造営され、弥生中期までは低地にあったものが弥生後期になると丘陵上へ移り、その後再び低地へ戻る。似たような現象は、鳥取県内においても東郷池周辺域、加勢蛇川周辺域、淀江平野周辺域でも見られる現象である。門前地区の集落遺跡の出土遺物には、武器類等はほとんど認められず、瀬戸内・近畿地方で見られるような争乱状態を示すものではないといえよう。濱田によると山陰地方においては弥生時代中期から後期にかけての集落立地と動態については、遺跡数の増加と相関して丘陵上に集落が営まれ

るようになると考察し（瀨田 2006）社会的緊張関係による集団の移動等は認められないとしており、今後更に検討を要する問題であろう。（牧本）

【参考文献】

- 前島ちか 2004 「笠見第3遺跡の落とし穴について」『笠見第3遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 86
小谷郁夫 2005 「化粧川遺跡の落とし穴配列について」『化粧川遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 98
瀨田竜彦 2006 「山陰地方における弥生時代集落の立地と動態 大山山麓・中海南東岸地域を中心に」『古代文化』第58巻第 号

第2節 古代末から中世前期の門前上屋敷遺跡の集落形態

1 古代末

門前上屋敷遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての遺物が比較的まとまって出土している。出土する範囲は、15区西側の丘陵斜面側に集中している。9～10世紀ごろと考えられる段状遺構1・2と、それに伴う掘立柱建物5・6が存在することから、丘陵斜面部をテラス状に加工した段に建物が伴う集落が作られていたと考えられる。

11～12世紀代には、段丘上で1次調査で検出されていた溝8がある。東側に傾斜しており排水を主とした大規模な溝である。当初は、この溝も屋敷地を区画するものと考えられていたが、今回の調査で時期的に遡ることが判明し、時期・性格を考え直す結果とはなったが、否定はできない。また、門前鎮守山城跡で小鍛冶関連施設である段状遺構6がみられるとともに、遺跡内では輸入陶磁も出土しており、有力層を含む居住域と工業生産域（小鍛冶）を併せ持つ集落の存在が窺われる。

2 中世前期

12～14世紀になると、本格的に段丘上に遺構が現れる。溝9は、浅い箱堀状のもので外側に土塁状のものが築かれていた可能性があることが判明した。溝8の機能停止後に新たに掘られたものである。溝9に直交する大規模な柵列や溝3の存在から、東西約30m、南北約40mの屋敷地を区画したものと考えられる。明瞭な方形区画ではないが、小都分類によればa1類の屋敷に相当するものと考えられる（小都 2004）。この区画に確実に伴う建物は検出されていないが、区画外には掘立柱建物4、やや離れて頻繁に建て替えが行なわれている掘立柱建物7～11、門前鎮守山城跡石組井戸・石敷き遺構などが伴うものと考えられる。

同時期には、
・ 層からの出土遺物の中には輸入陶磁器がまとまって出土しており、有力者層の存在を窺うことができる。

屋敷地は、15世紀代には耕作域に変化しており、有力者層は解体したか近辺の別の場所に移動しているものと考えられる。また、包含層中では大量の椀形鍛冶滓、鉄器（鍛造品・鋳造品）が含まれており、ごく近辺に鍛冶関連の施設の存在が推察される。

門前上屋敷遺跡は、当該期においては大規模な屋敷地の存在、まとまった輸入陶磁器の出土など、集落内に有力者層の存在が窺われ、前時期同様集落内に工業生産域（鍛冶関連施設）をもつ集落像を描くことができよう。ただし、鉄滓の出土量は前時期に比べて圧倒的に多く、生産規模はかなり向上していたものと推定される。（牧本）

【参考文献】

- 小都 隆 2004 「中世城館跡の型式分類」『考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）』

第3節 門前上屋敷遺跡からみた中世田畠の様相

1 田畠の特徴

門前上屋敷遺跡では、古代から中世前期にかけて集落が営まれた後造成が行われる間、およそ15世紀代に田畠が良好な状態で検出されている。

県内では、中世の耕作跡は長瀬高浜遺跡・畑ヶ田遺跡・上伊勢第1遺跡・錦町第1遺跡・茶畑六反田遺跡等で畠跡が検出されている。水田は、畑ヶ田遺跡で可能性はあるものの確実な水田跡の検出は初例である。

検出された2面の水田は、緩やかな斜面部を段状に掘削して作られており、約70cmの高低差がある。いずれも一辺約10m程度の方形の小区画に復元でき、周囲に畦その外に溝が切られている。耕作面はほぼ水平になっている。畠は、遺存状態のよい畠2が新しく、畝間のみ検出された畠3は時期的に遡り、休耕していた可能性がある。また、大畦畔1を境に、畠1・2と畠3の畝方向が異なることから、栽培作物又は耕作者の違いがあったものと考えられる。

これらは同時存在していたのではなく、長瀬高浜遺跡でも確認されているが、遺存状態の悪い畠の存在から耕作、休耕を繰り返していたものと考えられる。

2 立地的特徴

門前上屋敷の田畠は河岸段丘上で検出されたものである。これまで検出されている遺跡は、低地部にあり飛砂によってパックされた状態で検出されているものと丘陵上で耕作痕として認識されたものである。門前上屋敷遺跡の場合は、造成行為によってパックされたため通常検出できない畝まで遺存した特異な例である。当遺跡では、段丘上でも4・11・16・17区でも耕作痕が検出されているが、段丘平坦面上の9区以下では水田遺構は検出されていないため、水田の立地は比較的標高が高い斜面部に限られていた可能性があり、平坦部は集落とそれに近接して畠が営まれていたものと考えられる。

3 牛の使用

水田1の南西側畦に偶蹄目の足跡が検出されている。直径が約13cm前後であり大きさからすると牛の可能性が高い。県内では、長瀬高浜遺跡の13～15世紀代の畠跡や後背湿地上、錦町第1遺跡で確認されている。長瀬高浜遺跡では、休耕地において放牧されていた可能性が指摘されている。当時としては、労働力としての牛馬の使用はかなり普及していたものと考えられる。

4 栽培作物の復元

水田2・畠3で土壌分析を行った結果、いずれからもイネのプラント・オパールが高率で検出され、畠においてもイネが栽培された可能性が指摘された。しかし、施肥等で稲藁が使用された可能性もあり、ただちに畠での稲作は肯定し難いものがある。形態的に異なる耕作地は、基本的に栽培作物の違いによる現象であり、門前上屋敷遺跡のように同時並存する場合はおのずと作物によって耕作地が使い分けられたと考えてよいであろう。当該遺跡の畠地での稲作は否定的であり、ソバ花粉、ムギのプラント・オパールが検出されていることから、これらの栽培が行われていた可能性が高いと思われる。時期的には遡るが12世紀代と考えられる溝8内においても、炭化したコメ、アズキ、ムギなどの種実が出土しており、中世の農業の様子を復元できる資料として重要である。(牧本)

第4節 15・16世紀の門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡

1 大規模造成

この時期には、門前上屋敷遺跡では大規模（高さ1.6m以上、面積757.7㎡以上）な、宅地に伴う造成が行われている。造成法面には、粗雑ではあるが地山自然礫を用いて石垣状の施設を設けている。残念ながら、造成上面は近世以降の削平が及び、主要な建物は検出できなかった。

しかしながら、柵又は塀を伴う重複する掘立柱建物が検出されていることから、この造成上には更に多くの建物が存在していたことは確かである。その性格として考えられる手がかりとしては、門前鎮守山城跡で検出された土坑15からまとめて出土した墨書土器がある。この墨書土器は、中森分類坏B類に当るもので、15世紀ごろのものと考えられる。坏側面又は底面に一文字ずつ墨書されており、「普」3点、「率？」1点、「土」1点、「祖」1点、「佛」1点、文字不明6点である。これらは、一文字のみで意味を持つものではなく、組み合わせで経典などの何らかの一文を示す可能性がある。可能性としては、「普天率土、佛祖普・・・」などの文章が考えられよう。また、墨書土器は土坑15以外からも出土しており、造成石垣遺構上で廃棄された状況で検出された「普庵」、造成土中で検出された「智光」と書かれた土師器坏がある。いずれも15世紀代と考えられ、僧侶又は建物を連想させるものであることから、15世紀代の造成に伴う建物等は、寺院に関連する可能性が高いと思われる。さらに、造成土上面及び周辺では、輸入陶磁器がまとめて検出されており、所有者層の地位の高さを窺うことができよう。

造成の前面の段丘上平坦面には、掘立柱建物1・2・16～18などの建物があり、集落を形成していたものと考えられる。

2 土塁・堀切の存在

門前上屋敷遺跡の後背部丘陵上には、堀切・土塁をもつ門前鎮守山城跡がある。この遺跡は、15世紀代に機能した可能性がある。土塁・堀切以外に防御施設は認められず、出土遺物もほとんどないことから、小都分類による砦（類Bb2）に相当する。しかし、立地的・規模的には防御施設として考えるのは困難であり、結界としての意味合いのほうが強いと考えるのが妥当であろう。

また、丘陵斜面部には14～16世紀ごろに段状遺構が作られており、明確な性格は不明な点が多いが、防御施設の前身あるいは土塁・堀切に伴う付属施設である可能性は残ろう。おそらくは、門前上屋敷に作られた寺院及び集落に関係する、一時的な避難場所としての性格が考えられる。

3 社会背景からみた遺跡の性格

この時期の社会背景として、室町時代後期は西伯耆でも尼子氏、山名氏等の戦国大名による争乱期に当り、各集落の背後の丘陵を利用して、このような一時退避的な施設が作られていた可能性がある。今後、資料の増加を待って集落ごとの防御施設の様相を明らかにする必要がある。また、門前集落の名称として、寺院の存在が地名として残っていた可能性があったが、今回の発掘調査によってこのことが裏付けられるものといえる。（牧本）

註・参考文献

- (1) 鳥取県立博物館石田敏紀氏の御教示による。
 (2) 小都 隆 2004「中世城館跡の型式分類」『考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）』



第288図 15・16世紀の門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡遺構配置図

第5節 鉄関連遺物からみた古代末から中世前期世紀の門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡

(1) 門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡の鉄関連遺物

門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡では、比較的まとまった状態で鉄関連遺物が出土している。

門前鎮守山城跡では、放射性炭素年代測定で11～12世紀代と推定された丘陵斜面部にある段状遺構6で、椀形鍛冶滓、粒状滓、鍛造薄片、鞆羽口、金床石片等が出土しており、小鍛冶が行われていた可能性が高いことが判明した。この遺構を掘削する段状遺構5からも、段状遺構6からの転落遺物と考えられる椀形鍛冶滓、小型鉄鎚が出土している。また土坑10からは完形の鑄鉄製鍋が出土している。この土坑は出土土器から八峠編年中世 期、13～14世紀と考えられる。

門前上屋敷遺跡からは15区中世遺物包含層中で大量の鉄関連遺物が出土している他平成16年度調査区においても鉄滓等が出土している。包含層出土のため確実な時期は求められないが、13～15世紀のものであり、鉄滓形状の特徴からも中世的と指摘されている。当遺跡では、小鍛冶段階で生成された椀形鍛冶滓等の出土もさることながら、鍛造品の種類・量が多く、遺跡近辺でかなりの規模で鉄器が生産されたものと考えられる。

時期的には門前鎮守山城跡段状遺構6のものが古く、同時期では段丘上の門前上屋敷遺跡で大規模な区画溝に仕切られた屋敷跡及び付属する掘立柱建物群が作られている。鍛冶遺構は、集落域からやや離れた位置に作られていることになる。

また、13～14世紀には門前上屋敷遺跡のごく近辺には、この時期の鍛冶関連施設が、丘陵裾部付近に存在している可能性が高く、鉄器生産を行えるだけの経済基盤を持った集落の存在が窺える。

門前鎮守山城跡土坑10から出土した鑄鉄製鍋M3は、受口状口縁をもつもので五十川氏による鉄鍋A類に分類できる。本来底部に認められるべき湯口は確認できず、整形されている可能性がある。ほぼ同時期の門前上屋敷遺跡からも、鑄鉄製鉄鍋片が多数出土しており、この中には、土坑10出土と同様鉄鍋A類に分類できるものも見られ、鑄造品も相当数生産されていた可能性がある。

(2) 鳥取県内の中世鍛冶の様相

伯耆地方は、中世以降年貢鉄を貢納した荘園が文献で認められている地域で、鉄生産及び流通が盛んであったことが知られている。鳥取県内では、現在のところ製鉄関連の遺跡は調査されていないが、近年古墳時代から中世にかけての鍛冶関連遺構の調査例が増加しつつあり、中世段階では、確実な遺構を伴うものは円護寺坂ノ下遺跡、大河原遺跡と少ないが、南原千軒遺跡、霞牛ノ尾遺跡などで多量の鉄滓等が出土し、大規模な鍛冶関連遺跡として認識されている遺跡がある。

中世段階の門前上屋敷遺跡は、当時の鉄生産流通体制の下で獲得した素材を元に、集落内で鉄器を生産していたものと考えられる。当時においては、鉄器生産はどの集落も行えるものではないと考えられる。周辺は、同時期の名和氏関連の旧蹟が多く存在する場所でもあり、当遺跡が同氏と深い関係を持っていた可能性は否定できないであろう。(牧本・穴澤)

【註・参考文献】

- (1) 穴澤義功氏の御教示による。
- (2) 五十川伸也 1992「古代・中世の鑄鉄鑄物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集
- (3) 福田豊彦 1996「文献からみた鉄の生産と流通」『季刊考古学』第57号

8区 土坑29	鉄製品 (鍛造品)	8区 P 484	15区 V層	15区 柱穴・掘立柱建物	15区 土坑67	15区 畠3	15区 土坑61	15区 柵列6	15区 P 490
鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	羽口 (鍛冶)	鉄冶滓 (含鉄)	鉄製品 (鍛造品)	椀形鍛冶滓 (極小)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鍛冶滓
錆化(△)	錆化(△)	錆化(△)		錆化(△)	錆化(△)		錆化(△)	錆化(△)	
1	8	4	12	15	22	27	31	32	35
8区 掘立柱建物1	9区 掘立柱建物18	8区 V層	15区 遺構外	鉄製品 (鍛造品)	23	28			15区 掘立柱建物12
鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	流動滓 (含鉄)	錆化(△)	24				椀形鍛冶滓 (小)
錆化(△)	錆化(△)	錆化(△)	錆化(△)		鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)			
2	9	5	13	16	25	29			15区 柱穴56
8区 掘立柱建物2	12区 遺構外	6	15区 遺構外	17	鉄製品 (鍛造品)				椀形鍛冶滓 (極小)
鉄製品 (鍛造品)	青銅塊		鉄製品 (鍛造品)	18					
錆化(△)	L(●)		錆化(△)	19					
3	11	7	14	20					鉄製品 (鍛造品)
				21					錆化(△)
									34
分析									38

9、12、53、54、55、83、84、85、101はS=1/2。他はS=1/4

第289図 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物構成図

15区 掘立柱建物13		15区 掘立柱建物14		15区 段1・2		水田1・2、畠1～3		
梘形鍛冶滓 (極小)	39	鉄製品 (鍛造品)	44	梘形鍛冶滓 (極小)	47	鉄製品 有段鍋 (鍛造品) 口縁部破片	流動滓	73
	40	15区 P 487 梘形鍛冶滓 (極小)	44	15区 2層	梘形鍛冶滓 (中、含鉄)	錆化(△)	H(O)	74
鉄製品 (鍛造品)				梘形鍛冶滓 (中)	錆化(△)		鉄製品 (鑄造品)	
錆化(△)					48			
	41			鉄製品 (鍛造品)				
	42			錆化(△)	49			
	43				50			
					51			
					52			
					53			
					54			
					55			
					56			
					57			
					58			
					59			
					60			
					61			
					62			
					63			
					64			
					65			
					66			
					67			
					68			
					69			
					70			
					71			
					72			
					75			
					76			
					77			
					78			
					79			
					80			
					81			
					82			
					83			
					84			

第290図 門前上厠敷遺跡鉄関連遺物構成図

表44 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物観察表(1)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
1	M 3	第25図	鉄製品(鍛造品)釘	8	土坑 39	3.1	1.2	0.7	2.2	2	錆化()	酸化土砂に覆われた釘の体部から足部にかけての破片。横断面形は方形。頭部は欠落する。上面には横方向に木部の痕跡を残す。	
2	M 1	第18図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	8	掘立柱建物 1	4.2	1.7	1.3	13.4	2	錆化()	酸化土砂に覆われた棒状不明品。頭部は平頭で、横断面形は方形と推定される。足部先端はわずかに欠落か。	
3	M 2	第19図	鉄製品(鍛造品)薄板状不明品	8	掘立柱建物 2	2.7	3.0	0.3	8.3	3	錆化()	幅2.2cmほどの薄板状不明品。一見、鎌状ながら、背側と厚部の区別ができない。厚みは1.7mm前後で、ヘラ状の鉄製品となる可能性大。	
4	M 4	第31図	鉄製品(鍛造品)小釘	8	P 484	4.2	0.5	0.5	0.8	1	錆化()	不整形の頭部をもつ小釘。足部先端は角錐状に小さく絞られている。体部で二片に割れる。	
5	M 5	第32図	鉄製品(鍛造品)釘?	8	包含層(1層)	2.9	1.0	1.0	21.4	1	錆化()	酸化土砂に覆われた釘体部状の鉄製品破片。頭部と足部側を欠いている。横断面形は方形か。	
6	M 6	第32図	鉄製品(鍛造品)釘状不明品	8	包含層(1層)	2.5	1.0	0.7	1.4	2	錆化()	体部から頭部を欠く釘状不明品破片。両端部に小破面が露出し、断面形は丸棒状となる。径は上手側端部で3mm。	
7	M 7	第32図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	8	包含層(1層)	2.1	1.3	1.0	4.5	3	錆化()	厚い酸化土砂に覆われた棒状不明品破片。破面には径4mmほどの方形棒状の鉄製品の痕跡を残す。	
8	M 8	第32図	鉄製品(鍛造品)板状不明品	8	包含層(1層)	5.4	3.2	1.3	21.4	4	錆化()	表裏面が厚い酸化土砂に覆われた薄板状の不明品破片。厚みは1.5mmほどで、長軸方向にも短軸方向にも反り返っている。上面上手側は一段小高くなっており、口縁部は幅7mm、厚さは4mm前後。何らかの容器状の鉄製品の口縁部か。	
9	M 153	第208図	鉄製品(鍛造品)馬具	17	掘立柱建物 18	16.2	1.8	1.2	85.2	2	錆化()	馬具の轡から引手にかけての一括品。左右で別の部品となり現状は四つに分かれている。引手側は環状に巡らせた鉄部を鍛接し、となっているが磁着が強く、芯部は含鉄部を十字状に延ばしている。土坑出土品で、墓坑であった可能性も残る。	
11	M 11	第82図	青銅塊	12	遺構外	1.6	2.4	1.2	8.5	1	L()	各面に凹凸の残る青銅塊。上面の小さな凹凸は青銅製品本来の文様の可能性あり。下手側と左右が薄くなって延びており、容器状となる可能性あり。この場合には口唇部の上面に文様をもつ小型容器状となり、比較的高級品か。体部の厚みは3.5mmを測る。	
12	C 12	第147図	羽口(鍛冶)	15	包含層(1層)	8.3	7.2	1.0	133.0	2	なし	鍛冶羽口の先端部寄り破片。先端部外面は黒色ガラス質に溶化している。通風孔部の径は2cm強と比較的大ぶり。体部の最大厚みは2.5cm。胎土は粗粒やスサをわずかにまじえる粘土質。	
13	M 84	第149図	流動滓(含鉄)	15	遺構外	2.0	3.6	1.7	12.8	5	錆化()	扁平な流動滓の側部破片。左右の側部と上手側が破面となる。外周部は溶となっているが磁着が強く、芯部は含鉄部と推定される。緻密な滓質の中型から小型の椀形鍛冶滓、側部片の可能性もあり。	
14	M 83	第149図	鉄製品(鍛造品)刀子	15	遺構外	1.0	1.3	0.4	1.1	2	錆化()	表面に長軸方向の木質を残す刀子基部の小破片。刀子としての最大幅は8.5mmほど。木質は緻密。	
15	M 102	第164図	鍛冶滓(含鉄)	15	柱穴 55	1.7	2.5	1.1	6.4	3	錆化()	酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶滓。外見上は上面が扁平気味で、側部が丸みをもった形状を示す。下面の中央部は左右方向に突出する。	
16	M 91	第160図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	掘立柱建物 13	1.5	0.7	0.6	0.5	1	錆化()	芯部が中空となった棒状不明品。両端部が破面となる。横断面形は不明で鉄製品の径は2.5mm強と細い。	
17	M 98	第161図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	掘立柱建物 14	2.3	1.0	1.0	1.4	2	錆化()	両端部が破面となった棒状不明品破片。上手側には方形断面の破面が現れ、下手側には扁平な端部が露出する。上手側の径は約3mm。	
18	M 97	第161図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	掘立柱建物 14	2.6	0.6	0.7	0.8	1	錆化()	両端部が欠落した棒状不明品破片。芯部は小さな円形に抜けており、鉄製品自体の横断面形は円形か。外周部には皮膜状の酸化物が取り巻く。	
19	M 103	第164図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	柱穴 55	2.5	1.4	1.2	4.0	2	錆化()	勾玉状の外形をもつ。外周部に厚い酸化土砂の付着した棒状不明品。鉄製品自体の破面が全く確認されない。何らかの鉄製品の側部片か。	
20	M 100	第161図	鉄製品(鍛造品)刀子?	15	掘立柱建物 14	1.6	0.8	0.5	0.8	2	錆化()	両端が欠落した扁平な刀子状の鉄製品破片。厚みは2mm前後で、最大幅は8mm強。上手側には細かい鍛冶痕が走り、下手側の破面には背側と刃部倒らしき痕跡を残す。刃部は途中で欠落する。	
21	M 104	第164図	鉄製品(鍛造品)刀子	15	柱穴 55	2.2	0.8	0.3	3.0	2	錆化()	左右の端部が破面となった刀子の基部から刃部にかけての小破片。右端部は幅3mm強。左端部は扁平で幅9mmを測る。表面には瘤状の酸化土砂あり。	
22	M 111	第168図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	土坑 67	1.6	0.6	0.6	0.9	2	錆化()	方形断面をもつ棒状不明品破片。上手側の径は約4mmを測る。下手側の側部はやや狭まってきており、端部は欠落する。	
23	M 112	第168図	鉄製品(鍛造品)鎌?	15	土坑 67	5.9	1.2	0.9	8.5	2	錆化()	酸化土砂に覆われた鉄鎌様の鉄製品の体部から足部にかけての破片。鎌の先端部と側部は欠けている。横断面形は部位により異なる。	
24	M 108	第168図	鉄製品(鍛造品)円盤状不明品	15	土坑 67	3.0	2.7	0.7	4.4	2	錆化()	厚さ2mm前後を測る円盤状の鉄製品破片。軸穴の痕跡はなく、側部三面が破面となる。外周部の径は小ぶりで紡錘車とは断定できない。表裏面で荒れ方が異なり、表面の方が平滑。	
25	M 109	第168図	鉄製品(鍛造品)鍋(口縁部)	15	土坑 67	2.2	2.9	1.3	7.1	2	錆化()	やや内傾した平縁となる鉄鍋口縁部破片。口唇部の最大幅は約7mm。体部の厚みは3mm強を測り、体部は斜めに傾斜する。	
26	M 110	第168図	鉄製品(鍛造品)鍋(体部)	15	土坑 67	2.3	3.6	1.6	11.8	2	錆化()	放射割れの激しい、酸化土砂に覆われた鉄鍋体部破片。厚みは4mm前後と推定される。下手側端部がやや内側に曲がっており、鍋とすれば体部から底部にかけての破片となる。	
27	M 46	第137図	椀形鍛冶滓(極小)	15	畠 3	3.9	4.3	2.6	47.8	4	なし	左側の肩部と下手側の側部の一部が欠落した 極小の椀形鍛冶滓。上面は平坦気味で、下面は左右方向に突出する舟底状。右側部の中央付近も破面の可能性が高い。	
28	M 50	第137図	鍛冶滓	15	畠 3	3.5	2.3	1.0	9.1	4	なし	扁平な鍛冶滓片。上下面が生きており、右側部が破面となる。薄く広がった滓で滓量の少ない時に生成か。	
29	M 42	第136図	鉄製品(鍛造品)大型釘?	15	畠 3	9.4	3.4	2.6	76.0	4	錆化()	厚い酸化土砂に覆われた大型の釘状不明品。上面の中央部には平坦面を持つ体部が露出し、下手側は側部が突出する。上手側は短く上方に折れ曲がっているが、これは酸化土砂による腐か、釘としての径は1.1cm前後。梗状となる可能性もある。	
30	M 41	第136図	鉄製品(鍛造品)鍋(底部)	15	畠 3	9.8	6.9	2.8	157.0	4	なし	上下面を厚い酸化土砂に覆われた鉄鍋の底部破片。側部は全面破面となる。右側は円弧状の平面をもち、体部への立ち上り部を示す。これから推定すると比較的小ぶりの鍋底で、厚みは2.5mmと薄い。	
31	M14-16	第119図	鉄製品(鍛造品)刀(別の刀子と刀片が付着)	15	土坑 61	36.7	5.0	2.5	532.0	5	錆化()	三片に割れている刀。幅広のわりに刃部の短い刀で、中世的な特色をもつ。身幅は2.9cm前後、背幅は約5mmを測る。外周部には木部が残り鞆入りとなる。切先はやや丸みを持っている。鞆の厚みは体部中央で4mm強を測る。鞆の外周部に沿って、刀子の可能性をもつ別の鉄製品が、わずかに軸をずらして乗っている。身幅は約1.4cm、厚みは3mm弱。刃部がやや丸みをもつ。また別に、刀の背側から斜めに立ち上がるような別の刀片らしき突出部をもつ。幅は3cm前後。長さは現状で7.5cm前後を測る。	
32	M 89	第158図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	櫛列 6	3.0	1.7	1.5	5.9	2	錆化()	酸化土砂に覆われた棒状不明品破片。下手側には破面が露出し、断面形が径4.5mmの方形となる。芯部が抜けてしまっている。	
33	M 90	第158図	鉄製品(鍛造品)釘	15	櫛列 6	4.5	1.1	0.9	5.1	2	錆化()	わずかに頭部を残す、ほぼ円形に近い釘。頭部はわずかに屈曲し、側部先端は欠けている。横断面形は方形。	
34	M 13	第111図	椀形鍛冶滓(極小)	15	掘立柱建物 7	4.7	2.7	2.2	36.4	3	なし	側部三方が破面となった極小の椀形鍛冶滓破片。上面は皿状に窪み、下面が椀形に突出する。本来の滓主体部は上手側。	

表45 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物観察表(2)

構成 No	報告書 No	挿画	遺物名	地区名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
35	M 113	第169図	鍛冶滓	15	P490	2.5	1.9	1.9	7.2	2	なし	左右の側部と下手側が破面となった鍛冶滓。上面は木炭痕の残る波状で、上手側の側部は楕形となる。下面扱いがやや磁着が強い。	
36	M 88	第157図	椀形鍛冶滓 (極小)	15	掘立柱建物 12	3.4	2.2	1.7	17.4	1	なし	緻密な滓質の小型の椀形鍛冶滓の側部片。上面と側面の一部が生きており、側部四面が破面となる。やや流動状で、下面左上手に灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が固着する。	
37	M 106	第165図	椀形鍛冶滓 (極小)	15	柱穴 56	3.0	1.5	1.7	8.5	2	なし	不規則な凹凸や小破面に覆われた極小の椀形鍛冶滓片。上面と右側部から下手側にかけて生きており、左側部が主破面となる。滓質は二種類が混在し、一方が緻密な青光りする滓部で、もう一方が半流動状の錆色の強い滓部となる。	
38	M 105	第165図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	15	柱穴 56	3.2	1.2	1.0	4.7	2	錆化 ()	酸化土砂に覆われた棒状不明品。下手側が破面で、芯部が抜けて方形の空洞となる。径は4.5から5mmを測る。	
39	M 95	第160図	椀形鍛冶滓 (極小)	15	掘立柱建物 13	2.7	2.4	2.1	15.2	2	なし	側部二面が破面となった極小の椀形鍛冶滓片。上面と上手側の側部が生きており、表面にはわずかに木炭痕あり。滓質は緻密ながら微細な気孔あり。	
40	M 96	第160図	椀形鍛冶滓 (極小)	15	掘立柱建物 13	2.8	2.2	2.3	20.0	1	なし	緻密な椀形鍛冶滓の中核部破片。下面中央部と上面の一部のみが生きており、全体がシャープな破面に囲まれている。破面には気孔がわずかに露出する。	
41	M 92	第160図	鉄製品 (鍛造品) 釘又は鉄鑑	15	掘立柱建物 13	2.6	0.6	0.5	1.5	2	錆化 ()	上手側端部が破面となった釘または鉄鑑、体部には幅1.5cmほどの範囲で横方向の木質が残る。上手側端部の横断面は長方形。足部側は酸化土砂のため不明。	
42	M 93	第160図	鉄製品 (鍛造品) 釘	15	掘立柱建物 13	2.5	1.0	0.8	2.9	2	錆化 ()	体部から足部が欠落した頭折れ釘破片。頭部は左側に広がった平頭で、作りはやや粗し、体部の横断面は方形か。	
43	M 94	第160図	鉄製品 (鍛造品) 釘?	15	掘立柱建物 13	3.1	1.4	1.1	4.9	2	錆化 ()	酸化土砂に覆われた釘状不明品。下手側端部には方形断面をした破面露出する。径は約3mm。その部分以外は全く不明となる。	
44	M 101	第162図	鉄製品 (鍛造品) 釘	15	掘立柱建物 15	6.6	1.5	1.5	10.1	2	錆化 ()	二片に割れている頭折れ釘。頭部は構成 No.42 と似て、左側に突出する平頭。体部の横断面は方形となる。足部は細く延びており、ほぼ定形。表面には酸化土砂が厚い。	
45	M 18	第162図	椀形鍛冶滓 (極小)	15	P 487	3.4	2.5	1.5	19.2	3	なし	やや扁平な椀形鍛冶滓の側部破片。側部二面が破面となる。上面が平気味で下面はわずかな凹凸あり。滓質は緻密で流動性が高い。	
46	M 17	第126図	鉄製品 (鍛造品) 薄板状不明品	15	P 487	3.3	1.6	1.0	5.2	3	錆化 ()	上面を酸化土砂で覆われた薄板状不明品破片。厚みは約2mmを測る。平板で厚さがほぼ一定のため、刀子類ではない。側部二面が破面となっている。	
47	M 81	第148図	椀形鍛冶滓 (極小)	15	遺構外 (段1・2)	3.0	2.2	2.0	19.0	1	なし	側部に小破面を残す、小塊状の椀形鍛冶滓破片。上面は平気味で、側部は小破面が連続する。滓質はやや緻密。	
48	M 82	第148図	椀形鍛冶滓 (中、含鉄)	15	遺構外 (段1・2)	5.1	3.3	3.7	83.5	5	錆化 ()	3.8cmほどの厚みをもった、中核部を覆った中核部から側部破片。左側部が主破面となる。右側部下面も破面の可能性が高い。上面が平気味で下面は血状。含鉄部は右側部上手側の中核部。	
49	M 79	第148図	鉄製品 (鍛造品) 釘	15	遺構外 (段1・2)	3.8	1.0	0.9	3.1	4	錆化 ()	頭部を欠く釘の体部から側部にかけての破片。横断面は方形。側部側端部がわずかに曲がっている。	
50	M 78	第148図	鉄製品 (鍛造品) 釘	15	遺構外 (段1・2)	3.4	1.1	1.1	6.4	5	錆化 ()	酸化土砂に覆われた頭折れ釘の破片。下手側には破面が露出。頭部は酸化土砂に覆われ、形状ははっきりしない。	
51	M 80	第148図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	15	遺構外 (段1・2)	8.7	1.9	1.7	34.0	2	錆化 ()	両端部が破面となった、やや大ぶりの棒状不明品。横断面がわずかに長方形である。長さ8.6cmの間に横断面の変化がなく、角棒状となっている。なんらかの工具の一部か。	
52	M 77	第148図	鉄製品 (鍛造品) 鉄鍋	15	遺構外 (段1・2)	4.3	5.6	1.7	57.0	2	錆化 ()	厚い酸化物に覆われた、有段の鉄鍋口縁部破片。左右の側部が破面となっている。上手側端部は有段部分で、体部から少なくとも8cmほど斜上方に広がった後、再度立ち上がる。体部の厚みは3mm強を測る。特に凸線、沈線はなし。	
53	M 56	第141図	椀形鍛冶滓 (中)	15	大畦 群 1・溝 29・30	6.2	3.8	2.9	69.0	2	なし	中型の椀形鍛冶滓の側部寄り破片。左側部と右側部上手側は破面となる。下手側部はほぼ生きており、比較的立ち上がり急。上面は緩やかな平坦で下面は血状。	
54	M 62	第143図	椀形鍛冶滓 (中)	15	包含層 (層)	8.5	8.9	3.7	294.0	2	錆化 ()	完成に近い正円形の平面形をもつ中型の椀形鍛冶滓。右下下手側肩部のみが破面となる。滓部はまともがよく、側面から下面はきれいな椀形をなす。上面は緩やかに窪み、左寄りには、羽口の頸部に由来する粘土質溶着物が乗っている。構成 No.55 と基本的には類似。	
55	M 49	第137図	椀形鍛冶滓 (中、含鉄)	15	畠 3	8.5	8.2	2.5	257.0	3	錆化 ()	肩部下面に小破面を残す完成に近い整った形状の椀形鍛冶滓。平面形は不整形で、側面から下面は楕形となる。上面は丸味をもって窪み、下面は鍛冶炉の炉床土に接している。上面右端部に突出する瘤状の部分と中央付近に含鉄部となる。滓質は緻密で気孔有。	
56	M 34	第34図	椀形鍛冶滓 (極小)	15	畠 1	3.8	3.1	1.8	27.2	3	なし	上面の一部に粘土質の滓が固着した、極小の椀形鍛冶滓。肩部2ヶ所に4つの破面を残す以外は、完成に近い。右側面から下面がきれいな椀形で、左側部が丸んでいる。	
57	M 47	第137図	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	15	畠 3	3.7	3.4	1.9	32.6	3	錆化 ()	薄い酸化土砂に覆われた極小の椀形鍛冶滓破片。左側部が破面の可能性。上面と右側部が生きている。滓質はやや密度が低く、含鉄部は上面寄りの芯部。	
58	M 48	第138図	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	15	畠 3	4.3	3.1	2.1	33.2	2	錆化 ()	左側部から下面が破面となった極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上面は大きな波状で右側部から下面は楕形を示す。含鉄部は、下面中央寄りの芯部。	
59	M 51	第137図	鍛冶滓 (含鉄)	15	畠 3	3.1	2.3	2.5	18.8	3	錆化 ()	厚い酸化土砂に覆われた、含鉄の鍛冶滓片。上手側には新しい破面が露出し、滓部と、錆化により小さな中空部となった含鉄部が露出する。上面がわずかに平気味。	
60	M 19	第131図	鍛冶滓 (含鉄)	15	水田 1	3.2	2.8	1.4	23.6	2	錆化 ()	鍛冶滓片を含む酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。形状的には上面と右側部が生きており、左側部が破面となる可能性あり。	
61	M 52	第137図	流動滓	15	畠 3	1.5	2.1	1.3	9.4	1	なし	上面から上手側の側面に流動単位が残る、緻密な流動滓破片。側面3面と下面の8割方が破面となっている。滓質は緻密で中層に気孔の密集部が確認される。滓表皮は平滑で、暗紫紅色を示す。	
62	M 35	第133図	流動滓	15	畠 1	3.2	6.1	1.7	55.5	2	なし	緻密な流動性の良い流動滓破片。上面が生きており、側面は横方向へ広がる大型の気孔と破面からなる。上面はほぼ平坦で下面は緩やかな波状。わずかに木炭痕が確認される。	
63	M 37	第133図	流動滓	15	畠 1	8.7	4.7	1.8	126.0	2	なし	上面に木炭痕と流動状の自然面を持つ流動滓破片。側面には上手側の一部を除き小破面が連続する。扁平で上面には滓が重層したため、光沢のある剥離面が目立つ。下面は不規則な椀状で、遠元色の炉壁土や炉壁由来の塊が点々と残る。滓質は緻密で、気孔は部位により密度の差が激しい。構成 No.61 から 63 と No.13 並びに No.113 は鍛冶系の滓としては特異で、むしろ製錬系の滓の可能性を残している。	
64	C 9	第131図	羽口 (鍛冶)	15	水田 1	5.3	5.4	3.9	83.0	1	なし	鍛冶羽口の体部破片。肉厚が3.3cmと厚く、比較的太めの羽口を窺わせる。外面には先端部寄りの被熱を示す灰色の部分と薄い黒色ガラス質滓が残る。胎土は、わずかに初煎やササを混ぜる強い粘土質。	
65	M 28	第133図	鉄製品 (鍛造品) 薄板状不明品	15	畠 1	3.5	1.4	0.6	5.3	3	錆化 ()	横方向に長手の薄板状不明品。幅は1cm前後で、厚みは3mm程度と推定される。はつきりとした刃部は確認できず、全体に左方向に向かい薄くなっていく。刀子等の未成品の可能性もあり。	
66	M 43	第136図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	15	畠 3	3.9	1.2	1.0	7.6	3	錆化 ()	酸化土砂に覆われた棒状不明品。下手側の端部がわずかに曲がっている。鉄製品自体の破面が露出せず、断面形状は不明。	
67	M 39	第134図	鉄製品 (鍛造品) 刀子?	15	畠 2	3.5	1.5	1.2	6.8	3	錆化 ()	左側部が破面となる刀子状不明品。横断面ははや扁平で、刀子の刃部から茎部にかけての破片の可能性あり。ただし、酸化土砂のためはつきりしない。	

表46 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物観察表(3)

構成 No	報告書 No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
68	M 20	第131図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	15	水田 1	4.0	1.3	1.0	5.5	3	錆化 ()	両端部に破面が露出する棒状不明品。横断面は6mmほどの方柱状。	
69	M 29	第133図	鉄製品 (鍛造品) 釘?	15	畠 1	6.0	1.4	1.1	13.8	3	錆化 ()	酸化土砂に覆われた釘状の鉄製品。頭部と推定される突出部が斜方向に確認され、足部側は約2mmのところではれ曲がっている。酸化土砂中には鉄器表面の酸化物が露出する。	
70	M 25	第132図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	15	水田 2	6.3	1.6	1.3	24.2	3	錆化 ()	前者とやや似た棒状不明品。酸化土砂が厚く不明点が多い。頭部は平頭状で足部先端は曲がる。下手側端部には方形の横断面形をもつ小破面が露出する。	
71	M 26	第132図	鉄製品 釘状鉄製品	15	畠 3	4.4	2.5	1.6	16.2	2	錆化 ()	酸化土砂に覆われた釘状の鉄製品。横断面は方形で、約5mm程の厚さを測る。	
72	M 44	第136図	鉄製品 (鍛造品) 薄板状不明品	15	畠 3	3.8	1.9	0.9	9.8	3	錆化 ()	酸化土砂に覆われた薄板状不明品。扁平で鍛冶遺物の外表面をもつが、磁着傾向から鉄製品とした。右側が破面の可能性をもつ。	
73	M 45	第136図	鉄製品 (鍛造品) 鎌	15	畠 1	5.0	3.8	0.8	22.2	3	錆化 ()	鉄鎌の刃部。身幅は3cm程で刃部は弧状となる。背幅の厚みは3mm弱。短軸方向の断面形はわずかに反り気味。左右が破面となり、左側は新しい破面。	
74	M 31	第133図	鉄製品 (鍛造品) 鎌	15	水田 2	5.0	3.1	1.0	22.6	5	H ()	鉄鎌の先端部。現状の最大身幅は29cm。背側がきれいな弧状で、刃部は荒れている。右側が破面。表面には瘤状の酸化土砂と穢が残る。	
75	M 27	第132図	鉄製品 (鍛造品) 鉄鍋 (体部又は注口部)	15	水田 1	2.9	1.4	0.8	5.6	3	錆化 ()	5mmほどの厚みをもつ、鉄鍋の体部又は注口部破片。左右の側面と下手側が明瞭な破面となる。上手側は薄くなって収束するが、破面は一種である。短軸方向に沿っているため、構成 No78 と同様の注口部の破片の可能性あり。	
76	M 22	第132図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (体部)	15	水田 2	2.6	3.8	0.9	13.0	3	錆化 ()	厚さ3.5mm前後を測る鉄鍋体部破片。外周部は4面とも破面となる。内面の剥離が進んでおり、被熱した底部片の可能性もある。	
77	M 40	第134図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (体部)	15	畠 2	3.2	3.6	1.7	25.6	3	錆化 ()	厚い酸化土砂に覆われた鍋体部破片。外周部は4面とも破面となる。裏面は緩やかな皿状で、構成 No75 と同様、底部破片の可能性もある。厚みは4mm前後と薄い。	
78	M 64	第163図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (注口部)	15	包含層 (1層)	3.4	3.8	1.6	22.8	3	錆化 ()	右側部に棒状の破面が露出する鉄鍋注口部破片。下手側の端部は直線状に途切れた自然面で、残る3方が破面となる。現状で幅28cm以上の注口部となる。右側に向かって絞られており、現状での長さは38cmを測る。厚みは約4.5mm。	
79	M 21	第131図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (体部)	15	水田 1	4.1	4.8	2.0	29.8	2	錆化 ()	厚い酸化土砂に覆われた鉄鍋体部破片。下手側の中央部にわずかに地の鉄部がのぞき、全体に緩やかな反りをもつ。	
80	M 23	第131図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (口縁部)	15	水田 1	4.1	5.2	2.8	60.5	2	錆化 ()	ぶ厚い酸化土砂に覆われた鍋口縁部破片。体部が9mmほどの厚みをもち、上手側に残る口唇部は斜め上方に立ち上がる。それ以下の体部は酸化土砂のためはつきりしない。比較的大型の鉄鍋片が。	
81	M 63	第143図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (底部)?	15	包含層 (1層)	4.9	5.2	2.8	71.5	3	錆化 ()	扁平板状の鉄鍋底部破片。上面は半分以上が瘤状の酸化土砂に覆われており、反りは認められない。側面の3方は破面の可能性が残るが、不明瞭。	
82	M 32	第133図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (口縁部)	15	畠 1	6.7	5.6	1.4	99.5	3	錆化 ()	有段の鉄鍋口縁部破片。左右の側面と下面は破面となり、上手側の口唇部は生きている。斜めに立ち上がる上端部で破面となる。口縁は5cmほど外側に広がった後、約2cmの高さで斜め方向に立ち上がる。厚みは口縁部で約6mm。	
83	M 24	第131図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (体部)	15	水田 1	8.2	5.4	2.4	122.0	1	錆化 ()	上下面を分厚い酸化土砂に覆われた鉄鍋体部破片。緩やかな反りをもち、右側の端部に破面が露出する。厚みは約2mmから6mm強と、厚みが不均一。上手側が薄い。	
84	M 33	第133図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (体部から底部)	15	畠 1	9.0	8.7	4.3	269.0	2	錆化 ()	塊状の酸化土砂に覆われ、一見、椀形鍛冶遺物の外観をもつ鉄鍋破片。体部から底部にかけての破片が、ほぼ完形。中央部で逆「く」の字状に折れ曲がっており、体部と底部の境をなす部分と推定される。下手側の端部に破面が露出しており、厚みは4mmを測る。	
85	M 38	第133図	椀形鍛冶遺 (中)	15	畠 1	10.3	8.7	5.2	647.0	2	なし	中型のずっしりとした重さをもつ椀形鍛冶遺。平面、不整半円形で左側は直線状となる。下手側の肩部に小破面が巡るが、比較的完形に近い。下手側が肥厚して、上手側から右方向に向かい徐々に薄くなっていく。滓質は緻密で、下面は鍛冶炉の炉床土に接する。本遺跡では最大重量をもつ椀形鍛冶遺。	
86	M 72	第144図	椀形鍛冶遺 (小、含鉄)	15	包含層 (1層)	6.1	5.8	3.4	127.0	3	錆化 ()	ぶ厚い酸化土砂に覆われた小型の椀形鍛冶遺。滓部は下手側に露出しており、やや平板状。滓の肩部と推定されるが、他の部分は不明。	
87	M 61	第141図	椀形鍛冶遺 (小、含鉄)	15	大畦畔 1・満 29・30	6.5	5.1	4.5	168.0	5	錆化 ()	ぶ厚い酸化土砂に覆われ、2片に割れている含鉄の椀形鍛冶遺。外周部はオニイタ状の酸化物に覆われており、滓内部は含鉄部の錆化のため、黒色や茶褐色となっている。それ以外は表面が露出せず不明となる。	
88	M 58	第141図	椀形鍛冶遺 (極小)	15	大畦畔 1・満 29・30	5.3	3.0	2.5	43.6	2	なし	上手横方向に扁平な含鉄部をもつ極小の椀形鍛冶遺。下手側の端部に小さな破面があるが、ほぼ完形。上面は平坦気味で、側面は部位により変化が激しい。滓量の少ない鍛冶遺物。	
89	M 57	第141図	椀形鍛冶遺	15	大畦畔 1・満 29・30	3.5	4.3	1.9	32.8	2	なし	全体に扁平で、右方向に向かい広がっている極小の椀形鍛冶遺。左側のみが小破面となり、全体形状は不規則な槌形。上面には凹凸があるが、窪みの部分は木炭痕。	
90	M 36	第133図	鍛冶遺	15	畠 1	2.8	2.0	1.5	8.0	1	なし	酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶遺。上手側が膨らんでおり、下面の中央部は結晶が発達してキラキラと輝いている。	
91	M 59	第141図	鍛冶遺	15	大畦畔 1・満 29・30	3.0	2.5	1.9	13.8	4	なし	厚い酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶遺。下手側の端部には小範囲で滓部が露出するものの、密度が低い。	
92	C 11	第144図	羽口 (鍛冶)	15	包含層 (1層)	4.3	3.3	2.2	24.8	1	なし	細身の鍛冶羽口の先端部破片。羽口の頸部分で、下面には垂れが生じている。通風孔部の壁面に薄く滓が張り付く。身厚は1.1cm前後。左側の破面には粘土単位を示す層状の肌分かれあり。	
93	M 60	第141図	粘土質溶解物	15	大畦畔 1・満 29・30	5.3	5.6	2.7	61.5	3	なし	やや不規則な椀形の粘土質溶解物。側面には小破面が連続する。全体形状は右方向に開く椀状。滓質は下半が鍛冶滓で、上半が羽口の頸部に由来する粘土質溶解物。	
94	M 30	第133図	鉄製品 (鍛造品) 釘?	15	畠 1	2.0	0.7	0.7	1.8	3	錆化 ()	弧状に折れ曲がった釘状不明品。下手側が破面で、横断面はやや長方形を示す。上手側の端部が頭部にも見えるが、はつきりしない。	
95	M 68	第144図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	15	包含層 (1層)	3.6	1.4	0.7	5.2	2	錆化 ()	上手側に破面が露出する棒状不明品。下手側の端部は細くなっており、釘の可能性も残る。上手側の横断面は幅5mmほどの長方形気味。	
96	M 67	第144図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	15	包含層 (1層)	3.8	1.1	0.7	4.2	2	錆化 ()	前者と同様、上手側が破面となった棒状不明品。前者と似ているが搭合はしない。下手側の端部が徐々に細くなっており、釘の可能性もあり、芯部が中空ではなく、細い方柱状に突出する。	
97	M 54	第141図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	15	大畦畔 1・満 29・30	3.5	1.4	1.3	6.9	1	錆化 ()	黄褐色の酸化土砂に覆われ、逆「し」字状に折れ曲がった棒状不明品。下手側の端部には5mmほどの径をもった方形の破面が露出する。芯部は錆化して反れる。	
98	M 69	第144図	鉄製品 (鍛造品) 板状不明品	15	包含層 (1層)	5.3	1.7	1.5	13.2	3	錆化 ()	厚い酸化土砂に覆われた板状不明品。上手側が扁平な板状で、下手側の端部は細くなって収束する。	
99	M 65	第141図	鉄製品 (鍛造品) 刀子?	15	包含層 (1層)	3.4	1.8	1.3	6.6	3	錆化 ()	幅1.15cmほどの細身の刀子状不明品。右側部に新しい破面が露出し、左側部も破面となる。背側の厚みは1.5mmから2mm程度。比較的真直で使い減りは少ない。	
100	M 53	第141図	鉄製品 (鍛造品) 刀?	15	大畦畔 1・満 29・30	6.2	3.1	1.3	26.8	1	錆化 ()	やや小ぶりの刀又は大刀子破片。左側部には破面が露出する。身幅は現状で1.9cm前後、背側の厚みは3mmを測る。右側に向かい幅が狭くなっているが、芯部とは判断できない。上面右側が黄褐色の酸化土砂で膨らむものの、刃部は直線状。	

表47 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物観察表(4)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
101	M 55	第141図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	15	大畦群1・溝29・30	15.0	4.4	4.0	267.0	3	錆化()	酸化土砂により太い棒状となった棒状不明品。下側が二つに割れており、破面には幅1.3cm、厚さ1cmの棒状の断面が露出する。鉄部の外周部は厚いオキイタ化している。現状では刀のよな刃部は確認されない。	
102	M 71	第144図	鉄製品 (鍛造品) 鍋(底部)?	15	包含層()	3.0	2.3	1.1	7.5	2	錆化()	右側に破面が露出する鉄鍋体部破片。反り返りがない平坦な破片で、厚みは約4mmとなる。	
103	M 66	第144図	鉄製品 (鍛造品) 鍋(底部)?	15	包含層()	4.4	3.8	0.7	35.4	3	錆化()	厚い酸化土砂に覆われた鉄鍋の底部破片。前者と似た厚みや形状を示すが接合しないため、別個体とした。側面は破面の可能性が大きい。	
104	M 70	第144図	鉄製品 (鍛造品) 鍋(底部)?	15	包含層()	8.2	5.3	2.8	121.0	3	錆化()	上下面に厚く酸化土砂が固着した平板な鍋底部破片。右側部から下側部は表面が露出する。左側部の平面形がやや丸味をもっており、場合によれば鍋の立ち上がり部を示す可能性もあり、厚みは5mm。	
105	M 73	第145図	椀形鍛冶滓 (極小)	15	包含層()	2.4	2.3	1.0	15.6	1	なし	緻密な極小の椀形鍛冶滓破片。上手側の側部が椀形鍛冶滓の側面上半と推定され、下手側の側部に小範囲の自然面あり。破面は緻密で部分的に結晶が発達する。	
106	M 75	第147図	椀形鍛冶滓 (極小)	15	包含層()	3.8	2.8	1.9	28.0	4	なし	上手側が破面となった極小の椀形鍛冶滓破片。上側は生きており、側部は破面と自然面が混在する。気孔は少なく、やや結晶が発達気味。	
107	M 76	第147図	椀形鍛冶滓 (極小)	15	包含層()	6.6	3.9	2.3	80.0	3	なし	ほぼ完形の極小の椀形鍛冶滓。左側部は重層しており、上下とも滓質は似る。上側の深の左端部には羽口の頸部に由来する粘土質の滓が残されている。下側は不規則な椀形。	
108	M 74	第147図	鍛冶滓 (含鉄)	15	包含層()	2.4	2.7	2.0	14.2	2	錆化()	薄い酸化土砂に覆われた小塊状の含鉄の鍛冶滓。ほぼ完形品で底面が突出する。含鉄部は中核部。	
109	M 129	第189図	鉄塊系遺物 (含鉄)	16	溝19	5.0	2.6	2.1	35.0	3	錆化()	短軸方向に長手で、極小の椀形鍛冶滓様の外観をもつ鉄塊系遺物。比重が高く全体に磁着する。上側は平坦気味で、底面が短軸方向に舟底状となる。下手側の側部から見ると丸棒状の断面形を示す。錆化した鉄部主体の鍛冶鉄塊系遺物の可能性もあり。	
110	M 118	第184図	椀形鍛冶滓 (極小)	16	溝8	5.5	4.6	3.8	89.0	1	なし	酸化土砂に覆われ、やや大振りの塊状となった極小の椀形鍛冶滓。左側部から上手側は破面となり、厚みから小型の椀形鍛冶滓になる可能性も残されている。上手側半分は黄褐色の酸化土砂に覆われる。	
111	M 120	第184図	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	16	溝8	5.1	3.5	3.3	44.6	2	錆化()	左側部が破面となった極小の椀形鍛冶滓の側部破片。内側部に気孔が数多く、比較的軽量。含鉄部は上面中央部の表皮直下。	
112	M 119	第184図	鍛冶滓	16	溝8	3.9	3.0	2.6	19.0	1	なし	黄褐色の厚い酸化土砂に覆われた、小塊状の鍛冶滓。上面が平坦になることから鍛冶滓と判断した。	
113	M 121	第184図	流動滓	16	溝8	4.0	3.4	2.7	45.2	2	なし	緻密で結晶が発達した流動滓破片。上下面が小範囲で生きており、側部はシャープな破面となる。下側は浅い皿状で、わずかに粘土質の滓が確認される。	
114	M 127	第186図	椀形鍛冶滓 (極小)	16	溝8・9	3.2	2.9	1.6	17.8	3	なし	薄い酸化土砂に覆われた極小の椀形鍛冶滓破片。上下面が生きており、側部は小破面に覆われている。上下逆の可能性もあり。	
115	M 126	第186図	鉄製品 (鍛造品) 釘	16	溝8・9	7.1	1.3	1.2	8.6	2	錆化()	足部の先端部が細身となる釘。二片に割れており、頭部がやや折れ曲がり気味。横断面形は方形で、頭部は酸化土砂が厚い。	
116	M 123	第185図	椀形鍛冶滓 (極小)	16	溝9	3.8	2.5	1.7	18.0	2	なし	右側を除く側部三方が破面となった極小の椀形鍛冶滓破片。肩部の破片で左側が滓本体部分。破面はきれいな椀形で、比較的滓量のまとまった椀形鍛冶滓であった可能性が高い。上面に木炭痕あり。	
117	M 124	第185図	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	16	溝9	4.0	4.5	2.7	50.5	3	錆化()	下面に鍛冶炉の炉床土が面的に固着した椀形鍛冶滓の側部破片。右側部から上手側が全面破面で、小型の椀形鍛冶滓の可能性もあり、滓は内部に気孔が数多く、風化も進む。含鉄部は中核部。	
118	M 125	第185図	粘土質溶解物	16	溝9	3.1	3.4	1.7	10.8	1	なし	羽口の頸部に生成された黒色ガラス質滓主体の粘土質溶解物。側部のうち四方が破面で、上面は粉塵に接している。	
119	M 122	第185図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	16	溝9	2.7	1.3	1.0	2.6	1	錆化()	両端部が破面となった棒状不明品。外周部が酸化土砂に覆われ、鉄部の断面形ははっきりしない。	
120	M 128	第188図	鉄製品 (鍛造品) 釘?	16	土坑68	2.1	0.7	0.5	1.1	1	錆化()	小さな楔状の小釘または釘の足部片。横断面形は長方形で、現状で6mmを測る。側面の平坦度は高い。	
121	M 130	第190図	鍛冶滓	16	土坑69	2.6	2.2	1.9	14.2	2	なし	黄褐色の酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶滓。表面が酸化土砂のため不明点が多い。	
122	M 135	第190図	鉄製品 (鍛造品) 釘?	16	土坑69	2.0	1.5	1.0	4.1	2	錆化()	下手側端部に径4.5mm大の方形断面が露出した釘状不明品。塊状の酸化土砂があり、上手側の端部も破面の可能性が高い。	
123	M 133	第190図	鉄製品 (鍛造品) 釘?	16	土坑69	2.7	0.8	0.8	2.0	2	錆化()	両端部が小破面となった釘状不明品。横断面形ははっきりしない面もあるが、全体形状から推定して釘の可能性をもつ。	
124	M 134	第190図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	16	土坑69	3.1	1.2	0.9	3.5	2	錆化()	酸化土砂に覆われた、やや扁平な棒状不明品。上手側が斜めに飛び出しており、破面と推定される。下手側の端部は細くなり、長方形の断面形を示す端部が露出する。	
125	M 136	第190図	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	16	土坑69	4.5	1.2	1.1	7.5	2	錆化()	薄い酸化土砂に覆われた棒状不明品。横断面形は明らかに方形で、釘の可能性あり。上手側で径6から7mm大。下手側は破面が。	
126	M 131	第190図	鉄製品 (鍛造品) 刀子?	16	土坑69	3.3	1.4	0.6	3.6	2	錆化()	二片に割れている刀子状不明品。幅は1.3cmで、刀子すれば刃部がやや丸状となる。先端部割、基部とも生ずる。	
127	M 132	第190図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (体部)	16	土坑69	3.5	5.3	0.3	12.6	3	錆化()	両側部と下手側が破面となった薄手の鍋体部破片。上手側は口縁部様ながら破面の可能性もあり、厚みは3mm前後を測る。わずかに反りがあり、体部はまた口縁部片が。	
128	M 145	第193図	椀形鍛冶滓 (中)	16	包含層()	3.7	6.0	3.2	101.0	2	なし	中型の椀形鍛冶滓の側部破片。右上手側を除き、側部はシャープな破面となっている。滓としての最大厚みは3.2cm。上面は木炭痕の残る平坦面、下面は鍛冶炉の炉床土に接した剝離面。滓質は緻密で気孔は少ない。	
129	M 144	第193図	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	16	包含層()	3.7	3.7	2.4	43.4	3	錆化()	酸化土砂に覆われた極小の椀形鍛冶滓破片。上下面と右側部が生きており、左側部を中心に破面の可能性が高い。含鉄部は上手側の上面寄りであり、わずかに放射割れと黒錆のじみあり。	
130	M 146	第193図	鍛冶滓	16	包含層()	2.6	2.2	1.4	9.1	3	なし	上面がわずかに流動気味の鍛冶滓破片。左側部の一部と上手側が破面となる。下面は木炭痕と灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が固着している。滓質は緻密で気孔はやや少ない。	
131	M 143	第193図	粘土質溶解物	16	包含層()	3.8	4.9	2.2	22.0	1	なし	様々な色調に浸化した粘土質溶解物破片。側面の大半と下面の左寄り側が破面となる。下面右側には滓が薄く張り付く。左側部に羽口の頸部と推定される。未溶化の滓が付着する。	
132	M 137	第193図	鉄製品 (鍛造品) 釘	16	包含層()	3.2	1.0	0.9	3.3	2	錆化()	弧状に曲がった釘。頭部があるようにも見えるが、酸化土砂の可能性も残る。横断面形は方形。足部は端部が小さく欠けている。	
133	M 138	第193図	鉄製品 (鍛造品) 環状鉄製品	16	包含層()	5.1	3.0	1.0	16.3	2	錆化()	二片に割れているが、接合する環状鉄製品。右側端部は90度折れ曲がっており、鉸の足部状。破面の横断面形は径6mmほどの方形。環状の内側は径1.5cm程度の円形となる。見かけより芯部がしっかりした鉄製品。	
134	M 139	第193図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (口縁部)?	16	包含層()	3.4	5.1	0.8	21.9	2	錆化()	6mmほどの厚みをもつ鉄鍋口縁部破片。左右の側部と下手側が破面で、上手側はきれいな弧状に途切れている。この部分の一部が口縁部の可能性あり。構成No.136と同一破片か。	
135	M 140	第193図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (体部)	16	包含層()	3.9	3.9	0.4	17.0	2	錆化()	鉄鍋の体部または口縁部破片、厚みは4mm前後を測る。左右の側部が破面で、上手側は破面または口唇部となる。現状では前者の可能性の方が強い。	
136	M 142	第193図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (底部)	16	包含層()	5.9	3.5	2.1	36.4	3	錆化()	7mmほどの厚みをもつやや厚手の鉄鍋底部破片。短軸方向に反りがあり、体部というより底部の立ち上がり部に近い可能性が高い。表面には酸化土砂が厚い。	
137	M 141	第193図	鉄製品 (鍛造品) 鍋 (底部)	16	包含層()	7.0	4.0	0.8	79.5	3	錆化()	厚い酸化土砂に覆われた鉄鍋底部破片。左右の側部と上手側に破面が露出しており、厚みは7mm前後と厚い。比較的水平板で、底部片の特色をもつ。	

表48 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物観察表(5)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
138	M 149	第193図	鉄製品(鍛造品)釘?	16	包含層(層)	4.0	1.4	1.3	13.6	3	錆化()	厚い酸化土砂に覆われた釘状不明品。下手側は明らかな破面で、径5mmほどの方形の破面が露出する。頭部の存否は不明。	
139	M 150	第193図	鉄製品(鍛造品)釘?	16	包含層(層)	6.9	2.2	1.8	28.6	3	錆化()	酸化土砂が上手側に大きく固着した釘状不明品。下手側端部には頭部寄りを示す方形断面の破面が顔を出している。径は3.5mm大。上手側に向かい様にも見えるが、酸化土砂によるものかもしれない。	
140	M 147	第193図	鉄製品(鑄造品)鍋(体部)	16	包含層(層)	3.1	4.7	0.4	17.2	3	錆化()	層状の酸化土砂に覆われた鉄鍋体部。厚みは3mm前後で比較的薄い。わずかに反りがあり、底部破片の可能性も残されている。側部は全面破面。	
141	M 152	第193図	鍛冶滓(含鉄)	16	包含層(層)	2.4	1.6	1.3	8.5	2	錆化()	小塊状の丸みをもった鍛冶滓片。左側部が主破面で、内部には気孔が数多い。右側部から下面は丸みをもった楔形で、本来の形状を示す。	
142	M 151	第193図	炉壁(溶解炉?含鉄)	16	包含層(層)	2.9	2.7	1.7	12.0	3	H()	内面がわずかに酸化して、上手側の端部が水平に途切れた炉壁片。下半部には灰褐色に被熱した石が含まれている。やや性格不明の遺物で、上端は鑄型様の接合痕、見かけは土製のようにも見えるが、内部に金属を残している。一種の溶解炉の破片かもしれない。	
143	M 154	第209図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	17	土坑 70	6.5	1.2	0.4	7.4	2	錆化()	二片に割れている棒状不明品。横断面はやや長方形で釘状とはならない。表面には酸化土砂が厚く、ひび割れも目立つ。	

表49 門前鎮守山城跡鉄関連遺物観察表(1)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
1	M 5	第257図	鉄製品(鍛造品)鉄錠		段状遺構 5	9.6	1.5	1.2	78.5	6	L()	幅1.8cmほどの鉄錠頭部。上手側は方形の横断面形で、下手側は長方形の横断面形となる。やや反りがあり、下手側端部は刃部様、上手側は破面の可能性を持つ。X線写真撮影の結果、鉄錠の頭部と判明。	
2	M 6	第259図	椀形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	10.9	9.3	3.5	336.0	2	なし	平面、不整形をした中型の椀形鍛冶滓。側部がとびとびに欠けているので、全体形状は生きている。下面上側は滓がすれて二段となる。	
3	M 7	第259図	椀形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	4.4	3.8	2.7	51.0	3	なし	小型の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。側部三方が破面となる。滓質はやや密度が低い。上面中央部を中心に鍛冶滓片が多量に固着する。	
4	M 8	第259図	椀形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	7.7	7.2	3.4	145.0	3	なし	側部に近い小型の椀形鍛冶滓。肩部に小破面あり、下手左側は含鉄部周辺の酸化土砂。滓質はやや密度が低い。	
5	M 9	第259図	椀形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	5.0	3.8	3.2	58.0	6	錆化()	大きな放射割れや黒錆のじむ小型の椀形鍛冶滓破片。中核部から側部にかけての破片。表裏面の酸化土砂中には黒色で薄手の鍛冶滓片が目立つ。	
6	M 10	第259図	椀形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	6.0	4.1	3.2	81.0	3	錆化()	中型の椀形鍛冶滓の半欠品。左側部は破面の可能性が大きい。酸化土砂のおおわれ、小さなひび割れが発達し始めている。酸化土砂中には、粉炭と鍛冶滓片を含む。	
7	M 11	第259図	椀形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.1	2.7	2.4	15.0	3	なし	極小の椀形鍛冶滓の側端部破片。破面は上手側と左側の側部。表面には薄く酸化土砂が付着し、鍛冶滓片も含まれている。	
8	M 12	第259図	椀形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	4.0	4.1	1.5	18.4	1	なし	三方に突出部を持つ偏平で極小の椀形鍛冶滓。左側部から上手側端部が小破面となる。粘土質で磁着は極めて弱い。わずかに鍛冶滓片が固着する。	
9	M 13	第259図	椀形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	4.5	4.3	2.1	31.2	2	なし	平面、不整形をした極小の椀形鍛冶滓。ほぼ完形品で、上面上手側には羽口先の溶解物の小範囲で残っている。下面は芯部の偏った椀形で、中央部には木炭痕による凹みが残る。	
10	M 14	第259図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.8	2.5	2.2	13.8	3	なし	酸化土砂に厚く覆われた、鍛冶滓または鉄製品破片。形状から前者と推定した。酸化土砂中には粉炭が目立つ。	
11	M 15	第259図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.8	2.6	2.2	17.2	3	なし	下面に突出する酸化土砂中に1.1cm大の鉄床石表面破片が固着する鍛冶滓。側部から下面は小さな木炭痕により凹凸が生じている。破面は上手側の側部のみ。上面左手にはコブ状の錆がくずれあり。	
12	M 16	第259図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	1.9	1.7	1.3	4.8	4	錆化()	小塊状の含鉄の鍛冶滓片。側部は破面と推定される。酸化土砂の表面には細かい放射割れあり。極小の椀形鍛冶滓の破片の可能性もあり。	
13	M 17	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.4	2.0	1.4	9.0	6	錆化()	やや前者と似た外観をもつ含鉄の鍛冶滓片。側部三方が破面の可能性を持ち、立ち上がり急となる。表面を酸化土砂が覆い、放射割れあり。	
14	M 18	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.1	2.7	1.7	9.1	4	錆化()	下手に貝殻状の錆がくずれ広がる含鉄の鍛冶滓片。上下面に沿って酸化土砂が広がり、側部には破面の可能性が高い。	
15	M 19	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.8	2.3	1.7	11.0	5	錆化()	偏平な板状の鍛冶滓片または鉄製品破片。上手側の端部は貝殻状の錆がくずれ、残る表面には酸化土砂が厚い。酸化土砂中には薄手で黒色や青光りする鍛冶滓片が多量に含まれている。	
16	M 20	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.3	2.2	2.2	14.8	5	錆化()	やや厚い酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓片。酸化土砂中には薄手の鍛冶滓片が多量に含まれている。粉炭も目立つ。上下面のみ薄皮状の黄褐色土が付着する。	
17	M 21	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.1	2.5	2.2	16.0	3	錆化()	短輪側の側面二面に破片が露出した含鉄の鍛冶滓。表面は黄褐色の酸化土砂に覆われ、内部から放射割れが発達している。右側部の酸化土砂中には7mm大の木炭片が突出している。	
18	M 22	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.8	2.4	2.0	20.8	5	錆化()	丸みを持った小塊状の鍛冶滓。ほぼ完形品で上面全体は平坦気味、右側部から上手側は椀形で、残る二方が立ち上がり急となる。下面には放射割れと黒錆のじむあり。	
19	M 23	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	4.0	2.7	2.1	21.8	4	錆化()	厚い酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓または鉄製品。上手側はコブ状の酸化土砂に覆われており、下手側はやや突出する。表面の酸化土砂中には、まばらに鍛冶滓片や粉炭が含まれている。	
20	M 24	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.5	2.6	2.4	23.8	5	錆化()	厚い酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。全体の形状は構成No.18と似る。ほぼ完形品と推定される。側面からは強い椀形を呈する。酸化土砂中にはわずかな鍛冶滓片と粉炭を含む。	
21	M 25	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.3	2.1	1.7	9.9	4	H()	黒錆のじむ端部各所から貝殻状錆がくずれが発達した含鉄の鍛冶滓。完形品の可能性が高く、鉄部主体とみられる。鍛冶滓塊系遺物の錆化の進んだ資料の可能性大。	
22	M 26	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.4	1.6	1.3	5.1	4	錆化()	右側部に小釘状の鉄製品の突出部をもつ鍛冶滓片。主体部分は粉炭主体の層部に覆われており、鍛冶滓中で生成された可能性大。小釘の横断面形はほぼ方形。	
23	M 27	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.9	1.4	1.8	6.6	2	錆化()	上半部は鍛冶滓部分で、下面中央部が小釘状となった鍛冶滓片。上下面が生きており、側部は全面破面の可能性を持つ。小型の椀形鍛冶滓の中核部破片の可能性もあり。この場合には、小釘は滓の下面沿いに落ち込んでいることになる。釘は頭部を残さず、体部から足部まで。	
24	M 28	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	3.2	2.5	2.1	12.6	4	なし	2cmほどの厚みをもつ再結合滓破片。上面沿いは黄褐色土主体で、下半は薄手の鍛冶滓片や粉炭を多量に含む。上手側の下端部には、1.8mm大の粒状滓が顔を出している。側部は基本的に破面。	
25	M 29	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	7.4	5.6	5.0	143.0	6	なし	最大厚が4.6cmほどの再結合滓破片。上面のみ生きており、側面から下面は全面破面となる。前者と同様上面沿いのみが黄褐色土で、以下は多量の鍛冶滓片主体の再結合滓となる。再結合の遺物は細かい滓片や粉炭の滓に加えて、2mm大の真性な粒状滓が確認できる。鍛冶滓片は3mm大で厚みは総体に薄い。鍛冶滓片は黒色から青光りするものまで様々。	
26	M 30	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	4.4	2.0	1.3	8.1	4	錆化()	偏平棒状の再結合滓破片。側部から下面部は全面破面。下手側の側面に1.5mmほどの厚みをもつ鉄製品様の突出部が露出しているが、鉄製品ではなくやや密度の高い再結合滓層と推測される。再結合の主体は様々な色調の鍛冶滓片。	

段状遺構6										グリッド							
段状遺構5 鉄製品 (鍛造品) 鉄鋸 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54	鉄製品 (鍛造品)	榎形鍛冶滓 (中)	榎形鍛冶滓 (小)	榎形鍛冶滓 (極小)	鍛冶滓	鍛冶滓 (含鉄)	鍛冶滓 (含鉄) 再結合滓 (含鉄製品、鍛造品)	再結合滓 (含鉄)	粒状滓	鉄製品 (鍛造品)	炉壁 (鍛冶炉)	羽口 (鍛冶)	粘土質溶解物	鉄床石	榎形鍛冶滓 (小、含鉄)	錆化(△) 鉄製品 (鍛造品) 錆化(△) 釘	
	分析	錆化(△)	錆化(△)	錆化(△)	錆化(△)	再結合滓	再結合滓	錆化(△)	錆化(△)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)		鉄製品 (鍛造品)

2、4、25、52はS = 1/4、他はS = 1/2

第292図 門前鎮守山城跡鉄関連遺物構成図

表50 門前鎮守山城跡鉄関連遺物観察表(2)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
27	M 31	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	2.8	2.9	1.5	7.4	6	錆化()	側部が破面となった滓主体の再結合滓破片。破面は層状で、下面には多量の鍛造剥片が顔を出している。鍛造剥片の比率は、8割方が黒褐色のもので残りが青光りするもの。	
28	M 32	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	2.5	3.2	1.8	12.6	4	錆化()	粉炭主体の再結合滓破片。上面は薄皮状の酸化土砂で下半は再結合滓層となる。側部の8割方は破面。粉炭は4mm大以下。	
29	M 33	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	4.0	3.6	2.3	20.0	3	なし	下面に多量の鍛造剥片と鉄床石表皮破片が固着した再結合滓破片。側部は全面破面で、上半部は褐色の粘質土となる。下面に固着する鉄床石は、3.75 x 2.8 x 0.4 cmを測る。右の表面には青光りする鍛造剥片が付着する。	
30	M 34	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	3.8	3.2	1.7	23.0	4	錆化()	やや比重の高い再結合滓破片。または鍛冶滓を内部に含んだ再結合滓の可能性もある。厚いボタン状の横断面形で、中央部が最も肥厚。再結合の主体は粉炭で、まばらに鍛造剥片も含まれている。比重の高さは芯部の密度が高いためか。	
31	M 35	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	4.6	3.3	2.5	32.0	5	錆化()	細かい薄片や鍛造剥片、5mm大前後の大きさを持つ鉄床石の薄片が上下面に目立つ再結合滓破片。右側部を除く側部三方が破面となる。上下面が逆転する可能性もあり。	
32	M 36		粒状滓	C3	段状遺構 6				1317			総量1317g出土。球形で、表面には凹凸を有する。	
33	M 37		鍛造剥片	C3	段状遺構 6				21082			総量21082g出土。平滑で光沢を持つ。不純物を含む。	
34	M 38	第260図	鉄製品(鍛造品)釘?	C3	段状遺構 6	2.7	0.8	0.6	4.0	2	錆化()	上手側の端部が逆L字状に折れ曲がった釘破片。足部側の先端部は欠けて、放射割れあり。	
35	M 39	第260図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	C3	段状遺構 6	2.7	1.0	1.0	3.9	3	錆化()	鉄片状の棒状不明品。上面のみ平坦で、側部から下面部は酸化土砂に覆われている。短軸側の両端部は貝殻状の錆がくずれのため変形している。	
36	M 40	第260図	鉄製品(鍛造品)頭折れ釘	C3	段状遺構 6	6.0	0.7	0.6	13.8	6	H()	小さく折れ曲がった頭部を持つ、頭折れ釘の体部から頭部にかけての破片。横断面形はやや長方形となる。足部先端部は欠落し、扁平な錆がくずれが突出する。頭部は平坦ではなく、斜めに傾く。	
37	M 41	第260図	鉄製品(鍛造品)小形鋳?	C3	段状遺構 6	5.4	1.3	0.9	19.2	7	H()	頭部が小さく四方に広がる小型の鋳。体部の横断面形はやや長方形を示す。刃部先端は錆がくれとなってしまっている。現状では酸化土砂のため刃部側が広がっているように見えるが、本来は広がりをもちない可能性が高い。頭部は平頭で、下面が大きな錆がくれに覆われる。	
38	M 42	第260図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	C3	段状遺構 6	5.2	2.0	2.0	34.8	8	M()	放射割れや酸化土砂に覆われた棒状不明品。上下面が平坦気味で、側部形状は不明。上面上手側には23cm大の鉄床石の表面破片が再結合している。下手側から上手側に向かいやや太くなる外観を持ち、未成品の可能性も高い。	
39	M 43	第261図	鉄製品(鍛造品)板状不明品	C3	段状遺構 6	3.0	5.3	1.4	25.2	6	H()	酸化土砂に覆われた左右方向に長手の板状鉄製品。左側部は急激に途切れであり、破面の可能性が高い。形状的には鎌の刃部か。	
40	C1	第261図	炉壁(鍛冶炉)	C3	段状遺構 6	5.2	4.2	1.6	11.8	1	なし	内部に鍛冶滓が薄く固着した鍛冶炉の炉壁破片。滓は黒色で、1cm大の木炭痕あり。炉壁胎土は初殻をわずかにまじえる粘土質である。	
41	C2	第261図	炉壁(鍛冶炉)	C3	段状遺構 6	4.0	4.9	2.3	18.8	1	なし	内面が溶化して黒色ガラス質の垂れが生じている鍛冶炉の炉壁片。側面は破面となる。外面は灰色に被熱している。胎土は粘土質で、わずかに初殻をまじえている。	
42	C3	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	3.6	2.9	2.1	16.4	1	なし	鍛冶羽口の、先端部破片。通風孔径は1.7cm前後と小ぶり。外面先端部は黒色ガラス化している。外形は比較的小ぶり。胎土は砂質で構成No.47とやや近い。	
43	C4	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	5.3	3.3	1.9	35.8	2	なし	鍛冶羽口の先端部破片。前者より径が大きく、先端部の溶損も進んでいる。肉厚は2.5cm程か。胎土はスコリアをまじえる粘土質で、初殻も確認される。	
44	C5	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	4.0	5.1	2.5	30.2	1	なし	鍛冶羽口の先端部破片。外形は小ぶりで、肉厚は1.9cm前後と薄い。先端部の溶化は前二者と異なり、体部側に向かってガラス質が広がる。胎土は植物繊維入りの粘土質。	
45	C6	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	4.6	4.8	1.5	25.4	1	なし	鍛冶羽口の先端部破片。肉厚が薄く、外周部の径はやや太めとなる。残存部位は頸部分。胎土はスコリアをまじえた、ややざつくりした粘土質。	
46	C7	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	4.4	3.9	0.7	27.4	1	なし	鍛冶羽口の先端部寄りの体部破片。先端部はひび割れから欠け落ちたまま再使用されている。通風孔部は欠落するが、肉厚は1.5cm強と薄い。	
47	C8	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	4.7	4.0	1.4	30.8	1	なし	鍛冶羽口の先端部寄りの体部破片。通風孔部は残るが、横断面形は丸くない。胎土は細かい植物繊維を含むものでやや砂質。	
48	C9	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	3.4	4.5	1.3	28.4	1	なし	鍛冶羽口の基部寄りの体部破片。肉厚は2cmを超える。側部は破面で、右側の破面には層状の構造が残る。	
49	C10	第261図	粘土質溶解物	C3	段状遺構 6	3.5	2.8	1.8	8.6	1	なし	外周部が溶化した粘土質溶解物。表面の一部には濃褐色の錆が取り巻き、下面は碗形となる。鍛造剥片が一点固着する。	
50	C11	第261図	粘土質溶解物	C3	段状遺構 6	6.4	4.0	2.9	24.2	2	なし	上面の左右で質感の異なる粘土質溶解物破片。右側は錆色が強く、左側は黒色となる。上面と右側部から下手にかけてが生きており、他は全面破面。1cm大以下の粘土塊の集合体のような外観を呈す。羽口頸部で生成か。	
51	S 1	第261図	鉄床石	C3	段状遺構 6	6.1	4.8	1.1	67.0	1	なし	表面の一部に鍛造剥片が固着した鉄床石表面破片。肩部破片と推定され、他に二片を伴っている。右質は安山岩。	
52	S 2	第261図	鉄床石	C3	段状遺構 6	9.3	9.3	3.5	314.0	2	なし	鉄床石の破片と推定される石片。上面と側部二方が自然面で下面が破面となる。右下手側の肩部にも破面あり。鉄床石とすれば、使用面は逆面か。右質は安山岩。	
53	M 2	第245図	椀形鍛冶滓	E4	盛土遺構 1 下層包含層	4.7	3.6	3.0	67.0	5	錆化()	小型の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。上下面と上手側の側部が生きており、残る側部は破面となる。肩部はやや乱れた形状で、含鉄部は下面沿い。	
54	M 44	第271図	鉄製品(鍛造品)釘	C 2	石組遺構 1	5.5	0.7	0.5	17.4	4	錆化()	上手側に平頭の釘頭を残す釘破片。横断面形は長方形で、やや歪んでいる。足部先端は小さく欠落する。未使用または未成品の可能性あり。	